

白鷺

濡桔梗 立姿 女扇子 鷹の一軸 銀砂子 懷中繪具

二階の癩 流動物 後朝 薄い蝶々 火の接吻 兩方

電話 食箋 無念 蟲籠 廻舞臺 迷の辻 なよ竹

序

この頃人に誘はれて、京へのぼつて狂言見た、さす手ひく手に川鼓、祇園の窓に千鳥鳴く、妹がりならねど置炬燵の轉寢の夢さむれば、東都の朝は雪にして、白鷺の校正も三寸五臺と積りけり。勝手口には借金取、傍には春陽堂の居催促、どうしてくれると寝間着のまゝ、思ひ遣る瀬の障子越、梅ヶ香とめた雪模様、姿の派手の意氣張ながら、一枚小袖の膚薄き江戸の藝者に綿着せよ。あれちらりと倅が、倅が。

明治四十年庚戌年二月

鏡 花

濡桔梗

一

蚊帳の中でフト目が覺めると、もそくと何やら居る。……恚う、圓いやうな、角のあるやうなもの、内か外か布目と擦々な處に踞んだ形が、敷居際に——次の室を開放して——置いた洋燈の明で、朦朧として見えた。

目の覺めた咄嗟に、大きな猫だ、と思つたが、何うして、それ處ではない。やがて蚊帳半分の上へ伸張る一物。さては強大な化……猫の方が可い……猫に成れ、猫に成れ、呀！人間は尋常でない。

白
「誰だ！」と怒鳴つて、足を投出したまゝ、體操をするやうにギクリと起きたが、半ば夢中で、
「確乎おし、姉さん。」と勇ましく言つたものの、實は其の、少からず聲が震へた。
義理ある兄は、九州地方へ旅行の留守。姉と、書生さんと女中三人の中へ、私は自分の家を、

勘當とまでも無いが、近頃以ての外不首尾にして、姊のお稻が縁付いた雜司ヶ谷邊の此の義兄の住居へ當分居候の身の上だつた——新曆の盆の十三日の夜の事。

夜半の寢覺に、外の其の影法師が人間と知れると、一ツ蚊帳に寝た姊の身が憂慮はしい。男は取組んで負けても其れまでなり、釣手を切つて落されたら、差上げます、差上げます、と大藤内で居れば助かる。が、若し狙はれたものとする、枕を並べた龜菊は其れでは濟まぬ。親身の姉だし、怪我が有つては、第一義兄に對して顔が立たぬ。で、何んにせよ格闘に及んで命の取遣り……と成ると、取る方の手心は生憎更に無い。止ぬる哉、生年二十有六歳にして、未だ絡まつた情事も無いのに、此後厄が一命に係はるか、と赫と熱く成つて慄然とした。

「孝さん、何です、失禮な。」

と、枕の上で姊が言ふ、唯見ると此方を背に、蚊帳越の其人影に向いて横に寝た。搔卷を裾に、仄に、薄いお納戸の博多の巻帯の見ゆるまで、半身、これもお納戸地に白で千鳥の中形の浴衣の、寛いだ襟を搔合はせて居る處で、

「御挨拶をなさい、國手ぢやありませんか。」

と言ふ聲の、太く弱々としたのに心付くまで、漸と氣が鎮まつた目に、蚊帳の外白い姿が、金盥で手を濯いで居るのが分る。

「何うかしたのかい、姊さん。」と毛布を刎ねて驚いて坐つた。

「あ、急に鹽梅が悪くつてね、……夜夜半お氣の毒だつたけれど、國手に來て頂いたんです。」と、後れ毛を搔く手が白い。

「別に御心配はありません。一寸時候にお中りなすつたんでございませう。」

「水を飲むからです。」

私は今のお醫師の言葉に大いに安心をして蚊帳を出た。

「腹が痛むんだね。」

「否、大變に悪寒がするの、今しがた、はッかりへ行つて歸りがけに。急に、」と言ひ懸けて、ほとと呼吸を吐く。

「何しろ食べますぜ。晝間客があつて鮪でせう。其も海苔巻ぢや我慢が出来ないで、鮪のばかりを退治つけます。それから葛餅を冷して食べて、氷の溶けた處を狙つて、大湯香でごく／＼ぢやありませんか。間には鹽煎餅を嚙つて、絶えず掘井戸の水を飲む。御飯と言や、香の物でお茶漬で、え、……と、確か晩に冷奴を遣りましたね。私には知らせないが、堅豆も屹と頬張つた——何時でも火鉢の抽斗に絶やさず有る。お刺に日が暮れてから、お精靈棚の前で、何か話しながら、晩方裏の百姓家から貰つた唐黍を附焼にして食べる、と言ふから、食べるならお食べなさい。活

驚 白

しちや置かない、と漸との事で留めたんです。あの時、あの唐黍を横嚙りにして居て御覽なさい。病氣どころか生命はない。何うです。」

と言つて、お醫師に辭儀をして、

「何うも失禮しました。實は寢惚眼に、盜賊だと間違へましてね、怒鳴つたりなんかして……」

二

姉のお稲は情ない笑を漏らして、

「嘘ばつかり。國手、串戯でございますよ。」

「はあく。」と意味の無い返事をした。お醫師と云ふのは、眞鍮の金具で襟を引詰めた、眞白な一寸見ると看護婦のやうな服を着た、頭髮を長くべたりと頬に掛けた、色の白い、眉の優しい、近邊の何某醫院に、見知り越の代診さん。手を灌いだ指を、打診の風で掌へトン／＼と當てながら、

「孰らの御婦人も皆御不養生です。はあ、何、何の道御憂慮はありません。何しろ、頭をお冷しなすつて、足部の、え、裾の方の冷えないやうになさいます。頓服を差上げますから直ぐに召飲つて、水薬の方は明朝で可うございます。いづれ又お見舞ひ申しませう。お大事に、はあ。」と

慇懃に挨拶する。

「夜中恐入りました事。」と姉が、なまけものの手習草紙へ水を流した風の、くの字に起る。

「何ういたしましたして、お大事に。」

「では私が一緒に行つて、お薬を頂いて來ようよ。」

「否、今小川さんが歸るから。」

「あ、小川君は？」

「氷を買ひに行つたんです。お薬取りはあの方に頼みますから、孝さんは、少し冷す方を世話して下さい。」

女中は又朝が疾いから起すのは可哀相だと言ふ。

「可いとも、松は寝かして置く方が可いやね。……其れでは直にお薬を頂戴に出る事にいたします。」

其處で、代診を送り出した。……書生さんは、氷を買ひに急いで駈出したものらしい。格子戸はびつたり締まらず、八九寸開いたまゝで、戸外は眞暗。ぶはく、水氣を帯びた生温い風が吹き込んで、上框に差置いた洋燈の火を黒く赤く煽つて居た。

白 驚 俥は無しに、馬乗めいた柄長な提灯を提げた代診の白い姿が、門の櫓の下を出て、竹垣の外へ

消えた、と思ふと、風は然う温いのに、怪しからず寒いまで身に染みた事がある。
其れは、竹垣の内から木戸を透見する状に、暗にも白く咲いた、桔梗の花。——眞夏には雪のやうで唯清らかに涼しいが、盃蘭盆の昨日今日、二三輪早咲の、俯向き勝な姿を見れば、魂棚の燈明が仄かに照らす影寂しく、白の上下を着たやうで可哀さは朝顔の眺めに優る——白い桔梗の其の一本。

此の花は、誰の記念と云ふでもない。姉が夕暮を漫歩行きの序、去年の春の晩方に、近所の植木屋から杜若と一緒に買つて来て、木戸の内へ、蝶の枝折に植ゑたと云ふ。太くはないが、見上げるやうな櫛が茂つて、日の光が十分に射さないの、杜若は葉ばかり伸びた。其の紫を預かつたか、純白な花瓣に、蕊が颯と淡い浅葱に藤色を宿して咲く。……情らしく優しいのが、今年は丈も伸び、莖も数増し、添竹をしないでは、倒伏すまで小枝茂り、數の苔を持つたのが、三輪ばかり、此の一日二日に咲いた。

宵暗の雲低く、一雨はらくと来て、木の葉をこぼる、幻のやうな雫の立迷ふ時、迎火の煙が下臥に、末が蒼く、木戸に流れて、其の白桔梗の花を繞つた黄昏の状を、ゆくりなく此處に思ふたためである。

固より忘れて居たのではない。其の時、其の煙の中に、悄乎と立つた美女の姿は、代診の影に怯かされて、姉の病氣に目の覚めるまで、夢にも見た。

何を祕さう。其の美女と言ふのは、本名お篠、藝者に成つて小篠と言つた。義兄の戀で、然も最う亡くなつた婦である。

とばかりでは何やら怪しい。

十三日は誰も知つた、盃蘭盆のはじめと言ふので、朝の内姉が雜司ヶ谷へ墓參をした。義兄の家は稲木氏で、故郷から祀を移した先祖代々の墓が其處にある。

三

「孝さんは何とも無いかい。」

私も墓參に同道した今日、朝の内。歸つてから、

「お精靈様がお借りなすつたと見えて、私は大變に足が重いよ。」

といそ／＼しつ、佛壇に鳥の羽の拂を當る。其れから、お輪塔、燈明皿に磨きを掛けて、眞菰の壘、ませ籬を引結へ、素麴の白簾、奥深く、小笹の篠竹を兩方へ、冷しさうな蔭を拵へ、雀の宿に生ひさうな、小さな瓢と酸漿を掛けて、巻葉を添へた蓮の苔、ト池を蟻螂の泳ぐ形に、眞菰で編んだ馬を据ゑた。

釘を刺すのは、二三本手傳はせられたが、後は女中の手も借らずに、一人で、襷掛で働くのを、背後から見ると、襟は恠う云ふ時汗ばんで尙白く、淺葱の扱帯が一際涼しい。

誰が目にも、此の人を學校出とは思ふまい。我が姉を言ふではないが、嘸見たら喜ばれよう、舅姑の無いのが借しい。姉が縁付いた時、義兄の両親は最う故人で、唯一人祖母さんが有つたが、一昨年其れが亡くなられた。其の老年が居らるゝと、圓鬚を撫でたさうに、ほく／＼されるのが目に見える……義兄は留守だし、姉も張合は無からう……精靈たちが負ぶをするので足が重いと信する人でも、誰の姿も見えないから……いや、又見えては異事だが。

私は相槌を打つ氣で、魂棚を其の、ませ垣越に差覗くと、日はまだ入らなかつたが、早何となく、瓢の蔭は薄暗く、蓮の苔が白かつた。

「姉さん、足りないものがあるね。」

姉は火鉢の傍で、蓮の葉に團子を装つて居て、

「否……あゝ、燈籠だの、溝萩だのかい。其はお迎へ火を焚いてから、お佛壇へ飾るんですわ、茄子の細切も其時一緒よ。」

「何ね、茄子は茄子だけれど、あの芋殻の足を刺した茄子の牛と、白瓜の馬の事さ。」

「そりや、お歸りの時お乗りなさるんだわ、今ぢやないの。」

「成程。……しかし何だね、此眞菰の馬にしる、茄子の牛にしる、足が短くつて、熊か、猪見たやうで、而して牙もなし、角もなし、押放出しても、溫和くて柔順らしい處は、婦人のお客様が横乗をするに、恰好だね。」

「然うだらうか知ら、」

「眞個だよ。姉さん、其れは年寄つた人は構はないけれど、若い婦なんざ、幾らお精靈だつて、跨いで乗るのは困るだらうではないか。」

姉は一寸私を見た。

「孝さん、」

「何、」

「お精靈様に少い婦の方があつたの？」

「さあ、何うだか精しくは知らないけれど、此の稲木の家の、先祖代々の中には、少くつて亡くなつた婦の人もあらうと思つて、」

ト見ると姉は俯向いて黙つた。手でする業を凝視めるやうに、睫毛を濃く俯目に成つた。

白

「……話を反らして、
「や、御馳走々々。生菓子に、水菓子。」

「あら、孝さん、お装物を撮んぢや不可なくつてよ。」

「可哀相に、源兵衛堀の河童ではあるまいし、精霊茄子を狙ふものかね。だが、何だね、葛餅に砧巻、……は是非がないとして、桃に枇杷、……餘りつい通りだね。」

「だつて、他になかつたんだもの。」

「場末だからね。」

「はあ、何うせ場末よ。」

「御免下さい。直に然う仰せられますと、眞に居候が居辛くなります。」

「否、串戯は止してね、毎日取替へて上げるのに、水菓子と同じものばかりで困るのよ。バナナや、パイナップルは西洋くさいから、内のお客様には何うだかと思ふし、李も粗略でせう。然うかつて西瓜も困るわね。」

「實際、釣鐘を突込むやうで亂暴だからね。」

「あ、それに、そんな大きなものを載せた日には、佛様がお坐んなさる處がありはしない。」

「……櫻之實におしよ、……だから、櫻之實が可い。」

と言つて、密と姉を見たが、女中が何かする臺所に目を使つて、氣が付かぬらしかつた。……

立 姿

四

迎火は疾く燃して、送火は遅くすると、姉は其のつもりで立働いたが、臺所の人も居る……晩飯前に急々しては、却て粗末に成らうから。

で、膳を片附けた後を颯と掃出す、と西日の落ちた夕暮の疊は、中古ながら冷々と目が透つて、佛壇の前も廣く見える。其處へ塗盆を持つて来て、先づお輪塔を据ゑた。傍へ、例の馬の頭を立て、蠟燭に灯を點け、八葉の蓮華の燈籠を置き、手向の水に、溝萩を添へたのと、蓮の葉に其の茄子の細切を包んで用意したのを、爰で開いて、割込みに盆の上。線香の匂ひを芬とさせて、框の端近へ持つて出る。

軒を離れた檺の下に、焙烙を据ゑて、書生さんと向合つて、芋鼓を折りながら、私は其前から待つて居た。

平時なら、暮果ても未だ薄明りのさす時刻を、雨催ひで、雲が低いから、お互に白地の姿が、ほんのりと見えたくらゐ。

格子戸も框の障子も、其から斜に暗い、佛壇のある茶の間の隔ても、見通しに開放して、燈火は唯一つ、盆の上に蠟燭が、點けたての薄着う、中絶がして、ひらりと赤い。

最一つ赤いのは、線香の火と、而して銀杏返に挿した簪の球で。姉は髪を撫で付けて浴衣を着換へて居たが、墓参やら掃除やら、お磨きやら、……其の間に、これは些と恐縮な、私の事に就いて客があつたり……それ棚飾だ、装物だ、直ぐに膳拵への、一人舞臺の八天下で、嘸疲れたらう。門へ出ようと、駒下駄に、ト素足を載せたばかりで、裳を細く、トンと框に腰を落して、胸をうしろ状に反らしながら、吻と小さな呼吸を吐いた。が、あはれなやうで意氣に見えつ、

「何うもお待遠さまでした。」

「何ういたしました。」

と大きな腰へ拳を極めて、のつそり突立つた小川さんが言つた。

「まあ、と立つて、一寸江一へ手を掛けて、格子外を差覗くやうにして、

「ほ、ほ、。」と笑つた。

「小川君、姉は君、お精靈様に挨拶をしたんだね。」

「やつ、これは何も、

と額を撫でて、

「やつ、是は何も。」と又額を撫でた。

「さ、早くお迎へをしませうね。」

で、背後向きに蠟燭を取つて、袖で圍ひながら、向直つて、格子を潛つて、私と二人、下に並んだ。

亭敷は白く、八方から指のやうに組合つて、火が搦んだら眞赤な梵字に成りさう。

「何方の方から入らつしやるでせう。」

と姉が木戸の外を通を透かす。馬も車もがたくと行交ふ道が、其の宵暗を丁ど途絶えて、風が颯と吹抜けた。

「矢張墓地の方からだよ。」

「ぢや、其方に向いて拜ませう。孝さん、」

「何え？」

「義兄さんは留守だから、貴下は代理に。」と言つて、亭敷を折掛けた長いのを、軽く手に挟んで地に支く。

「姉さん、」

驚 白
私は一寸猶豫ひながら呼懸けた。

「え。」

「……最う一人、違つた方角から来る人を、内へ呼んで上げてくれませんか。」

「誰方。」

と言ふ時、近いが、夜目に、つく／＼と姉弟で顔を見合つた。

「此家の佛壇へ來たい人です。而して櫻之實が御馳走したい。」

「あれ、燈が消えたわ。」

と凝と白い手の蠟を見て、

「小川さん、火燧を取つて來て下さいな。」

「はあ。」

「洋燈棚にござんした。」

五

直に急いで、しかし小川さんは大男だから、ゆつくり腰を屈めて、ぬつと入る。背後から、

「よう、あの……新しいのが可うござんす。」

臺所で、ガタ／＼と女中が皿小鉢を洗ふ氣勢。……沈んだ、陰氣な、水の音。

櫻の葉から、はら／＼と雫が落ちた。

「や、降つて居る。」

と空を仰いで、何んもなく、私は顔を背けたのである。

「お、冷い。」と姉も頸に袖を當てた。

私は立つて木戸を出た。穴に點けたやうな、廂の低い燈が彼方此方。途を切つて、燈と射す。

瓦斯らしい店明りも、一ニヶ處は樹立つゞきの軒の裏を赤く透すが、まだ人通りは途絶えて居た。

「糖雨が降つて居ますよ。木の葉に溜つて知れないで居たんだ。」

と仰向いて掌に受ける内、大粒なのが、ぼつりと交つて、次第に兩脚が繁くなる。

「芋殻が最う濕とりしたわ。憚り様、此方へ下さい。」

と姉が書生さんの持つて來た火燧を受取る。

「お貸しなさい、私が。」

成程、今の間に濕氣が來たか、火燧は四五本あだに消えた。が、豆を煮るに豆殻で、芋殻の火

箸で、下から燃料を透かしたので、風が通つて、鮮紅にめら／＼と火が搦むと、黄色く煙つて赫

白

肩越に衝と火氣が上つて、二階の窓へスツと差出た櫓の、中枝の茂つた葉裏に、薄緑の影が映

す。

「あゝ、美しい。」と見上げた目に、露が懸るやうに濡色が染みて、葉の筋も動くやう。姉は傍目も觸らないで、

「さあ、何方も明い内に入らしつて下さい。」

と前髪を透く指が、撓つて、横顔の眉の端に懸つた時、

「お篠さんも、何うぞおいでなさいまし。」と、言つた。

「え。」

私は自分が呼ばれたやうに、思はず返事をして振返つた。が、何んとなく姉の其の俯向いた睫毛にも、露が宿つたやうに思つて、目を其違つた方角へ外らす……向つて右が、雑司ヶ谷の墓地の方で、左が、其違つた方の、……木戸の内に、白い桔梗が咲いたのである。

翼を開いて、ぴつたりと星を包む純白な蝶のやうに、濡色が仄に光を帯びて、矢羽根薄、絲薄、萩は未だ苔みもせず、常夏は下臥で、唯草の葉の八重葎した、花畑の片隅に咲澄ます。

其の花が、ふらふらと浮いて出て、招く穂も無う靡き寄る薄の葉尖を、ひらりと傳つたやうに見えたのは、吹き亂すほど雨は動かさずに、風が一陣草の上へ來たのであつた。

不意に、はら／＼と網の目を漏るばかり、木の葉の雫が、迎火に降り懸つたので、炎は弗と消

えて、煙が焙烙に浪一打、むく／＼と渦を巻いて、芋殻を潛つて、淺葱に這つて、ほの／＼と濃い葎を傳つて、其の桔梗に絡ふ時、花を薄りと藍に包んで、ぱつと廣がつて、木戸を出て、末は茫と赤く色づいて、向側の藁屋の棟を、半ば幻のやうに劃つて、やがて當もなく空に消える……煙が一幅、心細く行く路に、其ればかり色のある桔梗の花の白い影に、墨繪で描いたやうに竹垣が見えた。其の垣根の、内ともつかず、外ともなしに、すらりと立つた姿があつた。——棕櫚繩の結目は見え、竹垣の竹に、すら／＼と笹の葉の影が浮いて、煙の中に白地の浴衣。裾を草の葉に隠したが、足駄を履いたらう、と思ふほど、すらりと高い脊は、丁ど白い其の桔梗の花が、帯の模様に対応しい。

が、雫するのに濡れもせず、きり、と立つた浴衣の色は、今着下ろしの眞新しく、しつとり姿よく肉の透くまで身に着いたのを、縮緬であらう、と思へば、雪の素足に爪皮の色も鮮からしい。雨支度して宵出の人。顔は見えずに、紺蛇の目の傘。

六

白 驚 恚う、……八分に開いて、其の蛇の目を前狀に翳したが、雨は其處にばかり篠を亂して、蓮の葉を叩く音。……私が何思ふ暇もなく、呆氣に取られながら、立姿の其の腰上げの紐の色が、眞

紅の撫子を雨に濡らしたやうだ、と幽に見た時、スツと傘を窄めて、浅く柄を取つて提ると、草の葉に傳つて雫がばらばらと薄く光る。

其時、くつきりした眉の下に、凜とした清しい目に、身體を引着けられたやうに成つて、あゝ、雪のやうな色は、——最う此の世に居ない、小篠と云ふ其の藝者の顔だと思つた。

途端に、其れが下を向くと、色が颯と蒼褪めた……
愈々其れに違ひはない。

其の人は、何時も今のやうに、俯向くと色が蒼く、正しく見向くと透通つて白いが、仰向けば臉にほんのりと紅潮すのを、座敷で義兄とともに數々見て知つて居る。たゞある時と、笑ふ時と、其の今の如きは、或は悲しみ、或は愁ひ、或は喜び、ものに深く感じた時の様子である。

と然う思ふほど、確に見たが、世に亡き人の、爰に姿を露したのを怪しむまでの餘裕はなかつた。

「あゝ。」

不意に、物驚きをした姉の聲に、氷を浴びたやうに成つて、振向く、と迎火は又赫と燃えて居た。

「まあ、女房さんなの？」と姉の聲は未だ震へ留まぬ。

其れも道理で、丁ど對向ひに書生さんの立つた背後へ、眞黒な婦が來て立つた。……隣が藪疊で、其處と木戸の内の葎めいた花畑との間が、同じ垣一重の細路地で、裏の百姓屋へ出入りが出来る……百姓屋の古女房、澁茶色の乳の下へ、黒い單衣の袖を振れれに卷付た肌腕もやがて半裸體。古湯具の泥足で、立はだかつたのが、目鼻も一ツに大口を開けて、ニタ／＼と笑つた。此で白齒は、恐怖くはなくても可恐しい。

「お迎火かアね。えつへ、えつへ、急に此の空が眞赤に成つたで喫驚して來やしたよ。ひやあ、雨雲に映るだあもの。」

「あゝ、僕も喫驚した。」と書生さんも、はじめて聲を出した。如何にも、此の邊りの農家では、舊曆に盆をするので、樗の梢へ、雨に流れた火の影が、目を驚かしたに無理はない。

これに紛れて、幻の果は見定めなかつた。但桔梗の花が濡増つて、傘に懸るらしい雨の音が、さら／＼と其處に高い。いや、其れも心の迷ひであらう。お篠の靈は、蛇の目を窄めた筈である。私ばかりではあるまい、袂を並べて居る姉も、今の……を見たに疑ひはない、と思つたが、他の事とは違ふ……言出すには又其の機會があらう、と其れなり蚊帳へ入つてからも、黙つて寝た。

尤も私の方が、先に眠つて、片附ものをした後で、何時姉が蚊帳へ入つたか、其れも知らな

つたが、取留りは無いけれども、小篠の夢は續けて見た。
却説、思懸けない、夜半の頃の姉の急病。

「何んな様子だね、姉さん、」

と額を冷しながら私は尋ねた。……追つて蚊帳を通して、天井から絲を下るまでも、些とも疾く、と思ふから、手で氷嚢を壓へつ、言つた。

此より前、代診を送り出して、框から植込みの桔梗を見た時、依然として花が白く、黒い風にゆら／＼と揺惱まざるのみか、軒に傳ふ雨垂の如く、傘にぼた／＼と雫するのが聞えると、濡れしをれて、今も此處に小篠が佇んで居るやうな氣がしてならず。藪疊と暗夜を分けて、白い浴衣に竹の模様で……洋燈の周囲の蚊も酷い。

「お篠さん。」と口へ出たが、思はず其處に立つて猶豫つた。

七

待てよ、宵の迎火の煙の中で、小篠が、生前あんなに大事にした髪の濡れるのも厭はないで、

雨の降る木戸口に、傘を窄めて、私の顔を見て、然も何か言ひたさうに、紅をさしたやうな唇に、胸の思ひの、ぶる／＼と響くのを一目見た。

彼處で挨拶をするつもりであつたかも知れぬ。

其處で、目配せしてでも、此方へ、と言つて義兄の内へ導いて欲しかつたのではないのであらうか。處を、唐突の古女房に驚かされて、氣が散つたために姿が消えて、其れなりに成つたから、日蔭の身の人一倍、遠慮をして居ようも知れぬ。

幽明處を隔つものの、假の姿を露はして、由縁の人に見ゆるのは、唯一呼吸の果敢ない間で、立處に修羅の使者に引立てられて歸ると聞く。

然すれば宵の迎火の、又ない機會に、此方の心を通ずる事が出来ないで、勝氣ではあつたが弱い女の、嗚我が情無さを怨んだであらうと思ふと、言ふばかりない残り惜さは、今死に別れた其れにも優す。

が、雨の音は其處に繁く、傘に灌ぐ氣勢がする。
矢張り居ようも知れない。

白
「お入りなさい、小篠さん、遠慮はないから、」と、我知らず下駄を穿いて出ようとした。
驚
「若旦那、若旦那ですか。あつ、」

と言ふのが洞穴から来るやうで、向側の藁屋の軒下から、暗を切つて、白桔梗の前を躍つて、一文字に木戸へ飛込んだのは書生さんであつた。

「小川君、何うしたんだ。」

「え、最う寝了つて居ますんで。散々叩き起して氷を買つて歸つて來ますと、行きがけには何でもなかつたんですが、此の何です。植込の處が、可訝く氣に成りましてな、變に入り憎いんで、雨は降りますしな。駈出すのには雨具なしが可いんですが、茫乎立つてると濡れますから、向うの軒下へ入つて恚う様子を見て居たんです。

何うも其の、あの桔梗の白い花ですがね、木戸際に咲いてるのがふら／＼風に動いて居ませう。あれが其の何處にあるんだか、可訝いんでしてな。

此の洋燈の背後の處に咲いて居ます。然うかと思ふと……あ、恚う遣つて開擴げて置いた所爲でせうか、むかうの佛壇の下でさ、ませ垣の奥にぼんやりと白く見えるんです。……」

と氷の包みを手に提げながら、雨か、汗か、袂でぐい、と其の額を拭く。

振返ると、佛壇のある唯四疊半が、野原のやうに廣かつた。而して、ものの、草の香が芬とした。

「變だね。」

「え、其れだもんですから、植込から家の中を人が歩行して居さうで——別に其の、氣味が悪いと言ふのでもありませんが、氣に成つて立つて眺めて居ました。……奥様は如何でいらつしやいます。」

「難有う、大した事ぢやないのだつて、小川君、實に恐縮だが、最一つ頼まれてくれ給へ、御苦勞序に、藥を何うぞ。」

「はあ、可うございますとも。ですが、何んですね、此、戸外へ駈出すには威勢よく突抜けて行きますから可いんですが、歸る時は一寸足が淀みますもので、何んだか冷たい蜘蛛の巣が、ひらひらして居るやうで、今夜は變に、植込から掛けて格子の中、佛壇の處が眺められます。

甚だ恐れ入りますが、外から見えますやうに、二階の雨戸を少し開けて置いて頂けませんか。

樹の中から灯が射して居ますと、何となく陽氣で、其處に貴郎方がおいでに成ると思ふと、どんなに氣丈夫だか分かりません。

白 驚
え、夜が明けますと、これでも大分豪傑に成るんですが、夜中は何うも。——殊に此邊です。一軒も起きて居る處はありませんで、五位驚だか嬰兒の夜啼だか、時々、可厭な聲で、ぎやあぎやあ啼くくらのなもんです。何もそんな事ぐらゐに恐れはしませんが、今の桔梗の一件です。……恚う氣を確にして見れば、矢張り木戸際に濡れながら澄まして咲いて居ます。けれども。……」

女扇子

八

「孝さん、」

廳で、蚊帳の中で額に氷嚢を當てながら、私が容體を聞いた時、……直ぐには何にも言はないで、目を瞑つて静として居た……姉は、更まつたやうに呼懸けた。

「小川さんは何うしたの。」

「又藥を取りに駈出して行つたよ、私が行かうかと思つたけれど、」

「然うぢやないの、今玄關で何か話して居たぢやありませんか。」

と病人らしい、物を氣にする問方をする。

「氷屋を起したとき、何處も皆寢て居たさうだよ。」

密と氷嚢を壓へながら他愛のない返事をした。

否、桔梗の花が何うかしたつて、孝さん、何うしたの。」

「桔梗の花が、」

と故と空惚けた風で、

「桔梗の花が何うするものかね。」

「でも、何うかしたでせう。」と仰向けに寝たまゝで細り目を開く。

「何うかしたつて、困つたね。そりや矢張り咲いて居らあね。」

「嘘よ、植込に咲いたのが、佛壇の中に見えたとつて言つたぢやないの。」

「小川が、何馬鹿な。あの大男が、あゝ見えて御存じの通り臆病だからね。お聞きよ、第一草の上を傳ふなんて、風があるから、當然ぢやないか。尤も、ませ垣の奥には蓮の苔があげてある。

其れが白く見えたのを桔梗だと思つたんだらう。……花が其處等を歩行いたり、洋燈の背後に居つたりして堪りますか。」

「可わ、孝さん、祕さなくつたつて。私も見たの。」

「え、見た？」

と膝をすらししたが、又静に居直つた。

「見たつて、何を？」

白
「其れでね、頭から氷を浴びたやうに思ふと、ふらく眩暈がして倒れさうに成つたから、突俯して階子段へ摺つたんです。丁ど此の二階へ上らうとした處よ。」

孝さん、食中毒でも何んでもないの。は、かりでは何うもしはしないのよ。手を洗つてね、女中部屋を手探りで、臺所を通つてさ、六疊の、階下の、お佛壇の前を歸らうとすると、……」と搔卷を上へ引いて、目を瞠る。

私も凝視めた。

「冷い風がそよ／＼と吹いでせう。まあ、雨戸が開いてるのか、と縁側の處を見ると……其れは、大きな蝶々かと思つた。眞白な女持の扇子がね、」

「扇子？」

「あ、扇子、……其の扇子が、葎簀の蔭にひら／＼と動いて居たわ。」

……最う一時に寒くなつてね。而して階子段に掴まつて、わな／＼憊うねえ、船に乗つたやうに震へるうちに、急に身體が火のやうに成ると、段に顔を押着けても、我慢にも立つては居られなくなつて、坐つたのよ。

自分では氣が遠くつて知らないけれど、聲を立てて唸りでもしたんでせう。

小川さんが玄關から起きて来て、喫驚して私を呼んでくれたんで漸と氣が附いてね、……水を下さい、水をつて言つたけれど、矢張り食中毒だ、と思ふんだわね。

と切なさうな笑顔を見せて、

「水は不可ません。醫師を呼んで來ませうツて言ふの。何それには及びません、と言つたけれど、現在戦慄が留まないんだもの。私も心細くなつてね、では願ひませうかつて頼んだのよ。」

お松を起こさうと言ふから、留めるとね、下から幾度も、孝さん、お前さんを小川さんが呼んだけれど、氣が附きますか。」

「いや、何うも。」

「でも、幾干か確乎して……氣障つちやあない、よろ／＼しながら漸々階子段を上り切つたのを見て、小川さんは駈出したんです。」

ね……孝さん、

漸と聞える低い聲で、

「來たんだわね。小篠さんが、」

私は氷囊が血に響く。……

九

驚 白
其の癖、……姉が見たと云ふ小篠の氣勢が、雨の中に入重葎に濡れしよびれて居るのでなしに、六疊の片隅にあつた、と聞くと、其れでは内へ入つて夜露にも中るまい、と何うやら嬉しく思は

れた。

が、熱ある人に氣振にも示すべき事ではない。

「灯取蟲だよ、姉さん、葭簀の蔭にふはく動いて居たのは……灯取蟲には随分大きなものがあるもんです。」

「確に扇子よ、白い處に折目が立つて骨が透過つたのが見えたんだもの。私は其れが小篠さんの身體のやうに思つたの……苦勞をして大層寒れて居なすつた、と云ふから。」

「では扇子さ。扇子なら扇子で可いぢやないか。何も其を瘦せた人だの何のつて、妙に……氣に懸ける事は無いぢやないか。」

「え、私だつて、何も不思議な處に扇子が動いて居たからたつて、直に其れを、あの方だと思ふもんですか。宵にね、孝さん、お迎火を焚いたでせう……あの時、木戸の、桔梗の花の白い處に。」

と息ぜはしさうに言ふ。言葉が途絶える。蚊帳の裾が雨氣を誘つて、颯と煽つて、姉の顔の血の色を拭つて戻つた。

扱は最う祕されない。

「姉さん、可いぢやないか、來たつて可いぢやありませんか。盆だもの、その人たちを呼ぶ爲に

迎火を焚いたんでせう……其れも可厭だと云ふのに、無理に押掛け客に來たのぢやない。姉さんも、お篠さんおいでなさいつて、優しく然う言つて遣つたんぢやありませんか。お儀式立つて是を言へば、え、何とやらして、希くは來りうけよ、と行る處だ……

内の御先祖たちは別として、……知らん顔をして居るより、十萬億土とやらから、故々挨拶に來た處なんざ、さすがに……それ者だ、意氣に感じたと言つても可いね。姉さんが怨まれる法はなし、幽霊……」

「あゝ！ 孝さん。」

「……と云つちや悪い。小篠が宿下りに來たからつて、何も恐怖い事も氣味の悪い事もないぢやないか。」

と密と四邊を見廻しながら、故と威勢よく然う言つた。

「姿が見えたら、（小篠さんか、よくおいでだね。）と言つて遣るが可い。（お稻さん今晚は。）と莞爾するかも知れないよ。」

「まあ、」

白
「否さ、道理がさ。其れで何か筋道の分らない、も、んがあでもして見たが可い、私が付いて居ます。あの人が毛蟲の様に可厭がつた、五坂ツて奴の名を、五坂々々つて三度唱へりや、花が散

るやうに消えツ了ふ！」

「五坂ツて誰の事？」

と少し顔色が直つたので、此方は氣競つて、

「……然る其の會社の重役さ。其奴の爲に、小篠が殺されたやうなもんです。」

「孝さんも！ それは悪いわ。そんな敵見たやうなもの名を言つて御覽なさい。然うでないのでも恐怖くなるわ。」

「姉さんのやうでもない。私はじめ、戀しい人、懐しい人の處へは化けて出ようも知れないけれど、生きてた中にさへ面を見るのも癪な奴に、何、死んでから逢ふものか。……門端を通るんだつて可厭なこつた。」

もしかね、怨みがあれば生きて居る中に晴すさ。其のために出刃庖丁も、爆裂弾もあるぢやないか。

怨めしいッて化けて出るのは、田舎もののお化に限る。……江戸ッ兒の幽霊は、好いた奴の處のほか出やあしない。

だからさ、好かれたんだから可いぢやないか。尤も御先祖代々の精霊のやうに、めでたく往生を遂げたんぢやないから、迷つて居ます、……迷つて居る日には、雨にも濡れようし、蚊も食は

うし……」

と何心なく言出したが、無意味なやうな我が言葉に、つい誘はれて、私は偶と胸がせまつたのである。

十

「縁側に立つて居ると思つたら、可いから蚊帳の中へお入んなさい、と言つて遣るが可い。而して三人で寝ようぢやないか。瘦せても、弱つても、油とは別ツこ、水際の立つた娑婆氣な姉さんが、見得も外聞もなく、孳殻の杖を支いて、とぼく冥土から來たと思へば可哀相です。……而して日蔭の體た、と先祖の位牌へ遠慮から、眞菰の上へも坐らないで板敷に立つて居るんだと思へば、泣いて遣つても口惜くはない。……眞個に懐しければこそ來たんだよ。姉さん、可厭な座敷へ御祝儀に因つて勤めに出る婦ぢやなかつた。だから可恐しい事は些とも無からう。氣にしないで、明日は又御馳走をしておあげなさい。」

白

「可懐しい家だつて、
と姉は臉をふつくりとさして、

「だつて義兄さんは留守の處ぢやありませんか。」

私が義兄さんと言ふにつけて、順一、夫の事を姉が言ふ。

「御當人が留守だつて、私が来て泊つて居ます。第一姉さんの家ぢやないか。其の人が懐しければ續く縁の、弟も懐しからうし、好いた男の細君だ、と思へば、姉さんを懐しがるのは當然です——男にはかり附着いて居たがるのは今時の女學生だよ。姉さん、だから、仲よくしてお遣り。……何んだね、涙ぐんだりなんかして、私は然う云ふ氣で云つたんぢやない、小篠が内へ来て居ても可恐くないと言ふ事なんだよ。」

「……最う何と云つたつて歸らないね。孝さん、……病氣は一寸なんだからね、明日は澤山御馳走をするわ。先刻何んだね、櫻之實が好きなんつて然うお言ひだつたわね。」

「あ、言つたよ。」

「然う、そんなに櫻之實が好きだつたの。」

「何ね、好きなものは、冬が海鼠で、夏は水貝と云ふ氣の無いものばかりだつたがね。其の櫻之實は好き以上の記念があつたのだよ。——あ、其のためには義兄も私も泣いたつけ——矢張り、何んだ。あの人が、御當人は兎も角も、續く縁で姉さん、私たちを可懐しがると言つたやうなわけで。義兄も私も、直接に當人の身の事より、其人の姉妹の事で身に染みたんだね。櫻之實はね、

姉さん、小篠の、何んです、小さい妹が大好きなんだ。」

「で、何うして泣かされたの。」

「まあ、可いやね。」

「聞かして頂戴なね、後生だから、」

「身體に障るよ。」

「構やしないわ！」

「馬鹿な事を仰有るもんです。義兄の留守に、知らないなら格別、私が居候に来て居る内に、此の上、煩はして堪るものか。」

「可いわ、お篠さんの事で、私が煩へば義兄は本望なのよ。」

「皮肉な事を言ふべからず。義兄がどんな氣で居るか、其を知らないお前さんでもなからうぢやないか。」

「だつて水臭いんだもの、」

「何が、」

「孝さんは一緒に遊んで、始めから何も彼も知つて居る癖に、私には秘しがくしに秘してばかりなんでせう。」

「其處は仁義さ。親しい内に禮儀ありだらう。まさか兄哥が恚う言ひました。と小篠が恚やうに申しました、で一々御注進もなるまいぢやないか。其れも品によりけり。内々私、姉君のお手許金でも頂いて、勤番並にしけ込むのを役徳にして、隱目附にでも使はれたのなら格別。何を祕さう反對に私が先棒になつて、兄哥を誘出した一件だらう。」

「呆れるわねえ。」

「一言もなしさ。其の不心得なればこそ、節季前に汚くも敵に背後を見せて、雑司ヶ谷くんだり姉上が御惱氣の看病さ。誰かの癩を壓して遣るのは、些と心持が違ひます。」

「知りませんよ！」

「串戯だ、お身體に障ります。」と、風を分つやうに、團扇をぞ使ひける。

十一

「否、聞して下さいよ。話を聞いて居ると氣が清々するからさ、……え、孝さん、黙つておいでだと、また澤山悪くなるよ。」

と元氣よく寢返りをしさうにする。

「静として居て下さい、氷が落ちます——困つたな、何を話せ、と云ふのさ。そも馴染のはじめ

かい。」

「あ、」と眞顔で言ふ。

「其奴は些とあやまつた。小篠ばかりなら可いけれど、先祖代々がお客に来ておいでだらう。義兄さんの方の目上だからね、御當人は留守でも、私の口からだつて些と言ひ兼ね……お待ちよ、今度庚申様の晩にしようぢやないか。」

「厭よ、聞かさなくつては。だから櫻之實が何うしたのさ？」

「あ、皆なで泣いた一件かね。何さ、是を要するに、お錢が無くつて買へなかつたと言ふ、しみつたれな話なんだよ、詰らない。」

「詰らなくはありません、聞かせて頂戴。」

とやゝ急込んだ調子で、少し顔の色を赤くした。裾を引いて拗身に身を捻りながら、

「小篠さんも来ていらつしやるならお聞きなさいよ。何故、私ばかり他人にするの？」

「分つたよ、分つたよ、——ぢやお聞きよ。……梅雨前なのに、厭にじめ／＼と雨の降續いた頃だつた。其の日は珍らしく朝から歇んだ。尤もどんより曇つてね、餘り當てになるお天氣ではなかつたのだよ。勿論ね、お天氣に因つて、何うの恚うのと云ふ分別の有るのぢやないから、日が暮れるのを待兼ねて、或家へ出掛けたとお思ひなさい——但し此の處私の事だよ。……御心配に

及びません。尤も是より先、既に兄哥が先駈をして居たのだから、何んにもならないにはならぬ
いがね。

でも、まあ、分別のないと云つたあたりは、私の事だから、其の積で。
可いかい。

お定りの軒燈……柳はなしさ。で、一面の磨硝子で二枚の格子戸と氣取つたんだが、氣に成る
のは、一枚ばり、と来て、ぶる／＼と疵が入つて居ます。何時中取替へたつげが、又壞れたんだ
ね。何んだか何うもね、是を見ると、敵が門際まで押寄せて、四王天但馬守が大磐石で一當當て
て、本能寺危しと云つた氣がする。要害堅固ならずだから、一杯飲んだ勢を借りて、

(あれは修したら何うだい、何となく心細いやうな氣がするね。)と云つたんです。鹿を追ふ獵師
山を見ずさ。……其では何うぞ、貴客が御寄進に附いて下さい、と言はれて御覽、……杯の遣場
を失つた處。其の待合の女房も、餘程持餘して居たと見えて、

(近所の小兒衆が、やあい、と云つて石を打附けるには困るんですよ。……一日に三度ぐらゐるは、
此の貴客大きな身體で、怒鳴りに出ます。)と云ふ、重量が十九貫六百目かゝるとさ。でつぶりと
頬肉の餘つた中に、鼻がござ候て、眉がちよんぼりと下つて、目がくるツとある。これが、抜衣
紋の襟白粉で、消炭の縮緬、五ツ紋の羽織を、不斷着にだらりと羽織つて、

(一寸近所へ用たしに……)を口癖のやうに云つて、二重顎をト突出して、猪首に丸鬚の鬘をビ
ンと反らす工合が、喜劇だね。

借があつて催促をされるために、悪く言ふのぢやありません、俗に是を福相と言ひます。

福相……だからこそ房州出の女中から仕上げて、兎に角一軒の女將となつたんだね。何うです、
此の女を女中に使つて居た、歴きとした料理屋の娘と言ふのが、小篠なんぢやないか。

姉さん、人間は肥るに限るね。

え、とソマトーゼの廣告ぢやない。何の話だつて。然う／＼、小篠の臺所に使はれて居た女
中が、兎に角一軒の女將になつたと言つたつげね、門硝子は破れて居てもさ。

處で、私は待合の門を破る、小國民の意氣を感じた。男兒少くとも其意氣を棄てずんば、富國
強兵疑ひなしです。

さあ、又話が外れた、然うだ。私其硝子戸へ差懸つた處だつた……別に其破れ目が伯父さん
の顔になつて睨みもしないから、憚る處もなく、がらりと開けて入つたり。」

「處が、聲を聞付けて、直に、入らつしやい、さあ、此方へ、で、女中がはらくと出迎へる、と云ふ御祝儀は出て居ません。尤も、腹にも、背にも、澤ちやんと云ふ、少い女中一人なんだがね。」

差懸つた三和土の土間へ、がらんと一人突立つて、大きな下駄箱……ぢやない、棚です。棚も押入と稱して可い。可い加減な湯屋の衣類棚ぐらゐあつて、泥のついたのも、金のついたのも、腕車の蹴込から直ぐに燃立つやうな緋縮緬に包まつて宙を通つた魔性の靴も、一緒に雲隠れをして、中にも聲を忍んだまゝ、白い手で突込むのもある。——其の下駄棚の側に、雨受けの鉢があつて、杖が一本入つて居た。他は綺麗に片附いて、空家でございませう、と云つた風です。早速目に付いた其の杖だがね、姉さん、見覚えのある代物でせう。

（はあ、佐々木高綱拔駈けに渡つたな。）と其杖を一寸持つて、柄の處を捻つて見ると、くるりと廻つて、金具の下が反古紙で巻いてある……蓋し小川君の細工だね。……義兄さんの代物に相違なし、且以て山の手の住人たるを知るべしだから可いぢやないか。

凡そ這の間の消息は、姉君と雖も御存じあるまい。一緒に其處等を散歩すると、義兄さんが癖として、杖をくるりと振廻しながら歩行く。……山の手も、牛込や、麴町の人多い處ぢや出ない藝で。何でも代々木か、雑司ヶ谷、大久保邊に限るんだ。處で、取手が抜けた奴を、反古で緊めた一件だらう。恚う、引張つて見てね、ぐらくと来た時は、一人で吃々と噴飯したよ。……姉さんの前だけれども、以て木挽町邊の装鹽を引掻き廻さう、と云ふ金棒ぢやないね。

（何をしていらつしやいます。）

と和りと笑つて、右の澤ちやんが框へ出て手を支いた。

これより先、帳場から女將と二人で、緞賣か、花會の若衆か、などと物色した事宜しくさ。

（座敷は、）

で、勇士は最う此處に及ぶと、梓弓ひきは返さじ、構はず侵入に及ぶ。

（御一緒？）と澤ちやんが立話して低聲で言ひます。

（別が可い。）

（おかみさん。）

（奥の六疊へ。）と聲を懸けながら、障子を開けて、一寸、袖口で、開けた兩方の障子を壓へて、

ニタ／＼として、二重頤を俯向けにしゃくつたもんで、

(おや勝田さんお珍らしい)……さ。

お互に、内は大した系圖でもないけれど、扱あらたまつて饒舌ると成ると、此の口から呼懸けられるのは、姉君の御耳には恐縮です。

(何う致しまして、確か昨夜も縁日。)と其の實てれ隠しを言ひながら、先づ浮んだ、と思つたのは奥の六疊。

お天氣の模様で、これが二階の六疊となると恐れるんです。何も見晴しが何うの、疊が恠うのと云つたわけぢや無い。其處の置床に懸けたお家の一軸と云ふのが難物でね——先づ落款が蕪村としてある。墨繪に贊があるんだ、處が其の繪が傘さ。だけれども形が可笑い。塗笠に柄を突透したやうな異體なのが、筆の力と云ふのかね、ひよい、と中天へ飛上つて、岩藤の亡魂が宙乗をしたやうで、轆轤の處へ巻物が一卷結へつけてあるんです。其れへ、ばら／＼と雨の降つてる段取、唐には、こんな仙人が有つたとさ。

贊の發句が、これが又一字も讀めない。何時かも義兄さんと二人して、小半時考へたが、何うしても判じが附かぬ。さ、此奴を凝と視めて居ると、何んとなく身の上が覺束なく心細くなつて、自然に鬱いで來ます。何故か世の中が果敢なくなる。

(何うだい、二歩づ、出しつこをして、何か奢つて、此の懸物を撤回させようぢやないか。)

と義兄さんが發議をした事もあつたがね。女將の亭主と云ふのが、色白の優男で、鳥雅とか、青里とか、異に雅號があらうと云ふ人物、近頃蕪村を心得て居るから始末が悪い。

十三

「先づ此方は助かり。義兄さんは、二階で蕪村の化傘に對して配所の月を見るかな、と獨りで可笑く、奥の六疊と云ふのへ、大得意で通つたんです。此の、小座敷の懸物と云ふのが、又お極りで、極彩色の鴛鴦なんだね。

大粒の雨の中の化傘に向つたのと、極彩色の鴛鴦を背後にしたのでは、頂から男振が違ひませう、姉さんの前だけども。

屹と今夜などは、先様待兼ねの時鳥、かけたら飛んで來よう、と食卓に頸杖か何かで、銚子を運んで來る澤ちやんに向つて、

(何うだ、逢ひたかつたらう。)なあんのつて沓えて居る。

處へ右のね、十九貫六百目が、消炭色の羽織を衿長にぴらりと着て、のし／＼と出て來ます。(艶麗なもんですな。)

(お極りを言つてるよ、此の人は、)と乳の脇からのたり出すやうな手つきで打つ眞似をする。

(だつて大粧飾ぢやないか。)

(一寸近所へ用達に。)

と、それ言ふのさ。

(何は？ 來てるかい。)と目で二階を聞くと、二重願を膨らませて、下目で頷いて、

(先刻からお睦じいよ。)

(あ、羨ましい。何時でも然うだ。二階のは、直に來て忽ち二人と成るんだが、私の方は待つ身に辛き……もまだ置炬燵でもなし、胡坐を掻かうよ。)

(何です。貴下は、今來たばかりぢやありませんか。……それに雛ちやんと、お嬢さんとぢや、宵から賣口が違ひますもの。待つ間が花だわ。)と云つて、落語家が煙花の仕方の手附で居る。

姉さん、大抵御察し……以前、此の女將が奉公をした内の娘だから、お嬢さんは分つたらう。

曰く其のお嬢さんと稱ふるにつけて、事實敬意を表するの、内々侮辱の意味を籠めるのかは、別に説ありとしてだね。雛ちやんと云ふのは下へ(子)のつく、其こそ令嬢と云つて然るべき、優

容づくりの姉さんで、實は……」

姉は目許に微笑を泛べた。

「まだ、まあ、お聞き。其の十九貫の云ふ事を。

(其のかはり、働きが有るんだもの、貴郎はあやかりものなんだよ。)

私は故と他を言つたさ。

(お嬢さんは景氣は何んだ。)

(薩張……)

ぶる／＼と願を掉つて、

(中年からの藝者でせう。お座敷に、そりや骨が折れますさ。骨の折れる事は、あの人も覺悟をしてはじめた事ですからね。其れは承知の上として、其の骨の折り方ですね。いくらお嬢さん藝の長唄に精を出したつて、今時何うなるもんですか。)

づば抜けて可笑な踊でも踊つて景物にするとか、幾干でも宜しい、安く稼ぎますから何うぞ、

とても云ふ事なら、年増の不見轉で、また待合でも一寸重寶がりますけれど、あの通りの我儘で、御存じの毛嫌ひが酷いんでせう。尋常に稼ぐ處か、貴郎、悪く口説きでもしようものなら、突然

轉転をくる／＼と緩めて、(然やうなら)だからお察しものです。其れも可うござんすさ、其の我儘が通されるやうな、後楯の歴平とした旦那でも有ればだけでも、誰が貴郎、お前は言ふことを肯かないから、世話をしようつて、何するもんです。

困るのは當然でさ……殞えるのは借金ばかり。此處きりのお話ですが、

と目を細うして鼻を俯向け、ドタリと坐つて、低聲に成つて、

（私が判をつけて居るのばかりでも、一口や二口ぢやないんですよ。催促なしの出た處勝負、有つたら拂ひ、と云ふ金子なんぞ、何處を探したつてありませんからね。……いづれ、さあ／＼さ……ねえ、貴郎、返事は何と、と來るんでせう。）

と薄笑ひで、

（其處は、それ、私だつて、武士は相御互と思ふから、精々藝の佳い事なんか吹聴して、とづんぐりした腕を撫でてね。）

十四

「だぶりとした乳を壓へながら、女將が、

（……執持ちをして遣ると、お思ひなさい。明六つの鐘を合圖に退引ならぬ、と云ふ金子を、耳を揃へて、其處へ積んで、一寸目をお瞑りよ、往生して。然うすりや愛宕の山に居て、京のお祭禮が見られる、と言つて聞かしても、相談が出来ますか。頑固の、没分曉の、我儘つたらないのですからね、困つちまふぢやありませんか。）

（困つたね。）と唯言つたもんです。

（眞個に困りもんですよ。……其れぢや身體一つだつて不斷着もむづかしい處へ、親はあるし、姉妹はあるし、皆な幾干かつ、貢なけりやならないんでせう。——意地が意地にならなけりや、清いが清いにならないわ、貴郎。）

お庇で、迷惑をする上に、内だつて幾人お客を遁したか分らないんですよ。此の盆前には、いづれ何うにかしなかつた日には、お互に立つ瀬はない、些と稻木さんが、……

と言ひ出した。姉さん、耳に蓋をしてお聞き。義兄さんから小篠に異見をしたら可からうと云ふんです。

（あの人のためを思つたら、言つて聞かせて遣ると可いわ。）

（何と言つてさ。）と故と聞いて見た。

（何と言つたつて？）

と怪訝な顔で居る。

（不見轉をしろつて勸めるかね。）と、人事とは思はないから、些と中腹で當つたんだが、時候に障つたほどの顔もしない。……肥つてるお庇だね。

白 驚 （だつて、然うでもしなけりや立行かないぢやありませんか。）

(「おや、何かい。……まあ、一つ上げよう。）」と杯をさして、

(「女は、立行かなくなると不見轉をすれば可いのか。」)

(「可いつて事もないけれども……でさあね。）」と胸を引込ます。

(「まあ、仕方がなく遣るんだね。」)

(「其れでも、お女郎よりは勝でせうさ。」)

(「すると女將、困るとなると、君も行るね。）」つて苦笑ひをした。喧嘩をしたつてはじまらないから。

十九貫六百目、肩のあたりへ揺をくれて、

(「可哀相に、これでも藝者ぢやありませんよ。」)

(「は、あ、」)

(「何うにか慪うにか、世帯を持つて居ますからね。」)

(「成程。」)

(「ねえ、貴下。」)

(「成程。藝者はみじめなもんだ。」)

(「其處へ懸けちや、」)

と笑顔に成つて、

(「雛ちやんなんざ、同じ藝者にしても働きもんですよ。若いのに自前でさ、立派に親兄弟を立養ひにして、衣裳はあるし、指環はあるし、債券は買つてるし、……眞個に貴郎は、あやかりものさ……然うだ、」)

と急に思ひ出したやうな素振で、

(「早く並べて置いて、あやかりませうよ。どう、最う一度催促して、序にお銚子を。」と云つてズイ……とは行かない。其の貫目で、内端に軽く行らうとする。故と尋常に襖を細目に開けるから、どたくくと鳴つて腕いて出る。」)

後にね、其のあやかりものと言ふのが一人。』

「孝さん、」

と姉が呼んで遮つて、

「櫻之實は何うしたのよ。」

白 驚 「今電話で水菓子屋へ然う言つてあらあね、そんなに急ぐもんじゃない。綱曳で來るつたつて、凡そ途中と言ふものがあります。いつれ催促はするけれどね、まあ、お待ちよ。——後に其のあ

「やかりものと言ふのが一人さ……」

「最う澤山よ、お前さんの方は抜きにして頂戴、後生だから。」

「蕎麥屋ぢやあるまいし、ぬきだの、こみだのツて、そんな勝手な。」

「だつて、私、頭痛がするもの。」

「恐縮！」

とちやんと成つた。

「氷を入かへて来よう。——困つたな。小川君が最う歸りさうなもんだね、一人で居て恐くはないかい。」

「否、澤山苦勞をしないすつたやうだわね、小篠さんが見えたら、さすつて上げるわ。」

「悟つたね、大丈夫だ。」

十五

「何うです、姉さん、ものは氷にしろ、待つてる處へ、恙う蚊帳を揚げて入つた處は悪い氣はしますまい。況やだね……早く十九貫のお説の通り、並んだあやかりものに成りたい、と思つてね。卓子に腕をつけて、獨りで猪口を持つたま、振向いて、フト其の置床の懸物を見るとね……變

つたよ。鴛鴦ぢやない。向うにこんもりと竹が見えて、縁側の端が一寸ある處へ、炭團火鉢を置いて、一燻し蚊遣をした淡彩色の繪なんだがね、唯口で言ふやうなものぢやない。其の煙の元が淡く、末がむら／＼と濃く靡く。下伏せの火が、色が軽く、新しく颯と薄紅に成つてる處が、まざまざと風が當るやうで、竹の中には月も露もありさうな……如何にも意氣に清涼しい繪に、紅一色と云ふんです。一目見た處で、氣も爽快になる……勿論、化傘の比ではない。

はてな、誰が描いたのだらうと、固より心得のある私ぢやないが、落款を見ると、白鷹としてあるんです。伊達先生の描いたんぢやないか。」

「先生の畫が、何うしてね。」

と姉も耳を欬てた様子で、

「そんな處にあつたらう。」と額の氷囊に小指を當て、仰いで目を睜つて私を見た。畫伯——伊達先生は義兄の師匠で、既う故人になられたが、近代の巨匠であつた。……義兄は稻木順一と云ふ其の門生である——私の姉は仔細あつて、其の先生の媒妁人で、亡くならる、前一年、義兄と結婚したのである。

白 鷺

と云ふ縁故で、私たち姉弟も、よく先生の事は知つて居る。……

「後で聞くと、其の晩、化傘より先に矢張り、此の座敷へ入れられたんだが、先生の繪が懸つて

居たので、魔除けの御符に逢つた形で、順一さんがね、慌てて二階へ退散をしたんださうだよ。
——其癖、此の掛物が、と云ふと、持主は小篠でね、——其れが大事にして居るのを聞いて、十
九貫六百匁が立過ごしの色男、即ち當待合の内縁の亭主が、一寸見せておくれか何かで、小篠に
借りて掛けて置いたものなんです。」

「ぢや、あの方の持物なの、先生の繪を大事にして、感心ねえ。」

「今さら感心するがものはありません。お篠さんの身に取つちや、御家の重寶、鷹の一軸と云ふ
のだからね。實際御守護札以上のものだよ。」

「然うして見ると、何かねえ、あの方が故の先生を思つて居たと云ふのは、眞個なのかね。」

「仰にや及ぶべき。……だから、姉さんは何も心配をするには當らないと云ふんです。表面には
順一さんが、何か、色男のやうだけれど、其の實、お篠さんが先生の、惚話を……と云ふと些と語
弊があるね、……其思ひ出さ。追憶談だね。其奴を神妙に承はる對手なんだよ。順一さんは——

神妙に承はる……其處へ、あの人が思ひついたものなんだ。妙な思ひつきも有つたものだけ
ども。しかし考へて見れば無理もないね。現在生きて其處に居る人なら、饒舌の方でも張合はあ
るし、又聞く方でも假令はぐらかすにしろ、中てられもすれば、受流しもし、擦抜けもしようと
云ふものだけれど、死んだ人ぢや、對手が團十郎プラス菊五郎で、お篠さんが、あの容色でも、

繪に描いた道行か、芝居の濡れ場を見るやうなもので、何うしてくれと云つたばかりで、二番
目の鮫を平氣で突つかうと云ふもんです。

其處へ行くと、順一さんは親身さ。伊達先生と、一聲懸ると、坐り直らうと云ふ人だから、話
にしんみりと手應へがあつて、泣きも笑ひも出来ようと云ふわけだから、しばらくも先生の事を
忘れられない人は、片時も又、順一さんに離れられないやうに成つたんです。不思議な縁ぢやな
いか、え、姉さん。」

銀砂子

十六

爾時搔摘んで姉にも話したが、小篠と順一とが、顔を合はせた、抑が、既に、伊達氏の事に就
いてであつた——又それ以來の筋道も、順一の口からも聞けば、私が自分にも見聴きして、大概
は知つて居る。……

白 驚
昨年の秋は、伊達氏歿後、義兄が初めて、稻木順一と署名して、上野に於ける、某展覽會に
出品した。其の繪で金牌を得たのを、先生以來の知己で、最良で、また保護者の位置にもあつた、

下町の津川と云ふ商家の主人が、義兄のために祝意を表して、少數ながら、八九人、其の同好者を集めて、築地邊の、砂子と云ふ待合で、小宴を開いた事がある。

順一は、其の近所と思ふ停留場で電車を下りたが、軒ならびに瓦斯燈の掛つて居る構ではなく、横町へ入つて、も一つ枝路へ引込んだ、物静かな、寂とした奥深い家だったので、其の門を潛るのに、通り過ぎたり、引返したり、忍び返しの附いた舟板塀を見たり、瀬戸ものの女名前の門札を見たり、俳優の家を知つたり、間に水を眺めなどして、二度聞いて漸と入つた、と言ふ。

未だ夏座敷の、葎簀を入れた上り框が、人待顔に半開いたまゝで、高い沓脱にも、三和土の上にも、薄暗く水を打つてあつた。

蹠音を聞きつけて、……同じ簀戸越に拭込んだ縁が透いて、細い中庭と、青々とした竹垣が、其れも涼しい、庭に一鉢、小さくなつた白い桔梗が可哀に咲いた……其の花を袖で隠して葎簀の蔭へ、青味がかつた浴衣で、雪のやうな爪尖で、髪が黒く、すらりとした姿が、水に映る影のやうに露れた、と見ると、……すつと出て、前と後と葎簀の中へ細りと膝を支いて、澄ました、落着いた態度で、恠う、見迎へるやうに顔を上げたのが、中高にくつきりと白く見えた。

「津川さんは見えて居ますか。」

と順一が、其商家の主人の名を云つて聞くと、朗かな、幅のある聲を引締めたやうな沈めた調子で、

子で、

「あ、」と云ふ時、片手を膝の先へ、片手を反らして一寸疊へ支いて、

「先刻から……お待兼でございます。何うぞ。」と立つと、鬢の毛を洩れる耳許の清らかな横顔に成つて、可なり広い階子段を、前へ立つて、順一を導く。

順一は直ぐに、待構へた一座へ入つて、其れなり挨拶に紛れたので、座蒲團を勧め、茶を注いで出したのなんぞ、特に其の婦が立働いたことも氣には留めず、近々と寄つても、心して其の顔を見たと言ふほどでもない。

が、やがて酒になり、お酌に七八人、然るべき連中が顯れた。單衣の裾の萩桔梗、帯の色の紅芙蓉、青疊に咲く秋の草の色ある中に、時々立交る浴衣の姿は、行交ふ雲の間々に、衝と月影がさすやうで、其の影の留る處は、雛妓が開く扇の地の、金銀の露が滴るが如くに見えた。

舉動の優容に、落着いて品が好く、耳につく口數も利かないのに、きちんと注意の行届くらしかつたのは、大方、此家の女主人であらう、と折々目に留つた其の婦が、實は女中で、其れが小篠、當時はお篠で居たのである。

白 驚

其の事は、宴が果てて、一同が歸途に付いた時分に、はじめて分つた。成程、考へて見れば、以前玄關口で出迎へた時、順一の顔を凝と見ると、

(……お待兼ねでござります……)と云つた、主人役の其の津川が来て待構へる、當夜の客である事を知つての上の、これは挨拶。一面識もなく、順一の顔を知らないものの言ひさうな口ぶりではないと、氣が付けば其の筈の事で。

十七

「大した事でもありませんが降つて居ますよ。」
と其の婦が、一同座を立つ時注意した。

「お、稲木さんのお車を。」と津川が言ふ。其の日は、昔から定まらぬに極まつた秋の空で、大粒なのが、袂にばらりと來たり、驟雨がしつとり降つたり、時々ぱつと晴れなどしたので、連中の中には雨支度で來たのもあるし、車を待たしたのもある。

「直き其處へ出れば電車があります、其の方が却て勝手です。——此處から雜司ヶ谷迄の長丁場を、車では難儀ですから。」

其處で一同、揃つてどやどやと玄關にかゝる。トざつと音がして篠を亂して降つて來た。

「傘をお持ちなさいまし。」

「家號のついた番傘かい。」と津川が帽子を取つて被る。これは藝者が差出した。

「まさか、……悪いんですが、私のが有りますから。」

「いや、お篠さんのなら、僕が借りよう。」

と津川は笑ひながら、

「稲木さん、なつ下りだ。こりや地雨で留みさうもない。電車まで濡れずにお出でなすつても、下りてからが大變です。我慢して車になさい。」

順一も如何にも、と考へて、

「ぢや、お世話ですが、車を何うぞ。」

時に、酔拂つて委細構はず、先へ車を走らせたのもあるし、すた／＼雨の中を出たのもある。

格子戸の外に一人、白紵に黒細の紋着、蛇の目を肩に落した姿が、軒燈で、向うの板塀に映つた工合が、内へは歸りさうもない容子で一人、最う一人は、母衣を下して、梶棒を上げさせながら、廂はづれに、順一と津川の出るのを待つた。雨は母衣にも蛇の目にも銀色の簾を掛けた。

「失禮、」

「お先へ。」

と二人とも出た。

「さ、最う一度二階へ入らつしやいな。」と云ふ聲が、今までは座敷なり、これから我が家へ、と

云つた打明けた調子に聞えたか、と思ふと、居合はす女にも構はず、二人にも斟酌しないで、一人ですら〜と二階へ行く。

八疊と四疊半の仕切を取つた座敷だつた。其の廣い方は、杯盤未だ狼藉として居たので、小座敷の方へ蒲團を二枚、裏返しに敷直して、煙草盆を持出して、婦は最う、澄まして坐つて待つて居た。

三鼎に成つた時、津川は假に、と云ふ心か、羽織ながら捲手の腕をト膝に載せて、扇子を斜に額に當てた。其の立膝で居るのを見ながら、

「ま、御緩りなさいまし。」

と云つて、順一の顔を凝と見た。

「貴下、先生の話をして頂戴な。」

「先生の話？」と順一は聞返す。

「稲木さん、此の人はね。」

津川は一寸扇子で指して、

「濱町の料理屋……御存じでせう、辰巳屋の娘さんです。伊達先生が、よく召飲りにおいでなすつた……殊に此の人とは御別懇でな。」

「嘘だわ、御別懇な私ぢやありませんよ。」と莞爾する。

「あゝ、豫て風説に聞きました、辰巳屋の娘さんなら、確か……」

「お篠さん。」と津川が言ふ。

「……のなれの果ですわね。」と寂しさうな色をした。頬が瘦せたやうに偶と見えたが、胸をも伏せず薄い衣紋を凜として、順一が其處に差置いた、巻蓆を靜に吸ひつゝ、

「貴下、風説にお聞きなすつたのは、和歌吉さんの事でせう……先生が内で始終お呼びなすつた。」

「そりや、芳町の藝妓だね。」

と順一が思ひ出して言つた。

「えゝ、然うですよ。誰に聞いて？」

「先生にも聞いたし、傍からも一寸々々と。」

「あら、酷いわね、先生は。……お弟子さんをつかまへて惚話けるなんて、何んの事です。」と窘めるやうな口振。

「大分、鈍尖を露しますな。」と津川は横を向いて、くすりと笑ふ。

「弟子に惚話けるッて、そんな事はない。分隔てのない方で、稲木、茶を遣らう、なんて談話の時、何處で遊んで面白かつたとか、可笑かつたとか、序に、其の女の名も出たらうではないか。」と、順一は眞顔で云つたのである。

「大事な先生だもんだから、」

とお篠は向直つて、氣を入れた頬は、尙ほ細りと、

「貴下は然うやつて言ひ譯を仰有るけれど、だつて、自分の情婦の話しをなすつて、それが惚話でないッて事があるもんですか。ねえ、津川さん。」

「然れば、……稲木さん、如何でせうな。」

「先生の情婦、其の藝者が、そんな事があるものか。……尤も、和歌吉ツてのは大層先生に惚れて居たつて、人が風説もしたんだがね、……情婦といへば、出来たんだらう。何、そんな事は無い。一寸、婦に口説かれたつて、出来さうな人ぢやなかつた。」

「そりや、貴下は、お内に居て、先生の眞面目な處ばかり見て居たからだわ。」

「否、酒を飲つたつて、うっかり、そんな事が。」

「言ひ譯をしたつて不可ませんよ。丁と私は知つてますもの。和歌吉さんが、餘り思つて居て、察するから、現にね、私が首尾をして逢はして上げた事さへある。……と言ひ懸けて、其處にあつた團扇の柄を、上へも取らず爪探る。」

「眞個？」

「眞個さ！ 貴下、お氣を付けなさいよ。謹んで惚話を承つたりなんかして。」と、はじめて花やかに笑つたのである。

「いや、」

と云ふ時、膝を崩して、順一は扇子の眞中を取つた。……私は、見ないが、そんな場合、不斷を知つて略想像が付かぬでもない。

「其は怪しからん、私は唯先方が思つて居たばかりだ、と思つたら……怪しからん事です。」

「怪しからん事です。」

とお篠は、順一が其言種と舉動の、あどけないほどに見えたのを、嬉しさうに莞爾したが、正的に向いた、卷簾が口許に短くなつて、煙が立つたので、婀娜に眉を擧めて目を伏せた。

「お墓詣りをなさる時、澤山然う言つておあげなさい。眞個、怪しからん事です、ほ、ほ、ほ。」と溢れたやうに灰を落す。津川はサソクに其願の下を平手で掬つて、

「いや早や、怪しからん事です。先生の話と云ふと、涎が、それ、」
「可いのよ、津川さん。」と擦つたさうに肩を窘める。

「あ、御挨拶！此の人が、慙う見えて、ぞつこんで居たんだからね。稲木さん、うつかりしてると、矢張惚話を聞かされます。」

「私のは愚癡だわ。」

「尚可恐しい。」

「だつて出来はしないんだもの。」

「勿論ですとも。出来ておいでなすつた日にや、今まで無事では居ますまい、疾くに後を追つて死んでる人だね。……然うでなくつてさへ、先生のお葬式の時に、密と谷中へ行つて、遠くから拜んで居て、一緒に穴へ入りたいッて泣いた、と云ふから。」

「然う云へば先生の葬式に、棺を穴に納める時、七八ツ墓所を隔てた、墓地の折曲る角の所に、薄色の紋着を着た……其の日の會葬者の中には見えなかつたと云ふ婦人が、樹の間から新墓を拜んで居たのを見たと言ふ者があつて、同じ時、又其方にも葬禮があつたかつて風説した事があつたつけ。おや、それが、お前さん。」

「否、紋着を着て居たのは和歌吉さんです。」

「和歌吉ツて、其の、」

「え、然うですよ。私も一緒に行つたけれど、日陰ものが晴がましいから、前垂がけで、其の人の背後の方に小さくなつて居たんです。」

と悄乎袖口に手を入れたが、胸を壓されるやうに、順一は身に應へたさうで。

十九

「眞に殊勝なものでせう。其の後一昨年、先生の三周忌の畫會にも、着到第一に參會はするし、手放して惚話は云ふし、和歌吉一件より、此の方が餘程お墓參りの報告ものですな、稲木さん。」

「難有う、私からも御挨拶をします。」

と更まつて言つたが、顔を見て微笑んで、

「しかし不意打に受けさせたんだから、お前さんは奢つて可いね。」

「奢りますとも、お汗粉は何うです。」

「お汗粉ぐらゐちや、」

と背後に控へて、黙つて聞いて居た一人の老妓。

「道理こそ、お篠さんは、未だに獨身で居て、物騒だと思つたら。……眞個に。お亡なんなすつ

ても、まだ此のくらゐに思はれておいでなさる。其方のお人品が思はれるね。」

「姉さん、」

と向直つて、

「眞個に、其方はね、萬人の中に一人もない、粹で上品で、と口にご言ふけれど、何處を探したら、そんな人に逢へるでせう。品がよくつて、捌けて居て、鷹揚で、氣が利いて、鋭い中に圓味があつて、凛として、恐くもあるし、優しいし、可懐しくつて、好いたらしい、脊丈なら、顔立なら、着こなしなら、何處に非の打ちやうもない、ちやき／＼の江戸兒よ。だから、俠氣があつて、譯知りで、情があつて、淡泊して、最うね、随分男の方も知つてるし、宴會の一大座に、百人百五十人と並んでも、一ヶ所肖たやうな人もない、そりや……眞個に見せたかつたわ。」

と言ひ淀みもせず奮んだが、また寂しさうに莞爾した。

「……否、止ませう、生きていらつしやりや見せないわ。見せると、又岡惚れをされるから。」

「お篠さん、眞個、そんな方なのかい、寫眞はないかい。」と膝で摺寄つて、老妓がびつたりと津川に附着く。

扇の要で額を搔き、

「いや早や、いけ年をして何うしたものだ。奢らせようと云ふ方が話を聞いたばかりで咽喉を鳴

らす。此に奢らせても可いくらゐるだ。」

「寫眞があつたら拜まして頂戴、お汁粉ぐらゐるなら私が奢つてよ。」

と一人少いのが乗出すと、雛妓までが、

「お篠姉さん、私にも拜見な。」と、玉ころがしのやうな聲を出す。

「あゝ、皆で出しつこで、お汁粉を買はうよ。……さあ、一ツ處へ寄つて、」

と云ふ風采が四邊を拂つた。今こそあれ、隅田で育つた辰巳屋の娘である。

「……其の先生が大好きでね、お酒の後ぢや、よく藝者衆と出しつこで、鍋をお座敷へ持出してお汁粉を暖めたんだよ。でも、有餘つちやおいしくない、なけなしのお小遣、中には二錢一錢と云ふ割前の人があるんだもの。かなじんで少い處が嬉しいつて——銘々一杯づゝの事——とお盆の繪を描いて其の上へ、皆の名をお書きなすつたのを大事にして藏つてあるから、私、一寸持つて來るわ。」と身輕に膝を浮かさうとする。津川はチャクと扇子で押へて、

「しばらく！今夜は稻木さんがお客なり、豫て慥くあらむと察したから、堅く禁酒のやうに約束をして置いた。で、先づ神妙に杯も持たず、お勤めに成つたは可いが、しらふで此の勢ひは益々驚く。此の機に乗じて、一寸お酌をして頂戴、なぞに及ぶと、如何なる事に立到らうも計られない。」

驚

と扇子を舉げた腕の下で、金時計をバチンと視めて、

「やがて十二時、雨は盛だ。車は……何うした。」

「あの……最う参つて居りますが、お話が持てますから、と心得た顔の藝者が、敷居際で然う言つた。

お篠は残惜さうに、背狀に疊に手を支き、膝を長く、胸を些と反らしながら、立たうとするのを落着けとて、……

「津川さん、卑怯だわ。」

「串戯は止して、」

と順一を見て、

「貴方はお泊りに成つちや何うです。雑司ヶ谷までは腕車でも大變ですぜ。——此の通り氣の置けない家ですからな。」

「眞個にお泊んなさいませ。」

其の時、順一が藏ひさうにした巻苧の袋の中から、澄して又一本抜きながらお篠が言つた。

「一人でかい？」

「それは何うとも。」と莞爾する。

「いや先生に叱られます。」

と順一は立構へをした。

「私がおわびをして上げますよ。」

「根岸の奥さんでも……其れは些と六ヶしい。」

伊達氏の未亡人は、今其の住居が根岸に在る。

「でも、是非、お汁粉が御馳走したいわ。」

「否、最う其れより新栗のきんとんと云ふのを御馳走になつて居ります。」

「あら、何うしてさ？」

「先生がお亡りになる些と前に、其の年の初物だつて、きんとんの重詰が、お前さんから届いたらう。……四五日何んにも召食らなかつたのが、起直つて、枕の上に頬杖して、二口ばかり食つたんです。あとを皆へおすそ分けで、其の晩夜伽が賑かだつたよ。」

と衝と立つ背後へ、引添ひながら、

「あの……召食つて下さつたの。……あ、嬉しい。其の時は片便りで、今日まで知らずに居たんですよ。……」

と、ほろりとしたのを皆で見た。お篠は顔を上げて莞爾して、

「お察し下さい。……津川さん、私は一生きんとんを断ちませうか、それとも三度々々御飯のかはりに食べませうか。私……何うしませう。」

と云ふのが、娘のやうに仇氣なかつた。

「いづれ近い内、勘定の時にお返事をします。は、は。」高聲に笑ふと、他の女たちも聲を合せた。腕車は二臺とも母衣を下した。雨は小歇みになつたが、津川のが前に、揃つて楯棒を上げようとする。

「あ」と力の入つた、婀娜な、情深い聲をかけた、……お篠が一人、格子戸の處に立つて、思はず母衣を覗く、順一と顔を合はせた。

「先生、」

順一は言下に、胸に氷を抱いたやうにヒヤリとした。

「稲木さん、……あの杖は、貴下のぢやありませんか。」

「杖は持ちました。」

「……御機嫌よう。」

其ま、車上で眞直になつた。母衣を透かすが如く、中庭の白い桔梗が、闇夜の中にほの見えて。……葭蕀を走る雨の雫が玉のやうに美しくかつた、と言ふのである。

處で、話が丁ど、舊の玄關に戻つたから氣を付けよう。此家の二階の模様なり、話ぶりなり、順一の方は、お篠と初対面のつもりで居る、と最初……此處へ出迎へて、順一の顔を見るや否や、當夜の客、稲木順一と云ふ事を、お篠は知つて居た——其の仔細が解けぬ。

懷中繪具

二十

お篠は、實は、其の前年に、順一を見て知つて居たのである。——其れは、芝の紅葉館で開かれた伊達氏の三周忌で。名聲一代を壓した大家の追善と言ひ、當日は、種々の餘興もあり、特に門友をはじめ、知己の畫伯が多人數出席して、隨意に席上で揮毫をすと言ふので、三百人近い參會者が薙々と詰寄せた、……盛會であつた。

會場では食事が済んで、餘興の演劇がはじまる、大廣間に立錐の餘地もなく、人數は廊下に溢れ、縁に餘り、庭前まで押合ひ、へし合ふ。

其の騒ぎの中に、獨り、トボンとして玄關傍の受附に、小机を控へて、帳面を並べて、頬杖して、(竹に雀)と、名は高いが餘り類の無い、黒羽二重の紋服は、伊達先生の記念分けの拜領もの

を、折目高に一着に及んだは可いが、襦の怪しい、自費で調達、こればかりには生殺與奪の權のある、仙臺平の御袴で、一人花見の留守の顔色、煙草をすばくと吹がして居たのは、稻木順一、で、義兄也。

伊達氏に、幕賓と云つた體の人物は多かつたが、玄關に内弟子は此の男一人だつたので、實に然もあるべき當日の役目と思へ。……尤も來會者の名簿の書取り、會費の受取り、一人では間に合はぬから、混雜の内は二人ばかり手傳ひも居たが、食事前……二三の演説などがあつて、席上揮毫のはじまる時分は、皆こゝを立つて彼處へ行つた。

電燈が七ツ八ツ、晃々と四邊を照して、火鉢が五ツ、座蒲團が歌留多の古戰場と散らかつて、玄關から時々風がびゅうくと吹込む處に、机の抽斗に入れた會費の番人を兼ねて、一人で控へた。

渾名を、雀、雀と呼ぶる。鳥の中でも陣笠株で、足輕の案山子と同じくらの格だけれども、順一は其れでも、伊達氏の内弟子。一身凡て繪と心得てだけは居るのであるから、望んでくれるものさへあれば、故先生の名を念じて、畫筆を取る……其の意氣組で居た處……開會の演説から、餘興の芝居の今に到るまで、洒落にも好事にも、これへ一筆、と半巾を出したのものさへ嘗てない。其の筈の事。當日は、此の二階で賣つた色紙短冊絹地を始め、扇面にも、以て幾分の會費を補

ふために、幾千金か掛けてある。で、些少なから、人々は席上揮毫の畫料を仕拂ふわけであるから、二つどりなら名のある畫家のを誰でも望む。恚う云ふ私も望む。……

二十一

繪と云ふと、大層綺麗事に聞えるが、なまじつかなものを描かれるより、金屏風は素顔がよし、團扇でも素面が佳い。此の段は代價なしでも然矣である。

其の證據には、何時か私の姉が、女持の扇子を買つた事がある。少くとも天下に、姉だけは稻木畫伯……即ち其の夫の繪よりほかに、一筆參らせて欲しい山水も花鳥もない、と云つて順一の繪をひらめかすのは、顔に順一、と描いて錢湯へ行くと大差はない。が、白で持つのは嚴格いから、其處で、一案を呈した。

「僕が發句を書かう。」

姉が喫驚した顔をするから、筆を以て追掛けると、内中遁廻つたものである。以て天下の形勢を察すべしで、帳つけの順一には、誰も頼み人がないのであつた。

白

「ヤ、亂軍。」

などと唱へて、席上を引外し、大童に亂れたつて、帳場兼帯と云ふ呼吸ぬきの此の控所へ、遁
込んで来た、肩幅も身幅も袴も廣い畫伯があつた。

はら／＼其れを追掛けて、唐輪に銀の丈長掛けて、鬱金の扱帯の疊摺れな、姫様仕立の館の小
姓が、色紙を袖に縫寄つて、——お客様に頼まれました。

「よう、貴下や。」と絶付く。

「はつあ。生命が續かぬ、其處に居る先生に頼むさ。」

と、受附に居た順一を顎で教へて、火鉢の上へ威丈高に袴を捌くのが、しゆうと鳴る。

「まあ！」

と云つた切で、人形のやうに身を据ゑたの、と顔を合はせて、順一は眞赤になつた。

お小姓は委細構はず。

「貴下や、後生だわ。」と甘えかゝる。

「ぢや、後で接吻をさせるな。」と、一寸頬邊を突きながら、

「君、君、稻木君、繪の具は有るかね、貸し給へ。」と言つた。

繪の具は新しいのを用意して懐中であつた。——敢て拗ねたと言ふでもなし、偏んだと云ふで
もないが、些とこれは出しかねた。今は何をか秘むべき、紙入より大きく胸にたゝんだ其の箱は、

姉の袱紗で包んだので。——晴れの場所を出すのだからと、平時新聞紙に巻くのを止さして、手
箱の中から新しいのを出してくれた、女房の志に對しても、阿容々々と其の畫伯には差上げ難
い。

二十二

「持合はせて居りません。」

順一が其處で勢のない聲して云ふと、唐輪の上へ伸上るが如く、此方を見越して、

「怪しからんねえ、今日の日を。」

「つい慌てましたもんですから、忘れまして、」と言つて、羽織の襟を悄然と搔合はす。先方は最
う見向きもしないで、

「おい、ぢやお前の其口紅で描くよ。」

で、茶碗に汲まして、湯で筆を洗つて、一寸嘗めて、小姓の筐色のちよんぼり口を濡らしたも
ので。

白
「毛氈のかはりだ、袖を貸しな。」と友染の振袖を疊に敷かせて、色紙を其上ですら／＼と染めた
驚
……韓詩外傳と云ふ處を、まさ／＼と見せたのがある。……

然うかと思ふと、廊下をばたくと急がしさうに、十八九の妙齡な高島田のか駈けて来て、襖の際で、白足袋の爪立足で、差覗いて、

「一寸、貴下、其處に其の戸袋の上に、……先生のお包み。あの、風呂敷包があるんですつて、取つて下さい。」

「はあ、」

と順一が、ひよこんと立つ。

「孰れでせうか。」

「紫のですつて、御苗字が書いてあるさうですから、見て頂戴。」

「あ、ありました。」

「此方へ下さい。」

で、スーと歸る。

「君、帽子の番札を落したんだがね、見てくれんか。」

と突立つて言ふ紳士があつた。

順一は最う其の時分から、竹に雀の、記念分に拜領の五つ紋を脱がうか、と思つた。何うやら、自分の受附が故先生を辱めるやうな氣がして着て居られぬ。が、其を然うすれば拗ねたに當る、

と謹んで其のまゝ控へたけれども、一方ならず意氣の消耗したのは事實で。會費は別に保管する手段があつても、時めく人たちの、一人で五十三と引受ける揮毫の席へは、顔出しをする擬勢もなく、結句金子の番を申譯に、其の時まで受附に一人つくねんと居たのである。が、里心も出れば、家も戀しい。其れに付けても、申譯のないのは姊の袱紗で、一度も其の結目を解かぬのは、忍びの緒を切つて出て、兜を投げて遁返るより情なかつたのである。

折曲つた廊下を隔てて、遠くに式場の赫とする氣勢にも、風は颯々と吹き通して、唯明るいは電燈ばかり。數ありながら何の火鉢の火も消えさうに、寂しい夜は白けるまで、霜を置くかと、疊の冷たさ。煙管の鴈首の暖かい處を固く取つて、天井を見て吹かして居る。

ト廊下へ、蹙音は響かなかつた。順一がうつかりとして居たからであらう。……縁側を開けた障子の、此方の襖寄りの立棧の處へ、半身ですらりと立つて、受附を覗いた女があつた。

「御免なさいまし。」

と些と含んだ、朗かな聲を靜に懸けて、蓮葉だけれども小股の締つた、裾捌きをきちんとして、薄い膝を、机の傍へ、すらりと支いたが、形の可い、水の垂れさうな、圓鬚に結つた、面長な、抜けるほど色の白い……年紀ごろは髪形の形で想つたばかりで、實は目鼻立も順一は悉しく見得なかつた。衣は色の濃い、實質んだ無地のお召縮緬に、輪を細く、縫の何やら紋着、たよくと姿

驚 白

よく膚に着いて灰りと底が光る……黒縹子に、銀泥で光琳の波を、冷やかにして且つ艶なるハツ口かけて幽かに見せた、丸帯の締め加減。何處にかありさうな千鳥は見えずに、時計の黄金鎖の緑のやうなのが、きらりとして、其の浪の模様消える。

一目見ると、いづれかの貴婦人であらうと思つて、胡坐した御袴を、不状に坐り直らうとする時、最う、膝に縦にして居た短冊を机にのせた。

「恐れ入りますが、何うぞ」と判然言ふ。

「はつ、」

と順一は餘りの事に……

二十三

「先刻から、お願い申さうと思ひましたけれど、お忙しくつていらつしやいましたのね。」

と様子を知つた、内端らしい、親しげなものの言ひやうをする。成程、忙しくも人目には見えただであらう。が、其れは、先生、先生が揮毫のために大童に成られたのは圖が違つて、足に暇なき水鳥のであるから、順一は一層御挨拶に忸怩として、

「私なんぞに……と心から謙遜した。

「一寸、何んでも可うござんす、おむづかしいでせうけれど。」と隔てない状態で、皓齒で微笑む。

「大分お出来になりましたか。」

「え？」

「先生方に描いてお貰ひなさいましたか。」

「否、別に……」

「そりや、お氣の毒様です。何しろ頼み手が多人數だもんですから、然うやつて失望をなさる方が多い。短冊をお貸しなさいまし、私がお世話をしませう。」

と最う突立つ身構へ。

爾時、水色の半巾を膝に疊んで、

「否、先生のが頂きたいの。ほんの墨をつけて下されば可いんです、今日の記念にしますから。」紳士と淑女と、會衆約三百と註した中に、自分の筆をと望んでくれたのは、唯一人で、然も其れが、燦いと云ふ風ではないが、透通るやうな美人だと思ふと、折が折だし、實の處、難有いまで身に染みて。……我受附を憐んで、故先生の令室が、密と慰安のために此處へ出て見えたのを、茫として目が眩んで能くは見定め難いのであるまいか、と迷つた位。で、仕損をして、劍突を食つて、玄關の隅に天窓を抱へて悄氣て居る、と、配所へ天下る天女の如く、令室が襖を開けて、

今に執成で上げますから、と紙包のお茶菓子、……恵の露を思ひ出す。

其處で我知らずお辭儀をして、

「何がお宜しいんでせう、お望みは。」

と云つた時には、早く両手を内懐へ、袱紗の結び目を解いて居た。

「え、然うですね。竹に雀でも……」

と言つて、莞爾して、

「先生の御紋が可うござんす。」

扱も此の註文は、伊達先生の名を慕つて追善に參會した貴婦人には似合はないと、やがて心付いた時分には、謎の解けなくなつたのも道理こそ、此の婦がお篠であつた。

後に、築地の會合より最つと後に、……此の事を順一がはじめてお篠の口から聞いた時、

(受附に、一人寂しさうにおいでだから、彼處の女中に言ひつけて、御酒でも差上げようか知らと思つて、何心なしにフト氣がつくと、先生の紋と同一お羽織を召してるから、あの方は？ツて傍の人に尋ねると、稲木さんと言ふ内弟子の方だと言ひます。皆さんがお忙しいに、別に、誰方に描いて頂かうとも思はなかつたけれども、……つい、貴下にばかり。)と話した。

而して、二ツ三ツ其處で言葉を交はしたのに、築地の砂子へ、津川さんに連れられて來なすつた時は、顔も覚えておいででない。

(随分な方だわねえ。)と云つて、流る、やうに瞳を寄せつ、睨む眞似をしたものの、(追善の時だから、其れが頼母しい。)と、身に染むやうに云つた、と聞く。……

が、受附の爾時は、順一は疊へ窠伏して、畏まるばかりに成つて、お誂への短冊に、竹に雀を一心に丹精した。

其處に人交ぜもせず、片手を支いて、筆の運びを視詰める顔に、はらくと鬢の毛の柔にか、風情も倂に立つたのが、いざ、出來上つて、短冊を返さうとすると、偶と傍に……姿がなかつた。

顔を上げると、向うの、誰も居らぬ、風の吹通す玄關見附の襖際に、背後姿で、其の婦が少し屈みなりに、左右の空室を恚う覗いて居た。

「寒いのに。」

白 　とや、烈しく、ぴたりと閉めて、襖に背をつけてくるりと向返ると、紅一筋、燃立つばかりの緋の背負上が、幽に胸にひらめくのを、順一が見た。

其の紅が、瞳を射た。

ト短冊を片手にあげて、小机越しに袴に手を支いて凝と見るのと、向うと、両方で顔を合はせた。時に、立姿の手の水色の手巾が、端が解けて、はらりとたる、身構へを些と崩して、何か懐しげに、足早に衝と疊を來るのが、やがて、打解けてもの言ひたさうな素振に見えた時、……カイト式場で木が入る！ト哄と人聲を拍手が煽つて、紅葉館を揺がす氣勢。早亂れ足の波が、此處を渚に、色を薄めて、盛装した男女が颯と寄るや、電燈の光さへ、綾錦に紫立つて、貴婦人の其の紅の扱帯を奪つて消した。

順一は自分の翼を飾る、美しい羽が抜けたやうに、げつそり片膚の寒さを覺えた！と言ふ。……

二階の癩

二十四

あ、同じ色の、其の紅の背負上を——女の手では力足らず——鳩尾の鬱癩に——女の手では力足らず、……片手、男の力を添へても尙苦惱に反返る。……世間と、義理と、金子と、無理酒と、苦界の勤めに、心を痛め、胸を傷け、身を惱んだ、小篠を、我が膝に枕させて、高麗結びを

一重に解いて、両手で緊乎と引締める……餘儀ない逢曳の夜半のあるやうに、扱も其の後、扱も其の後、立到つたのである。

忍ぶ夜の、女の癩に、唯一條の其の頼みの綱は、受附の時以來はじめて見た。達引の胸の血潮を絞つて、稻妻の射るが如く、順一の瞳に映つて、引締むれば、乳房に波打つ響を傳へて、夕燒の濱の砂のやうな、細い冷い縮緬の絞皺は、湧き立つばかり、ぶる／＼と鮮血の色を増す。

其れと共に、切なさに、衝と乗上る……男の肩に摺ついた横顔の、眉は恚くても展きながら、臉の色が颯と褪せ、酔ざめの血が消えて、頬は薄絹の蒼味がかつた柔かき白蠟の色に沈み行く。

……一呼吸引いた静止間は疾し、キリ、と齒を噛んで堪へようとして、得堪へぬ惱みに、破れ麻の葉の長襦袢を、疊に膝で搔き合はして、足摺しつ、

「緊乎結へて！ 緊乎結へて！」

「切れる。」

と順一は呼吸もつけぬ。

「切れちや可厭、切れちや可厭。」と、睜らうとする瞳が動くのに、膨りとなる目も得開かず、がつくりと成つて頭を掉る時、命よりも大切に、一筋も亂さない、鬢の毛がはら／＼と崩れた。

白 驚

「何うしよう。」

「何うする……」

「何うかして、」と聲も沈めば、膝の上に身體も沈む。

「何うすれば可いんだね。」

「母様を、母様を、」と云ふのが、漸と聞えるばかりに成行く。

「母様を、……困つたな。そんな無理を言つては不可い。憊うして締めても駄目なのかい。」

「あ、あ、苦しい。」

「私には仕やうがない、癢を壓すのは初めてだからね、手心が些とも分らん。女房を呼ばう、女房を呼ばう、……が手も敲かれない。」

と云つて、尙背負上を引締めた。

「口惜い！ あんな奴、」と順一に袈裟がけに手を縫つた。が此の女房と云つたのは、例の十九貫六百目の事である。……

「時節だと思つて我慢をするんだ、な、堪忍するんだ。何、たかが待合の媽々ぢやないか。」

「え、待合の女房ですとも、而して私は其の女房に、商賣ものにされる藝者です。」

と云つて、胸に前髪を髻と當て、脊筋を折つて嗚咽したが、苦惱は漸く涙に解けて來た。

「伊達先生の馴染ぢやないか。何だ、氣の弱い。」

と云つて、省みて、勿體ないと思つた。が、其の場合、清涼劑には、杯洗のでない水一滴あらばこそ、卓子の上の硝子の皿には、却て其の惱の種の、櫻之實が、紅の涙を累ねて居たのであるから。……

此の話は、下の座敷に、私が居たのと同じ夜に起つた事を、序ながら云ふのである。

二十五

小篠は爾時、吻と呼吸で、

「嘘、私ぢやありません、先生のお馴染なのは和歌吉さんです。」

「そんなのばかりが馴染ぢやない。友達も馴染、弟子も馴染、未だ逢はないでも馴染は馴染、慕つてたものは尙馴染さ。」

「ぢや、私が死んでも、雑司ヶ谷へ行かれませうか。」

「行かれるとも、一人でたよりがなかつたら、手を曳いて連れて行く。……先生の納棺を覗いて居た、あの樹の下から、餘所の冬青垣の道を廻つて。」

と順一は稍激して言つた。小篠の胸は柔くか、縫つた腕が、忘れたやうに緩くなると、

白 驚

「あゝ、嬉しい。」と袖を摺らして、膝から、するりと帯を曳いて、はつ、と氣の抜けたやうに、麻の葉を疊に敷いて、秋の野に伏す女郎花の露にたゆげな姿と成る。……

力の機勢に、弾けたか、一結びに引締めた、其の背負上が、そら解けして、身を引く八口をつるりと落ちて、順一の膝に靡いて留まつた。

彌が上に、順一は此の時、追善會の玄關では、雲を隔つる、天上の花の一片の如く見えたのが、こゝに人の手に觸れたのを、空怖ろしい心地がして、一種の神祕に接するとともに、怒る境遇に身を落した小篠の身の、あはれさと、果敢さを痛切に感じた、と言ふのである。

少時夢心地に視めて居たが、手に取るとヒヤリとした。

「さあ、此を、……」

「最う、……可うござんす。」と坐つたまゝ、裳を捌いて、倒れるやうに、トンと食臺に擡れさま、雪の細腕、肱を露はに、額に手を支いて俯向く、ト思はず覗き込むやうにした、玻璃の器の櫻之實が、ほんのりと其の臉にさした。

丁ど二階の其の時分、私は階下で、雛子と二人で、伊達氏の——前に言つた其の——竹と蚊遣火の軸を視めて、妙に氣がさした時刻が當る。

小篠が、胸を切めて癪を惱んで、順一の膝に倒れたのには、此の軸も、預かつて其の心痛の一つであつた。——五坂と云ふ重役の事も、櫻之實の事も後に言はう。——

いや、背負上の端から端で、私の話は續きながら前後した。

中頃、順一が、此の婦にめぐり合つた、——あの津川が、順一のために祝宴を開いた——築地の待合、砂子と云ふのに女中をして居たのは、濱町なる實家の料理店が、時流に可ならずして、一家退轉の非運に陥つたためである事は言ふまでもない。

が、追善に參會して、順一が何處かの貴婦人と間違へたのは、まだ其の實家が、たとひ外濠は埋めても、城廓を維持して居た時分であるのは勿論で、……纔か二年許りの間に、見違へるやうに其の容子は變つて居たに相違ない。順一も、尤も前の貴婦人の節は、受附で唯赫と成つて、染其の顔を見覺えるほどの餘裕は無かつたけれども。

津川が、會場を、お篠が勤めた其の砂子に選んだのも、情を解して——其れは順一についてではない、少しでも名を知つたものには、お篠が遠慮なく其の話で持切る、——伊達氏に對する彼の女の心を汲んで、話が合つて可からう處で、豫て其の意を得させた上、唯一の内弟子を、席に招じたものらしい。然ればこそ、機會を待兼ねた、と云ふ態度で、

白 驚 (先生の話をして下さいな。)と可懐しさうに云つたのを、自他ともに疑はぬ。

其の後も、折に觸れると、津川が何かの序には、
（お篠さんも氣の毒です。實際濱町の、名代娘で居た時から、大先生にぞつこんで居たんですな。柄を見ると、あの通り、些と粹過るくらゐ仇ッぽいんだけれど、両親に可愛がられた懐子だけに、カラ處女なんでせう。だもんだから、横合から、ちよつかいを出されたんでさ。）など、順一に話したものであつた。

二十六

（歴乎とした會席の娘さんで居た時分から、随分人に騒がれて、やい／＼つて言はれたもんです。尤も看板娘だつたんですからね。けれども旦那な思かな事、浮氣らしい沙汰はなし、派手者な癖に物靜かで料簡が眞面目なんですから、親孝行だ、と評判をしたくらゐ。……濱町の家が没落した時も、料理屋は料理屋として、直接にお篠さんの世話に成つたり、引廻しに預つた藝者連も多いので、まあ、お世辭にも、御入用は用達てて、お客分にして遊ばして置くから、内から、私の許から、と勧めたものも澤山に有つたつて言ひますけれども、極眞面目でせう、當人が。で、浮氣稼業は可厭だと云ふ。云つた處で、あの容子ぢや、小間使と云ふ柄ではなし、——裁縫は出來ます、みつちりお師匠さんへ通つたんだから——しかし、お針も申戯らしい。で、まあ同

じ流れの中でも、なりたけ淺瀬と云ふつもりで、砂子の女中に成つたんださうですが、何うして内より、藝者より、あの人で客が來ます。——砂子へ入る藝者は骨が折れる、と云つた、御存じの容色でせう。随分御祝儀も、普通以上に入りませう。一寸御飯と連出した處で、あの人ぢや五兩や十兩は包まなけりやなりませんから。其のかはり服装にも掛れば、實際の入費も嵩張る。以前が以前ですからね、濱町以來の顔で、俳優だ、角觥だ、師匠だと、藝人に挨拶されりや、附届けもせねばならず、芝居の見連に行つた處で、私は女中で候で、棧敷を跨いで横向きで、お茶を飲んで居られますまい。藝者にも其の通り、姐さん／＼と立てられりや、其れだけの目端を利かさなくつては納まらず……お剩に、へた／＼お辭儀をして貰ひ利益にしようなんざ、骨が砂利に成つても出來ない氣象の、何うして、きれ手らしいんですから、あゝして居ても随分苦しい。見込みがあるから、貸手は逃げない、びた／＼と判を捺せば、右から左へ入るから、何處かの小箆や、革靴の中へ殖えるものは證文ばかり。元來が、幾干か内の手助けをしよう爲のが、其の體ですもの、お客の機嫌氣味を取るより、自分の機嫌を取つてくれて、それこそ、箆に御秘藏の伊達先生の一軸でも、平に、と云つて掛けさせて、喝乎とでも言はうものなら、勘定は達引いて、お汗粉を驕らうつて氣前だから堪りません。

借金は溜るばかり、身體は弱し、最う砂子の方も、何うにかしようかと考へて居るツて事です。

白 鷺

が、其の何うにかしようが、今の處ぢや、近頃は、大酒の祟りで、ぶらく／＼煩つて居る父親を看病の片手業に、何處かの新道へ引込んで、氣の勝つた母親が、手一つで、見やう見真似の御新姐料理で間に合はせの仕出しなんぞして、二三人小兒たちを抱へて居る處へ、遁込まねばならぬ始末。

處で、相當の手當で世話をしよう、待合を出さしてやらう、と云ふものが無いかと言へば、ここが、可笑しい、有る、有餘なんです。

砂子の内でも、あの人が目見得に來た時は驚いたと言ひます。此の白い手で拭掃除が出來ようか、と思つたさうだし、油斷がならない、旦那を見付けに住込んだ。……目星い處を引衛へて、宙乗りで消えるんだらう、と朋輩の女中なんぞ耳つこすりをしたもんださうですが、いや、馴染んで見ると、其の方はカラ初心な箱入娘で。叔父さん知りませんよの方でせう。

難と言ふと、髪ばかり氣にする事で、まはりが遅いか、約束を違へるか、出來が悪いと、襖を閉めて半日ぐらゐ泣いて居る。其のほかは、指で煙管を廻して見せても、あゝ、と聲を出して、横倒れに帯を壓へる罪の無さ。で、砂子ぢや安心した上、金箱に成つたは可いが、さて、當人の身の上です。

誰が何と言つても、其の方へ懸ける、と頭を横の段ぢやない。何處を風が吹く、と言つた工合が、尋常ごとのやうに見えぬ。別に許嫁がありさうではなし、情人が臺灣にあるでもなし、俳優を買つて、又客に賣らぬと云ふのは無いから、何うも、伊達さんに未練が残つて、——但し今時そんな女はありさうにも思へませんが——其のための心中だてに相違ないと思はれます。

順一は、時々津川の話しに、耳を傾けるやうに成つた。次第に、聞染みるやうに成つた。

流動物

二十七

其處で、砂子の女中では立行なくなつたために、小篠の名で、藝者に出た事に成る。

順一は其の以前に、最う一度、津川に連れられて築地へ行つた。……月の良い晩で、其の影を宿しながら、河岸の水がひた／＼壘へ流れ込む。

電燈は白いほどな、其の下に、衝と腕を長く、杯洗の波がしらに、硝子杯を灌ぐ、お篠の姿は涼しかった。

白
「召飲れ、只今新栗のきんとんが参りますよ。」
と座を落着きつゝ、いそ／＼して、

「津川さん可いでせう。先生、もつと此方へお寄りなさいまし。食卓の其處だと、何時かの紅葉館の受附にいらしたやうに見えるわ。」と言つて、凝と傾いて莞爾した。

順一は其處ではじめて分つた。……一驚を喫すると共に、丁ど着て居た中古の紺の紋着の羽織を、今更ながら、受附の姿に打視めて、しばらく胸の切るまで、無量の思に沈んだが、應て、貴婦人に對する如く慇懃に手を支いた。

お篠は洒落だ、と思つたらう。

「今日の御紋は違ひましたね。」

「あの時のは、お記念の拜領ものです。拜領ものは然う數はない。尤も自分のだつて一張羅なんだがね。」

「御召換の分は、奥様の御紋でせう。」

「其の通り。」と、先刻から無意義な會合でなかつたのを、我意を得たりと言ふ様子で、獨り面白さうに視めて居た津川が口を入れた。

場馴れぬ野暮的面談ひ、

「串戯を言つて……着、着換があれば一張羅ぢやないぢやありませんか。」と、理を推す處は勤番めく。

「ぢや一張羅をお除りなさいまし。而して、御緩りなさいな、ね、可いこと。今夜は雨は大丈夫ですから。」

津川が、

「大分、引留めるね。」

「歸すものですか。外へお出なさりや、和歌吉さんが待つてるもの。最う口惜いッたらない。」

と脱がした羽織を、裏返しに、すつと手で當る。

「姉さん、お疊み申しませう。」と藝者が一人立たうとした。

「可いことよ。お酌をしてあげて頂戴。」

と言ひ、襟を扱いて、紐を捌いて、折返しに袖を合はせて、袖疊にトンと行るのが、裁縫が出来ると聞いただけ、手綺麗にキチンと極る。然も傍目も觸らないで、見得も容子も忘れた風が、十年の馴染らしい。

亂箱に入れてから、小取廻しに居直つて、

「飲ましておあげなさいよ。不可ないなんて、伊達先生の眞似をしなくつても可うござんす、…

…和歌吉さんに留められたもんだから。」

白
「あ、和歌吉さん！ お篠姉さんのお株が出てね。」

と藝妓が燥いだ聲を出す。

「奢りますから、きんとんをお食り。」

「はい、はい。」

で、敗亡する。おなじ振事に搦むのでも、さてく憊う云ふのは儲からない。

「まあ、其方へ獻げよう。」

「頂戴、あ、憚り様、ほつちりよ。」

と硝子杯を透かすやうに、くるりと目を上げて上へ取つた。

「お篠さん、」

「は、」

「君も近頃は飲けないやうだね。」と津川が見舞ふやうに眞面目に言ふ。

「身體が悪いもんですからね、つい、此の二三日前まで多日寝ました。漸と昨日あたりから少しづつ、御飯が食べられるんです……多日流動物ばかり。」

と醫師に習つたやうな事を眞面目に言ふ。成程、然う言へば、以前より、めつきり寒れた、鶴

に搦んだ晝夜帯も、身をしめさうで痛々しい。

二十八

「時候あたりかね。」

「否、冷えるんで不可ません、つい夜が更けますもんですから。」

「お年紀の所爲だね、且は……其の何だしさ。」

「え、眞個。」

と悠然たり。

「あ、水稼業はさしたくない。大層人が悪く成つた。前に、こんな事を言はうものなら、ぷりぷりしてツンと立つつたものだけ。」と津川は故と、尤もらしく喟然とする。

「お酌して頂戴。」

激したやうに、臉に颯と色を染めたが、紛らかしたさうに背けた片頬に、寂しく月の影が薄く射した。

「久しぶりの所爲か、もう……あ、お旨い。」

「止すが可い、眞個に止すが可い。」と津川は又眞面目で云つた。

「でも、これも流動物よ。……流動と申すは、流れ……動く……」

と國手の假色で、酒を揺つて、凝と視ながら、

「質の入替へのやうだわね。」と些と酔つた。

「眞個に毒だよ。伊達先生がお止しとさ。」

「はい、はい。」

軽く、柔順に、可愛く重ね返事して、

「それぢや辛抱しませうね。」

「一體、のみ手なんですか。」と順一が横を向いて津川に聞いた。

「飲みますとも、時々ですがね。何時かなんぞ、客が何か、こだはりを言つたとかで、お嬢さん、立續けに叩切りを遣つたでせう。ツンと帳場へ引上げたは可いが、二階ぢや手が鳴ります。と奉公の悲しさには、出ないわけに参りません。澁々座敷へ上らうとすると、足腰が利かなくなつて、ばつたり壇へ手をついて、恚う、膝を泳ぐやうに動かすばかりで、上へも下へも足搔が取れないで、裾はまつはるし、羽拔鳥と云つた形で、倒れかゝつて居る、と丁ど手がはりの無い處、二階ぢや頻にお手が鳴る。……」

今行つた筈なのに、變だとは思ふが、滅多に座敷へ出ないで済む、女將が居間を出て上りかける、と其の姿だ。何うしたの、と尋ねる、と心は確なんだから、はツと思つた。が、其處は方便

ですね。此の人のほつと赤くなるのは湯上り、と嬉しい時ばかり。炎天でも酔つた酒にも蒼くなるんだから、嘘がつけます。

急に差込が、で思ひ切つた。生命から二番目と云ふ鬚の、鬢なんぞ厭つちや居られないで、壇へ頬邊を擦付けたは何うです。……ねえお篠さん、こゝらは先の、伊達先生に見せたかつたね。

お篠は澄まして、巻煙草で、聞いて微笑んで居た。

「可い事よ、……和歌吉さんだつて随分飲んだわ。酔ふとだらしが無いんだもの、肥つた身體でべたべたと先生の膝にしなだれるんです。——先生はすすきりと痩せておいでなすつたでせう。梅の樹へ石臼を押付けたやうぢやありませんか。傍で見えて居て口惜いやうなの。處をまた、肥つたのが一生の御自慢でさ、是見よがしに所作るんだわ。差向ひの時だつたら、あゝ云ふ御氣象の方だもの、

(巫山戯るな、海月)か何んかで横面の一ツも張倒しさうな處を、人が見て居る、可哀相に、唇を搔かすでもない、とお思ひなさるんだわね。

「しばらく、」

と津川が留めた。

「お言葉の中だけけれど、其れは何うだか。」

「眞個ですよ。お情だわ。其れでさ、一寸あの幅つたい肩を抱いてお遣んなさるのよ。勿體なく、つて、最う私。」

と慄然としたやうに肩をすぼめる。

「や、愈何うだか、益々どんなものですか。由來、お篠さんの事と云へば、情人が無い、と云つても疑はず、親に勘當をされる、と言つても斷じて背かない料簡の私だけれど、其ればかりは如何でせうかな。」

「否、否、其の證據には、然うなすつた時、一寸私を見て苦い顔をなすつたんだもの。」

「御覽なさい、其處が欲目だ。どんなもんだ見てくれ、と云ふつもりか知れたものか、其の苦い顔は御自分勝手だ。」

「だつたつて……」

と眞向に目を睜つたものの、言消す術がなかつたか、は、と溜息をすると齊しく、消入るやうに姿を薄く、突然疊に突伏した。

「口惜しい、私。」

後朝

二十九

「然う口惜がるにも當りますまい。」

順一は、可哀に思つたので、

「そりやお情の方が事實かも分らない。眞實に情があつて、死ぬほど惚れた婦なら、眇でも跛者でも片袖濡れて遣らう、……其のかはり、先方が氣の無いものなら、衣通でも小町でも、髻を結つた人間だ、と云ふ風だつたんだから……又得て然う云ふ人に限つて、對手から騒ぐんです。依怙地なもんだつさ。」

だから何時かも、今のに丁ど相當な話があります。

誰か、同じ畫伯で、佛蘭西へ行く人の送別會が、向島邊であつたんです。其の崩れに、娑婆氣な、元氣の可い、事を好むのが五六人で、頼兼公以來の伊達さん、無理にも吉原へ引つ張り込め、但し近頃の大門では、此の人の身體を吸入する事が出来るか何うか、もし狭かつたら柱を抜いて、腕車に後押を掛ける、と云ふ勢ひで、先生を眞中へ引挾んで、否應なしに楫棒を扱いて入れた。

茶屋から何處かへ連込んで、騒いだあとが、おひげ、と成ると、……以前は歌舞の菩薩だつてが、今ぢや鑑札の有る商賣ものです。下界に下りた天人が、女伯良と振事はどんなだらう、と丁ど隣の名代へ入つた、連の人の悪いのが、女が何か饑舌りかけるのを、

(シイ)……なんて壓へてさ。

酔つたふりで、仰向けに隔ての壁へ天窓を摺付けながら、恚う……耳を澄まして聞く、と女の聲で、

(お袴と羽織をお取んなさいまし。)

と云ふんだとさ。

「はてね。」と、津川が腕を組む。

お篠は、うつかり聞惚れる。

「先生は例の如く些とも酔つちや居ないんだらう。

(困るよ、神経衰弱で。)

占めた！ 伽羅の君大惱み、神経衰弱と言つべし、で、隣の部屋で笑つて居るとね。

(神経衰弱ツて、何です。)

(病氣なんだよ。)

(介抱したいわね、どんな御病氣。)

と女が言ひます。

(夜、寝られんのだ。)

(ぢや、あの横におんなさいしな。)

此れは何うです。

(あ、深切に難有う、ぢや横に成らうよ。)

(さあ、お羽織を。)

(不可んな。)

(否。)

(羽織は其の病の禁厭さ。)と警句を吐いて、呵々と笑はれたつけ、が、女の方は洒落處ぢやない。誰の目にも同じ事、一枚繪にでも有りさうな、あの容子を見たんだから、鬼に成るべき權幕だね、救はずんばあるべからず。

(伊達さん、伊達さん。)

と隣室から聲を懸けて、

(御都合で出發しませう。)

障子が兩方一時に開いて、廊下で、顔を見合はせると、

(豪いね、君は)と言つて、先生が莞爾と笑つたんだつてね。

「あゝ、」

と言つてお篠は吻と息をして、

「安心した、可い鹽梅、何うなるか知らんと思つて汗を掻いたわ、私は。

「しばらく！ はあ、其處で。」

「それだけぢや別に何んの事もない。此れからが、今の話が嵌るんです。

處が揃つて、階子段を下り懸けると、先生の其の對手と言ふのが、今時にや珍らしい、容子の

可い女だつたさうだがね。」

「あゝ、氣が揉める。」

と安心をした風で居ながら、笑つて疊を膝で當る。津川が、

「しばらく！ はあ、其處で。」

三十

「二階の上り口、欄干の詰、燈と燈との間に影を薄く、悄乎と斜に立つて、寂しいやうな、怨め

しいやうな姿で、恚う俯向いて、見送つて居たのを、何んの氣なしに振返つた、隣の部屋に居た

其の人は、様子を知つてるだけに、氣の毒でもあるし、あはれにも思つたつてね。

新造まじりに、四五人、ばたくと蹙音の忙しい、祭禮が濟んだ石段を見るやうな、壇の下り

口七分目の處から、先生が唯一人、水際立つた風采で、衝と引返して上つたもんです。皆なが喫

驚して足を留める、と、其の女の手を取つて莞爾して、

(其の中……直に来るよ)ツツ言つたんだとさ。言はれた見得なり、外聞なり、女の方ぢや、ど

んなに嬉しかつたか知れないね。……だから誰かが撓垂れたと言つても、人前で突飛ばしはなさ

りはしまい。」

言が切れると、藝者が一人、物足りない顔をして、

「一寸、それから何うなつて？」

「其れつ切りさ。」

「二度目に行らつしやりはしないんですか。」

「誰が。」

と打棄るやうに言つた。

「まあ、嬉しい心意氣の方だわね、嘸、皆が騒ぐでせうね。」

「電車の中で、私が面喰つた事がある。」

と順一も些と酔が出て、

「先へ御馳走になつたから可いやうなものの、頼うだお方、許させられい、と云ふ目に逢つた。此の太郎冠者がお供で、丸善へ書籍を買ひにおいてなすつた歸途に、近所の鳥屋で御飯を食つて、其の時お銚子が二本ばかり、……此家の姉さんも知つてる通り、……」

と一寸お篠を見る。と、もう知つた顔で、凝と視めたなり打傾く。

「五勺と飲ると、すぐに微酔で、何時でもすやくと好心持さうに一寝入する方で、其の何だ、轉寝が、其の晩は電車の中ではじまつたんです。乗込む時に、大分込んで居たもんだから、先生と私とは人を一人真中に置いて腰を掛けた、其れが總髪の銀杏返で浴衣がけの、きり、とした中年増。すると先生の其のふらくが、段々に寝込んで了つて、右の意氣なのに膝枕、はどうです。恰も千里無人の境に入つたやうなものぢやないか。」

當人は身體を曲げもせず、迷惑さうな顔もしないで、神妙に靜として居たけれど、如何に何んでも見た處が氣の毒らしい。からお供の私は、黙つて傍見が出来ますまい。

(姉さん、姉さん、)

と低聲で呼懸けて、

(入交りませう、失禮、)と、云ふと?……何んと?……

(否、可うござんすよ。)

……は御挨拶ぢやないか。然う云つて、袖で恚う燈から先生の顔を隔てるやうにしたのは、私が大照に照れたもんです。何うです、極りは悪しさ……癩には障るし……否、其の婦がだよ。

——憚り様、飛んだ岡焼だよ、と言つた調子さ。餘程嬉しかつたものと見える。」

「いや、何うも、と津川が腕組を解いて額を壓へる。」

「眞個に貴下は詰らないわね。」と藝者は悔む。

お篠は聞き、膝の上に袖を折つた、が、袂の端を一つ密と叩いて、

「ぢや、あの、先生が膝枕をなすつたんだわね。」

「奇抜でせう。私が行れば擲倒される。其處が何うも先生は、其の婦が敵の末でも、懷劍は抜かないで、櫛を取つて浮脂を落しさに、餘處目にも見えたんだ。」

「私なら、其の浴衣を一生大事に藏つて置くわ。」とお篠はうつかりして袖を落した。

「一寸、何處にいらつしやる方、一度拜まして頂きたいのね。」と仰向いて思案顔は、其の藝者も

白 眞面目らしい。

驚 「最うお亡りなすつた方だよ。」

「あら！ 勿體ないわ、ねえ、まあ……」
お篠は俯向いてほろりとした、其の鬚を輪取るやうに、月が葉越に窓を覗く。

其の夜、砂子を歸る時、二階を下りる處で、津川は、お篠が未だ其處に奉公をしなかつた前から、其れが馴染の女房に出逢つて、藝者と入交せに立話をする。

順一は一足前へ格子を出た。

お篠が送つて、忍返しの釘を白く、塀を青く、月影が射す路地を順一に並んで、突掛下駄を沈めて運んで、誰と連立つのか忘れた風に、胸を衝と張りながら、ふらふらと歩いたが、直に路地口。賑やかな電車通の、其影法師のやうな街の、燈がちらちらする裏町で、別れ際にすつと寄ると、袖が袂に觸つた時、

「……お近い内に……」

「來ます。」

と順一が猶豫はずに云ふのを聞いて、何故か、差俯向いた圓鬚が、月の雫に重さうに見えた、肩つきが物寂しく、

「私は最う近々に茲を出ますよ。」

「然う、何うしてだね。」

「身體が悪うござんすから……あの、先生。」

順一は又慄然とした。

「然うしたら、お目に懸れませんか。」

「……………」

「又お目に懸りたいわ。」

「遊びにおいでなさい。雜司ヶ谷の私ん許へ。」

「可うござんすか。」

「可いんですとも。」

「だつて……奥様に悪いでせう。」

「馬鹿なことを！ 家内にも話しましたよ。おいでなさい、歓迎するから。」

「お墓參りに連れて行つて下さいな。」

「やあ、お待遠。」

と津川が出て來た。

「長いわね、何をして？」

「御兩人の噂をしてさ。」

「憚り様だわ、ねえ先生。」

「稲木さん、歸途は唯ぢや不可ませんな。」

「あ、もし。」

二人並んで、十間ばかり出離れたのを、路地の出口で呼返す。礎と齊しく踏止まると、お篠は斜めに向をかへて、しなやかに腕を伸ばして居た。

「一寸、眞似をして行らつしやい。」

「は、は、」

と津川が噴飯す端に、順一はつかくと引返した、其のお篠の手を取つて、

「其の内……直に来るよ。」

お篠は急に身動きして、袖を顔に、片側の藏の白壁に、半ば月を浴びて、はつと其の面を隠した。が、其のまゝ消えさうに見えて可哀であつた。

と順一は云ふ。――

薄い蝶々

三十一

雖然、雜司ヶ谷の住居の假の晝室で、其の後順一と差向ひに、お篠が坐つた時は、霧が晴れたもののやうに、花やかに且艶であつた。

丁ど遊びに行合せて居て、私も見た。私が見たのは、其の時が最初である。

豫て待合の女中と聞いたに、いや、怪しからず媚かしい。無地お召の燻んだ袷に、消炭の縮緬ぞろりとした紋付の羽織、品の可い圓鬚に、金脚の玉の簪で、臆する色なく座蒲團に薄く控へて、敷島を喫んで居た處は、歌舞伎座の正面特別席と云ふ處へ、顯れさうな柄であつた。

最う砂子から暇を取つて、親許に歸つて居る。……

「内は車屋でも焼芋屋でも、當分は娘分になれましたから、此の時でなくつては、と思ひ立つて、伊達先生のお墓に、參詣をさして頂きました。」

白 驚
前に此方の先生の處へ上つて、連れて行つて頂きましたかたんですけれど、おせはしくはござんせうし、餘り押付けがましくつて失禮だと存じまして、直接にお墓所へ參りましたが、たしか御

命日でもないのに、二三人、書生さん風の方が、参詣をなさいまして、何か頻に話をなすつていらつしやるから、……矢張何時かの、あの、大きな樹の下の處から、其方を覗いて、しばらく遠慮をして居りますと、同じやうなものですから、つい悲しくなつて、
と言ふのを、私もしめやかに聞いたのである。

三十二

「お墓へ差上げるものは、お花ばかりでせう。澤山綺麗なのを、と思つて来たんですけれど、花屋がないんですね。此の邊では何處のお家の庭を見ても、大概美しく咲いて居ますから、眞個に二枝三枝御無心をしたいやうでした。茶屋では、櫛とお線香ばかり。何ですか、寂しくつて、煙が袖へ分れる中に、手を合はせて拜んでも、あの、賑かな事のお好きだつた先生が、お寂しいやうで果敢なかつたのでございますよ。……まあ、お内には、……見事ですなえ、お羨ましいこと、種々な花が盛りで。」

と膝を摺らして、表二階の欄干越に、木戸の千草の色を見た。――槻の下枝が、長く伸びて風にさら／＼と板縁へ届くのが、秋長けた頃なれば、葛の裏葉の風情がある。早咲のコスモと、脊高い紫苑は、窓に透かした浮彫のやうに咲いて、澄み切つた蒼空は、薄く碧瑠璃の蔽ひを懸けた。

其の前に、軽く胸を扇ぐお篠の手の絹の手巾が、淺葱の薄い蝶々のやうにひらめいて、ものの夢のやうな彩色の中に、咲残つた眞白な桔梗が一輪。……外歩行きの日南ながら墓詣でとて氣の澄んだ、臉も白いお篠の顔と、上と下とにくつきりとする。

「あら、桔梗ですね。あの白のは、私は朝顔がまだ凋まないで居るのかと思ひました。」

「珍しいでせう。太く珍しいでせう、」

と私は順一の顔を見て笑つて言つた。

「眞個にお珍しいんですことねえ。」

「澤山珍らしがつてお遣んなさい。義兄も、姉も、其のつもりで居るんですから。但し此の色の桔梗のあるのは、縁日と當家です。」

「可いから、そんな、憎まれ口をお利きなさいよ！ まあ、眞個に。お客様に、結構なお土産を頂いたけれど、お前さんには食べさせません。」

と姉のお稻が襖際で聲を懸けて、部屋へ入る、と持運んだ茶道具を順一の坐つた方へ出して、
「これは、入らつしやいまし。」と、私の膝のあたりで銀杏返を俯向ける。

白
「まあ、はじめまして、」

とお篠が座を退く。

「あなた、お土産を下さいましたよ。」と目で教へる、重詰は、茶盆に斜に載せてあつた。

「恐縮ですな。」

「何んですか、お恥かしい。」とお篠は姉の顔を見ながら、うつかりしたやうに手巾を畳へ落す。姉は櫛を取つておくれ毛を一寸搔く。

順一は重詰の蓋を取つた。私は姉の膝越に乗出して覗き込んだ。

「孝さん、行儀の悪い。」

「は、あ、きんとんだ。きんとんだ。」

「母親が手製ですから、召食れはしませんよ。」

「嘘、先生がお喜び、」

と、順一が床の間を見向く、と姉が其のまゝ、重詰を捧げて、其處に飾つた伊達先生の寫眞に備へた。

「お禮に、御馳走をおしよ、……と言つた處で、こんな處ぢや何んにもない。」

「否、最う、何うぞ。」

「姉さん、私にするやうな御馳走ぢや不可いね。」

「然うお見くびんなさんなよ。」

莞爾して、

「まあ、貴女、お車をお歸しなさいまし。」

「何んだ、車が待つてるのか。」と大業らしく、順一は顔を長くして欄干越に伸上ると、萩にかくれて、母衣が光る。

「新橋界限から上下なの、不經濟極まりますな。宛然お姫様の道中で。」

「何んですね、失禮な。」

と姉が困つた様子をする。爾時、賢兄眞面目な顔して、

「だつて、雨が降るんぢやなし、皆、懐中の苦しい夥間が。」

火の接吻

三十三

白 驚
（馬鹿な、姉上の言とも覚えぬ、よしんば、よしんば二人出来合つて居たからつて、……然う云ふ事はない、勿論ないがね。……あつたと假にした處で、二人ぎりで暗がりを歩行かせられるも

んですか。

場所がらす。蝦茶、廂髪には權威があるから、これが學生と手を曳き合つてぶらつく分には、雑誌の口繪か何か視める氣で、餘處事と思はうけれど、あの風で二人ぢや、此の不景氣な世の中を、犬が吠えずに居るものか。

物騒です、土方や職人に撲られ兼ねない。——あの人一人放り出して遁られますか。其處は男だ。突然撲倒されると覺悟をしても、順一さんが相手に成らないぢや言譯がないでせう。先方が一人で此方が二人だつて何んになる。お篠さんが裾を引いて、砂利を掴んで投げたくらるぢや、先づ怪我なしには濟みませんな。其處を思ふから警戒のために行つたんです。詰まる處は、姉さんに心配をさせまいためだよ。

後に恚う串戯を言つた事がある。が、これは、其の順一の家へお篠が來た日、皆で勸めて、悠りさせようために車を歸さしたので。——尤も其の車は、聞くと新橋邊から乗つたのではない。石切橋で電車を下りて、雜司ヶ谷まで、往復で來たのだと言ふ——一緒に一つ鉢のもので晩飯を濟ました。酒もあつたが、病氣だから、とお篠が一口で止したので、誰も三猪口の上は吞まず：歸り際に、花が一枝欲しい、と言つて、一輪残つた白桔梗を望んだが、

「何故ですか、白い花が大好きで、……はやじにをするのぢやないかと思ひます。はじめて上りましたのに、皆さんが、内端にして下さつて、こんな嬉しかった事はござんせん。閑靜なお住居が、眞個にお羨ましい。恚う云ふ處に、せめて半月御一緒に居て見たい。身ま、な身體になりましたら、泊りがけに御厄介になりたくござんす。お洗濯もののお手傳ひをいたしませう、が、思ふ通り、何時またおうかゞひが出來ますか。何故か、お暇乞に上つたやうな氣がして、心細くつてなりません。」と言つた。

其の言ふことが氣にかつたので、

「否、もう一度入らつしやらないぢや、桔梗を上げるのは氣になりますから、」

と姉が、斷りつゝ、送つて出た。

「孝さん、一緒に來ないか。」と順一が、カタリと下駄箱の隅の杖を抜いて取つた。

「おつと合點。」と言ふ時、姉が目配せをして止めた——

其の事を後で話して、

「心なしたよ、孝さんは、折角二人でお出懸だものを。」と味を言ふから、我輩乃ち道路安全の瓦斯燈を點したものの、來い、と云ふから散歩かたく、其の時は何んの氣なしに、一緒に隨いて出たのであつた。

——電車のある處まで——

で、お篠は餘程氣に留めたものと見えて、出しなに木戸際にフトイんだ、ト提た手巾の水色は、格子を射す燈に、煙のやうに薄く靡いて、萩の葉摺れの立姿を、暗夜にぼかす仄に白い桔梗を視めて、

「來年は澤山咲いて下さいな。」

目白を指して行く途中、路は眞暗で、水の筋が茫乎漾ふ處があつた。

「夏は螢が居ませうね。」

「螢處か、人魂が此の頃旬でね。」と、先づ一つ、私が怯したものである。

「嘘ばかり、ねえ。」

と言懸けられた順一が、又大人げなく、

「丁度人間の胸ぐらるな處を飛ぶ。」

「御覽なすつて。」

「否、見やしない。」

「御覽なさいな、嘘ばかり、人を威かさうと思つてさ。」

と聲を出して、ほゝゝ、と媚めかしく、暗夜の中で笑ふのを聞いた。

「眞個ですよ。」

「だつて、見ないつておつしやるぢやありませんか。」

「其れがね、奇態な人魂でね、男ばかり歩いても出ないとさ。尤も女ばかりでも顯れないとね。」

唯然うやつて、男と女と、二人で手を曳いて行く處へ、ふはくと來て、しゆつと附着く。

と云つて、私は故と一足後れて、慙う、立つて見る振。

三十四

二人の中へ、夜の路幅が影のやうに入つた。

「嘘ばかり。誰も手なんか曳いて居はしませんよ。而して、二人で歩行くのを氣にして出る人魂なら、大丈夫だわ、……三人ぢやありませんか。」

人間は三人だけれども、歩行しているのは二人だよ、——然う見える、あゝ、二人つきや居ない。」

と變な聲を出した——讀む人は、私の身振や聲色を、氣にしては不可ません。

「それ、二人、二人、影のやうに、霧のやうに二人で行く。……私はあつて、ないも同然。や、

手から、裾から、……おやく胸から、段々消える。ひとりでに消えるよ。あれ、えゝ、薄氣味の悪い。自分で、少しづつ見えなくなる。片足歩行くと、片足見えない。又片足が茫乎して來た。

驚 白
まあ、掌が分らない。……はゝあ、一人を消して置いて、二人ばかりに成つた處へ、ドロ／＼と

出る支度らしい、篠の御方、

「知りませんよ。」

と些と急足ですん／＼行く。

「まあ、嘘だと思ふなら振返つて御覽なさい。一目で可い。ねえ、振向いて見て下さいと言ふのに。あ、心細い！ 申戯ぢやない。順一さん一寸見てくれませんか。やあ、又消える、わあ、と情ない聲を發す。

順一が振返つて見た様子で、

「や、眞個に可笑い。孝が見えない。」

「あ、と深い沈んだ呼吸をしたが、別に駈出しもせず、順一の袖に縋りつきもしなかつた。

路が兩側から蔽被さる、高い樹立の下に成ると、暗さは益々暗く、凡そ其の樹の丈だけ、地の底に沈んだかと思はれた。

「さあ、氣を付けて下さいよ。人魂の根本は、此の樹の下の眞中あたりで、つい此の頃首縊りがあつてから起つたんだから……まだ生々とした話だね。何でも此の先、ざわ／＼と樹が鳴つたら、其の枝へ、ぐなりと下つたんだ、とお思ひなさい。怨靈の繩にぶら下つて、下から狸が引張るんだから。」

黙つて、蹙音ばかりが聞える。

「眞個だね、順一さん。」

「あ、然うさ。」

「ぢやあ……あの幽靈の通る路なんだわね。」

「雜司ヶ谷へ行く亡者なんか、棺桶より一晩先へふら／＼する。時々、慙う歩行していると、木の葉に障つて冷い風が、すつ／＼と耳の端へ觸るでせう。……例の物が辿るんです。然う言へば抹香くさい、經帷子の香がする。」

「先生、」

と順一を呼んだ聲が、別に亂れても居なかつた。

「もしか、私が死んだら、此處を通つて來ませうね。」

「何を、詰らない。」

と勢ひなく順一が言消す。……

「然うすりや、私が迎ひに出ますよ。」

「後生、然うして下さいな。どんなに氣丈夫だか知れませんか。」

下闇を漸と抜けると、水の音が又響く……背後を田圃にした土堤の上に、一里塚に燈籠を點け

た體の灯は、小店の荒物屋で。——順一は其處で敷島を一箇買つて、吸つたあとを、お篠に渡すと、黙つて取つて、これも一本、火の口を合はせた暗夜に、お篠の顔は白かつた。が私は、實は、順一の家へ訪ねて来て、姉に逢つて動じなかつた態度と言ひ、ものに落着いた立居舉動、大膽な婦人と思つたのである。

けれども、様子が知れると、大違ひで、後にも前にも、雜司ヶ谷の暗夜の歸途を威された時ほど可恐い思ひをした事はない……

(最う……死ぬのに未練はないけれど、白い衣を着て、竹杖に縋つて、とぼくと、あんな路を歩行くのかと思ふと、そればかりが心細い。)

と或時、或場合に、順一に話した、と言ふ。而して……

(孝さんが、何か言つて脅す度に、膽を切られるやうに、ひやくしたけれども、驚いた素振をする、尙面白がつて、其の上にも可恐がらせられようと思つて、一生懸命に我慢をした。縋りつくわけには行かず、抱しめて貰へはせず。……唯お腹の中で一心にお念佛を、)と言つた可憐さ——あ、今思へば身を切られる。

兩方電話

三十五

却説話次分頭、私に……一人の馴染が……ある。……其の雛子と言ふのを呼ぶ待合が家名を於登利と稱ける。女房が築地邊の或待合に奉公をした頃の呼名を其のまゝ、今は兎に角一軒の主婦と成つたが、はじめは房州から出て来て、意氣な世界に我ばかり、三味線の裏皮知らぬ飯焚で、釜底の炭をこそげた、其の昔を忘れぬためとの心學仕込みで、殊勝に軒燈に磨込んだ、と聞く。……所説は讀めたが、何分にも於登利は可笑い。凡そ此の筆法を以て論ずる日には、念佛行者が温泉を開くと、湯の名をお陀佛とせねばならぬ。が、遊びに行くにはさとりよりおとりの方が勝であらう。

歸命頂禮。一時我輩、親父の爲替をごまかして、横飛びに飛出したが、敵を知らず、天の時は固より得ず、退いて案ずるに、如かず地の理を得んには。で、座敷はあるかい、と聞くために、或處から、件の於登利へ、電話を懸けた事がある。

驚白
「あ、もし……」と先方から。

「於登利かい。」

「然やうでございます。」

と電話口で言ふ聲が、女房でもなく、お澤でもない。而して、落着いた、澄ましたやうな、婀娜な合聲で、妙に情の籠つたのは、一度聞いて以來、忘れない聲音であつた。

「もしく、」

「はい、」

「あの、……誰だい。」

「於登利でございますよ。」

「あ、於登利は分りました、……分つたがね、一寸、一寸、其方は誰だい？」

すつと針線を奥へ引くやうに聲が途切れた。

自動電話の硝子戸へ片手を掛けて、物腰に力を入れた。

「……お篠さん、……お篠さんぢやないんですか。」

「……………」

「え、え、……違ひますか。」

「篠でございます。」

と判然答へて、

「誰方、」と聞くのが忍び音であつた。

「お篠さん逢ひたかつた、逢ひたかつた、逢ひたかつた。」と一續けに浴せ掛る。

「ほ、ほ、」と笑ふのが幽に消える。

「綱引で駈付ける。立つておいで、電話口に。其のま、動いや不可ない、何處へも行つちや不可ないよ。今行く——大事なもんだから。」

此處で、其日、飛込んで、於登利の帳場で逢つた時、お篠は最う藝者に出て居た、小篠となつて。

此の於登利の女房は、同じ砂子に女中をして居た。お篠より先へ暇を取つて、金方があつて商賣をはじめた。舊の朋輩の許へ、最寄に參詣の歸途に、遊びに来て居たのだと言ふ。道理で不斷着のま、らしく見えた。

別に客が有つたのではなかつたので、座敷を替へて、あらためて逢つた。で、舊の朋輩だと聞いた。

白
（おや、まあ、此方がお知己、）と胸を反らす十九貫六百目も、其のつもりで座をあしらつたが、實は、朋輩でもあるし、お篠は女房のお主に當る。濱町のお篠の家が瓦解する前、見切をつけて、

築地の待合へ住込んだ。然も其の手曳の縁で、お篠も其處へ奉公をした様子を、私は後日、話されたのである。

其の日、誰も居ない時、小篠が悄れて、

(義兄さんの御宅へもあれつきりまだお禮にも参りません。眞個に濟まない〜と思つては居ますけれど、こんな身になつてお恥しいし、上つちや御外聞もありませうと思つて、御遠慮を申します。……ですがね、何うしても藝者に出ないぢやならないやうな羽目になつて居ましたから、其の以前にと思つて、極りの悪いのを、一度雜司ヶ谷へ伺つたんで、實は義兄さんへお暇乞のつもりだつたの。……いつか一度は白い衣を着てなりと、あの樹の下に参りませう、一人では可恐いから、孝さん、貴下迎へに出て下さいな。)

と云つて、ほろりとした。

三十六

「これだ、黙つて居られますか。——散歩の時振廻す、あの柄ぐらの杖を引張つて、遮二無二順一さんを連出したのは私です。……姉さんの前だけれど、」

と私は姉に話したのである。

明易き頃ながら、しと〜とする雨の音に、夜は唯更けまさる許りであつた。

此の折から階下の臺所の方で、コツ〜と氷を砕く音が陰氣に聞える。最う薬が届いたので、書生さんは寝かした筈……それでは交代に女中が起きて、入れかへる氷の支度をしながら、離れて居ても夜中の事、病人の耳に響かせまい、と音を忍んで、釘を當てるのであらうと思つて、大いに其の心づかひを多としたのである。

「お聞きよ、姉さん、不思議な縁ぢやないかね。」

と私は續けた。

三十七

「不思議な縁と言へば、まだこんな事がある。……於登利の二階で、お篠さんにはじめて逢つた時、最うこんな身に成つては、と死ななきや家へ遊びにも來られないやうな心細い事を云ふから、(何故藝者になんか成つたんだね。)

ツて聞いてね、餘り悄れて居て氣の毒だから、些と陽氣に紛らして遣らうと思つて、(矢張り男のためかい。)

(は、從兄弟のためです。)と言ひます。

(洒落なの?)

(否、眞個よ。)

と實際らしい。獻した杯を一寸控へて、

(はてな、後家の後見、藝者の兄さん、坊主の姪、と昔から相場が極つたが、從兄弟は何に當るだらう、と待てよ、おや許嫁かね。)

(え、然うよ。お酌して下さいな。)

と澄して言ふから、串戲のやうに聞いたんだがね、矢張り事實で。兩方縁の切れた、何んの關係も無い中だつたけれども、名だけの義理で、まあ、其の從兄弟のために、苦界に沈んだと言ふやうな次第なんです。

此の悉しい事を、小篠が順一さんに話した時は、仔細があつて、順一さんは、手を下げて恐れ入つたんだとさ。」

三十八

で、仔細と言ふのは、確此の四月の、末頃であつた筈。

當日順一は、根岸の伊達氏の令室の許へ、取紛れ御無沙汰した御機嫌伺ひに伺候して、快晴

仕り候段、恐悅を申上げ、首尾よく退出した歸途を、上野へかゝると夕鳥、遠くの森へは、ちら／＼と灯が點いた。

都合あつて、しばらく足が遠退いた、約束した事もあり、かた／＼先方で待つて居よう……と袂に重い、紙に包んで下されもののお菓子に對しても氣が咎めるので、誰に憚るともなしに、四邊を見ながら、其處等の自動電話へ入つて、人目を忍ぶ、勢ひ強く、つツと引くと扉が反跳んでドンと閉つた。

直に、竹家……と云ふが渡場ではない。小篠を半抱への家へ掛て、呼出して、珍らしく小遣があるから、豫て白羽の矢の立つた南鍋町の風月の二階を驕らう、と氣前を見せると、電話は何處の?……何處にいらつしやるの、と聞く。

上野から、と言ふと、直に來て下さいますか。あゝ。其れだと電車で三十分ぐらゐる、其の時分……彼處の角で待つて居ます、最う暗くなつたから可いでせう、一緒に行つて下さるわね。……其れでは、では可うござんすか、然やうならで、受話器がカチリと嵌る。ト其處に居た婦に分れたやうに思つた、途端に、電燈が、ぱつと、赤く點いた。

驚 白
困つた男で。今にも時が後れて、小篠が立待をしよう、と十七日の宵心地。——立掛けて置いた例の杖を取つて、急いで其の自動電話を出ようとすると、好事魔多し、私を差置いて、拔駈け

の順一めが可い氣味。

入りしなに、ドンと引いて、しつくりと嵌つた扉が開かない。——此の扉は、中の取手が行方知れず折れて居て、小指の尖ほども掴む處が無かつたのである。

さあ、此の手懸りがなくなつては、鍵のない金庫も同然、押さうが、引かうが、突つかうが、戸を破らねば、しやうがあるまい。

停車場近くで、往來の足は繁し、まだ暮果てたほどではないので、人顔も判然分る。で、助船を呼んで見たが、其の無駄な事に氣が付いた。御存じの四方硝子で、もしくなんぞは根つから聞えぬ。

それ、手を舉げる、掌で招く。其の中にも足は慌しく、あの狭い中を、ぐる／＼まはりで鼻血も出さうに打つかる工合は、洋燈にかゝつた蛾も同然、と言ふと岡焼めいて酷いけれども……イヤ義兄者人も其の實は……

ぴつたりと閉込まれて、息苦しくはなる、胸は切なし、電燈が頬を焙つて、赫！ぐらくと上氣はする。四五人連、土方らしいのが、シャヴルと鶴の嘴を肩に、手に、眞黒な形で、むらむらと硝子戸へ、荒磯の魚めいて近づいたのを、ぴつたり顔を附着けて、悶くが如く、手つきで呼ぶと、其れでも氣がついたか、振返つた、二人ばかりが、蒼い頬と黒い額でギロリと見返つて、

齊しく、眉毛をぴり／＼とさせて、さつさと通り過ぎたのが、可恐い鬼のやうに見えて、地獄へ落ちたとまで思つたとさへ言ふのであるから。

勿論愈となれば、生命に別條があるのではない。硝子戸を叩き破つて、救助を呼ぶ、……とまで思ひ切れないのは人通の多い事で、其處から、バアと突出するのが、猿の面なら兎に角だけんど、人間では些と奇に過ぎる。

小篠は辻に待つて居よう。

早五時間も過ぎた氣がして、もう、蒼く成つて、吻と火のやうな呼吸を吐く、と臆氣ながら、間近に人の立つた姿が見えた。

呼吸で曇つて、其の雫が涙に成りさうな硝子に、兩眼の眩んだのを、ぐい、と引擦つて、續けざまに手招きしながら、破れよ！ばた／＼と戸を叩くと、兀げたコオトのぶは／＼とする長いの上を、膝の草臥れた洋服の細い、くすんだ、瘡せた、脊の高い男が、一驚を喫した顔で慌しく寄つて来て、戸を叩く音を怪訝さうに傾いて聞きながら、兎も角も引手を捻ぢた。

隙間が出来るや、ドツと壓して、ぱつたり飛出すなり、ひよろりとして、

白

「はあ、」

と唸つた順一の聲に、ぎよつとしたと云ふ様子で、洋服はびくりと後へ退る。

「お庇で命拾ひをしました。」と、言つたと云ふから、窮苦の惘状態察すべしで。

「え、私は又、貴君が激烈に戸を敲いて、お呼びに成るから、尋常事ではないと思つて喫驚したですよ。」となか／＼に今は其の方が顔の色が變つて居た。のみならず、何かきよと／＼して定まらぬ目色ながら、――頻に禮を言ふ順一の顔を右瞻左瞻で、

「失敬ですけれど、稲木さんぢやないですか。」

と言ふ、直に國訛も耳に附いて、

「貴下は？」

「近田ですが……」

それ、御承知の筈、と顔を傾けて、差覗くやうに順一を視めた。

「お、！……此の男には一面識、見られるに不思議はないが、忘れて成らうか！ 順一の家が、故郷で落魄したため、我を渠に見替へられて、幼馴染の戀人が、之見よがしに縁附いた土地の富豪の若旦那である。が、見た處は、パンと叫び、パンと喚き、パンと怒鳴つて、露西亞麵麩を賣つて居さうな風采であつた。

「何うして、何時御出京なすつたんです。」と云ふのが、豫ての感情、今の場合、威を示して尋問するやうに膠もなく聞えたので、

「まあ、お珍らしい。」と言を足す。

だらしもなく、へた／＼とお辭儀をして、

「實に多日でございます、と振上げる額を拂つて、髪が長く、色の白いのも見窄らしい。

「え、早い話が種々失敗続きであります、一家殆ど離散しまして、私は何んです、去年の十月頃から上京しましてな。只今は本郷の春木町の裏長屋に店借りをして、夜分、その……四辻へ西洋料理の屋臺店を出します。あの、三錢五錢均一と云ふのですけれど、陽氣は悪し、一向に早商法に成りませんで、と情を求むるやうな笑顔をする。……其處どころではない、小篠の親許が同じ屋臺店同様の境遇で、切迫して居るのを思つて、順一は胸を挫かれた……」

三十九

洋服は、額の髪を掌で撫で上げて、

「豫て諸所から御名を伺ひます、大層な御出世で。え、去年の秋は何ですてな、展覽會では賞牌をお受に成りましたさうでして、御名譽な事でもあります。へ、へ、と寂しげに白い齒を見せて、くた／＼の中折を、片手で捻麵麩のやうに引摺みながら、片手でネクタイの歪んだのを直す。

驚 白

「何、飛んだ事を、お恥かしい。」

と着つたものの、其の恥づる色の面に出ぬのを、順一は心に疚しとした。

「で、今日は何方へ。」と、當然吾はねばならぬ事を聞いたが、行きがかり上、我ながら、其處らのビイアホールへでも禮心に誘ひさうな口振で、其の實、心茲にあらず——辻に小篠が立つて居よう——

時に、急ぐとでも言ふ事か。

「はい、其の實は何でして、……目的の立ちますまでは、男世帯と言ふ覺悟でして、友達と組合ひの商法をしますですが、申した通りで、國元へも、其の一向仕送りが出来ません處から、彼方へ残して参りました、妻がな、……」

順一は俯向いて、立身に杖を袴と抱いた。

「最、何です、二人の子持でして、一人はまだ當歳の乳香兒と云ふ、……私が上京した後に分婉しましたやうな次第、……彼は難澁につきまして、此方へ来て一緒に成らうと言ふのでして、其れが今日の、此の何でございます。入時何分かの汽車で着きますので、實は其の迎へに出たですが、些と時間を取違へて、まだ早過ぎます。一時間の餘も間がありますので、停車場に待ちましても、何か其の、五歳になります兒の手を曳いて、乳香を抱いて、襪襪風呂敷へおしめを包んで、産後の妻が、とぼくと出て参るのだと存じますと、又手前が手前で、何うもぢつとして居

憎いやうでございます處から、此の邊をふらふと當なしに歩行いたでございます。はい、……」

と切口上で姿勢を正して、

「まあ、東西も分らぬわれ、不思議な御縁で。……故郷のお方にお目に懸つて、妻も、もし存じましたら、どんなに喜ぶか分りません、はい。」

と唯最、う盲雀で、懐へ飛込む風情。勢ひおのづから、順一は懷中へ手を入れた。ト此の中に、四苦八苦でも天晴な、拾圓紙幣が五枚あつた。

せめて一枚、否、否、小篠が身に切つた入用、額は此の、二倍あつてもまだ足りない、……と思切つて、住所を教へて、番地を聞いて、

「いづれ。」

と言つて分れしなに、見れば、帽子を冠つた體が尙寂しく、とぼんとして、突飛ばされたやうな風情でイむ。

順一は翻然と電車に隠れた。

猛然として、約束した四辻へ顯れて、店頭軒の陰、立處に八九十人の姿を見たが、胸したが、小篠は其處に見えなかつた。

白 尤も、ゆくりなく暇取つて、二十分が彼は二時間。立草臥れて歸つたか、それとも前へ行つて

待たうも知れず。

兎に角、急いで、つかくと風月堂の店前の壇を上つた。

食箋

四十

食堂整然として白く、椅子は皆空しかつた。が、唯真中頃の卓子飾の花の蔭に……一人三枚襲を幅廣く、裾長うふはりと着て、腕だ羽織を、も一つの椅子に掛け、廂髪の堆い、三枚櫛の綺羅美やかなのを仰向けに、天井を見るやう、退屈さうに椅子に凭れて、盛装した貴夫人が居た。順一の入つたのを、顧んで見て、じろりと目を付け、帯から黄金鎖を引出して、黄金時計を一寸視めて、廂の尖を、大きく羅馬字形に緩く廻した。

其れも人待つ人らしい。

密と片隅の椅子に掛けて、帽子を取つて額を拭つた。

ポオイが出て小腰を屈める。

「連が来ます、御馳走は其れから。」

「は、」と飲み込んだ會釋する。

「酒を下さい。」

「おビール……」

「否、ビールは不可い。酒を、直ぐ、冷酒が可い。」

直ぐに壘詰を硝子杯で四五杯、故郷も東京も小篠も何も一息に呷と煽りつけた、が場所柄も辨別へぬ綺の羽織の矢大臣。ポオイの風采にも恥づべきである。

ト此の折から、真中の卓子で、低聲ながら朗かに、

「アラジュリアンス、アンドウエル、アスベルジュ、ビフテク、エスカロプ、フロマーシユ、フルキ、ガトー、え、ガトー」と些と節が附く。

風月では鸚鵡を飼ふか、其れにしても直傍だ、と兄哥驚いて此れを見れば、件の其の貴夫人が圓々とした肱つきの體で、料理の目録を讀まるゝのであつた。

其の時、鳥が黙つたやうに、はたと聲が止んだと思ふと、一つ裳を踏み解して、ふはり、ぱつと、派手な長襦袢を捌いて立つたが、手の其の洋紙刷の一枚の目録を持つて、順一向つた卓子の角へ来たが、振は明いたり、袖は長し、幅は廣し、帯は緩し、肥つちや居るし、だらしはなし、ツンときな臭いほどの香水なり、何んの事はない、三枚襲で暖めた火燵を打覆した如く、袖の煽

驚白

がむつといきれる。

思ひも懸けず、順一は驚く。

夫人は済まして、其の目録を、指環で、短くした人指指でちよいくと二三度刻んで、順一の目前へ押出して、

「これ、何んて読むのですの。」

と中の一行を指して、じろりと黒い目で横から覗く。

「おかみさん！」

ト一呼吸詰めた後を、すばりと呼んで、呆れ顔を、屹と視た。

「御串戯もんだ。怎う、何處の活動寫眞でも手を握つた覺はない。巫山戯ちや不可ません、おい、人違ひぢやないのかね。」

「うゝ、」

「誰かの葬儀でも出遇つたか、僕の方ぢや知らない婦だ。」

「えゝ、私だつて知らんのです。」

と、むつと胸を膨らまして、ずつと立つて、

「知、知らない人ぢや、ものを聞いては悪いのですか。」

「女がね、おい、まるで他人に、唐突に物を聞いて可いのは、迷子を探す路と、舅姑に飲ませる薬の名だ。」

「失敬です、失敬な！ 貴下は。私には主人がありますよ。」

「當然よ、主人があるのは人相に顯れてら。お断りに及ぶものかい。其の主人に氣の毒だから餘計な世話だが言つて遣るのよ。聞きねえ、お前さんは誰か待合はせる人がある……ト云つたつて妬くんぢやないぜ、早合點をしなさんな。日本人の言ふ事は佛蘭西語より分り難さうだから！

可いかね、退屈凌ぎに、若いものを遊ぶ氣だらう。難有がらせて、嬉しがらせて、天窓から覗る氣なんだ。

又其の氣でなくても、二人ばかり居る所で、たとひ寶丹が欲しいつたつて、無暗に男に口を利いて何うするえ。

然も僕は酔つてるぜ、酒の上だ、と満面に酒氣は漲る。

白 驚
「此の阿魔いき過ぎた畜生だ、遊んで遣れの料簡で、奥さん、もし、お酌を一つ、と杯を出したら何うする。……汝の方が持掛けた附合だ、断り切れまい。其れとも失禮だ、とか失敬だとか言つて腹を立つかね。立つたつて構ひはしない、是非つて言ふね、是非酌げなんて怒鳴つたつて交番へは駈出せまい。自分の方に落度があるから、平あやまりにあやまるか、其れとも酒の相手を

するか、抜挿しは出来なからう。

恚う……見りや、相當の御身分らしい。歴乎とした亭主持が、氏素性も分らない、僕なんぞに、阿魔の、媽のと言はれるのも、總體なめ過ぎた心得違ひから起るんです。

慎むが可いぜ、眞個に。汝達ばかりの東京だと思つてると、些と料簡が狭からう。可いから、最う彼方へ行きねえ、恐れて酌をさせないんぢやねえ、其の手ぢや酒がまづいからよ。」
タ、と手酌の冴えた音。

四十一

餘程待たねばならぬ人があつたと見えて、貴夫人は、臆て復仇の其の勢ひ！ 其の式を見せるのに窓から飛んで出る事もせず、形相は夜叉のやうに成つたけれども、黙つてぶり／＼して舊の座へ返つて行くと……ガタリと椅子を摺らす音が聞えた。

見向きもしないで、順一は又一杯引掛けて、と目錄が二枚卓子にあるのを視めて、苦笑ひをし

た。
小篠の姿が、上り口へ、燈に遠く描き出されたやうになつて入つて來た。
「濟みません、遅くなつて、」

「何うしたい？」

「一寸、年坊が。」

と言ふ。一番末の妹で、今年七歳になる。小篠が十九の時、母親が産をした。やがて人形でもない、娘心に、嬰兒は借りても抱いて見たい年紀。内が料理屋の時分なれば、客の座敷をも構はず持つて出て、道理で腹が大きかつた、いや母様、となぶられるのを嬉しがつて、人前も構はず乳を押付けたものだつたと。……最う此の兒に、小篠は目もない。

「何處にしませう。」

「其處が可からう、」と其の立つた差向ひの處を目で教へる。

「並んで掛けませうか、誰も居ない。」

とすゝると寄る。

順一は羽織から指を出して、黙つて背後を一寸指した。

「ま、」と呼吸を呑んで、擦つたいと云つた身の動作で、卓子の角を、間に入れて、きちんとお太鼓で椅子に掛けて、裾を淺く白足袋を揃へると、祝文を読む形で、目錄を、と視めたもので。

白

「まだ何んにも食らなくつて？」

「飲んだばかり。」

「可厭だ、可い色よ。……あ、お腹が空いた、貴下は何？」

「安いものが可いね。」

「困つ了ふ！ 平民の子は。」

と澄ました風采をして、横から顔を出したポオイに振向き、

「此處に日本の字で、鰯と書いてある處は、フライか何かでせう。それに、鶏と云ふ處を二品ばかり、後でカレーの御飯、それからスウプ、」

と誂へる。

「勘定は私がする。」

「へ、へ、と、ポオイが笑つた。」

「貴婦人の前で何んですか。」と訝々とした聲を懸けて、一寸背後の卓子を覗いた。又實際、覗かねば見えないくらの、卓上の緑の葉蔭に、以前の夫人は身を潜めて、雉子の伏隠れた風情であつた。が、やがて、其のほろ、鳴く時、其處が噴火口で、地震が震るとは、二人とも知らずに居たらう。

「年坊が何うかしたのかい。」

「否、何うもしたのぢやないんですがね、先刻お湯へ行つて、歸りがけに一寸家へ寄つたんです」

よ。……然うすると、あの兒が何か駄々を捏ねて、母様がお灸を据ゑるんだつて騒いで居ましたから、連れて歸つて遊ばして置いたんです。……人が髪を撫でつけたりなんかしようと思つても、乳をおくれなんて、

と胸を押へて、

「膝へ乗懸つて居て離れないんですもの。」

「何んだ、燈の點く時分から湯へ行くのか、心細い。そんなに暇かい。」

「まさか、いくら内にばかり居たつて、日が暮てからお湯へ行きはしませんよ。先刻ですよ、貴下が、あの電話を掛けて下さつたでせう。年坊はね、最うあの時來て居たのよ。ですからね、姐さんは出掛けるし、最う日が暮れたから、お内へお歸りつて、然う云つても、最う少し遊んで行きませう、行きませうよつて肯かないの。」

それにね、段々不可なくなつてさ、此の頃ぢやね、お寶を使ふことを覺えて困るわ。……不可いよ、年ちゃん、小兒がお寶を持つとね、お巡査さんに叱られるからつて云ふとね、嘘ですよ、お隣の美いちゃんは銀貨を持つてるけれどね、それだつてね、お巡査さんに叱られはしませんよ、なんて高慢な口を利くの。……と嬉しさうに莞爾する。

「それでも可愛いぢやありませんか。あ、否、買食はさせません。何を買つてもね、吃と袋ご
と内へ持つて歸るんです。護謨のボン／＼一つでも、私のだつて取つて置いて、姉ちゃんあげま
せうつて、私が行けば直にくれます。そりや可いけれど、氷を飲んで困るのよ。早過ぎるわね、
お花見頃から拵へるぢやありませんか。……其れも……甘露なんぞ、ちゆう／＼吸つてるんでは
納まらなくつて、金時小豆だなんて贅を云ふのでせう。

まだ小母さん許ぢや金時は出来ない、つて、私達が然う云つて聞かせるかね。……づん／＼自
分を出掛て行くのよ。お聞なさいよ。而してね、出来たてがございますつて。困つたふの？

最うね、日比谷あたり迄遊びに行くんです。電車が危いから遠くへ行くんぢやないよ、年坊つ
て、此間も叱言を云つたんですがね、車で母衣を掛て行きますよ、姉ちゃん、と澄まして云ふで
せう。——何うするのと思つたら、お守さんと一緒なんです。……」

「然う、お守さんが居るのかい。」

と順一は勢ひの可い聲で云つた。小篠の家は、父親がどつと床に就いて居るとは云ふが、まだ
子守も置けるらしい、と嬉しく思ふと……

「嘘よ、そんな御身分なものですわ。餘處のですわ、お向うのお守さんが乳母車を曳くんですつ
さ。其處の嬰兒さんと合乗なの。澄まして乗つて、可い氣なものぢやありませんか。嘸生意氣な、
馬車に乗つたやうな顔をして居るだらうと思つて、私可笑くつて、と、得も云はれぬ優しい顔し
て打微笑む。

「で、今竹家へ置いて来たかね。」

「最う徐々、お睡なんです。……日が暮ると意氣地はありません。丁ど内から弟が迎へに來まし
たからね。翌日玩弄物を買つてつて上るからつて、漸と歸したんです、ついね……其れだもんだ
から遅くなつて、」

「何、遅い事はありはしない。私も途中で思懸けない、知つたものに出會して、此處へは今來た
ばかりだが、可哀相な事をしたね、連ておいでだと可かつたつけ。」

「人見知をして不可いの。」

「泣くかい。」

「私が一緒だと泣きはしません。外へ出ると蜆貝で、其れでも人様の前ぢや柔順しくつて、黙つ
て坐つて居ますから、貴下、面白くないでせう。」

驚 白

「飛んだり、刎ねたり、玩弄ではあるまいし、」

「あゝ、玩弄物と云へば、歸途にね、銀座通で玩弄物を買ひませう、一緒に来て下さいな。」

「可厭さ、通は明いから。」

「でも、二人で買つて遣りたい。……一寸電燈を消しませうか。」

「馬鹿な、於登利ではない。」

雨がばら／＼と廂にかゝつて、煉瓦に颯と音を立てた。……

どや／＼と聲激しく、揺上つたやうに入つて来た二人連の客がある。……一人は、上下大島

紬の、大柄な紳士で、一人は大太ぶさに結つた立派な相撲、二段目あたりの關取であつた。

入りしなに、紳士は、小篠をじろりと見た、と小篠は一寸俯向いた。眉がくつきりと蔭になつたが、何んの氣なしに、順一は物珍らしげに關取を視めたと云ふ。

「たうとう降つて来た。」

と云つて、紳士が眞中の卓子に行きつゝ、外套を脱懸けるのを、相撲がヤツシと云ふ身で受取る。又相撲が抱いても然るべき重さうな外套で。

「丁ど、まあ、可い鹽梅でございましたえ。」

と件の貴夫人に云つて、どつかり腰を掛ける。其の聲を聞いて、見ぬやうにしてチラと見返つ

た時、帽を脱いだ、額の野卑な、色の黒い、鼻の低い、髯の見事な、其の紳士の顔を見ると、眉が迫つて、順一は著しく聳んだのである。

忘れて成らうか。年紀こそ違ふが、同郷の中學時代に見知越の——當時有名な成金で、然も近頃渠がために順一が恥辱を蒙つた、五坂熊次郎と云ふ、何とか會社の重役なりしよ!

無念

四十三

誰も同じ事、……順一は小篠のために、遊びの金子に詰つたので、此方から急つて客を求めるやうになつた。敢て以て客と云ふ。順一は美術家でも畫工でも、賣らん哉なら、買人は客と云はねばならぬ。

と此の五坂熊次郎を紹介するものがあつた。……報酬は希望に任せる。が、畫に註文があるから、一度話をしたい、と云ふので、名は豫て……其の人となりも略知つて居る、中學時代から仔細あつて聊か面白からぬ男だとは思つたが、情ない事には、小さく成つて其大いなる門を潛つた。面會する日を、約束してあつたにも係はらず、順一が名札を差出した時、一臺二頭立の馬車が

白鷺

玄關に横付けに成つて居たが、來客ではなく、五坂が何處へか出掛ける處。

で、暫時玄關前に、其のまゝ待たせて置いて、五坂は外出の洋服の、手袋を嵌めながら、人間は何處に居ると云ふ風で顯れた。背後から送出す、二人の書生と、三人の女中を、べたべたと坐らせて、會釋もなく馬車について、上から指の太い手を順一に向けて、

(生憎ぢやが一寸出掛けるで、談話は途中でします。さ、これへ。)

順一は攀上るが如くに乘つた、……止せば可いのに、と後で聞いて私は思ふが、親に人參の代でもないのに、野郎が身賣をしかねない料簡方で仕方がない。

青雲白日、馬車を鷹々と驅らせながら、五坂がした、繪の註文と云ふのは、……自分等同趣味のものが月に二回づゝ早稲田の其邸に會して、何某和尚の提唱を聽聞する。次回には碧巖の輪講と云ふのを遣る。で、其の一席の光景を、庭、座敷とともに描寫して貰ひたいと云ふのであつた。話は四五町の間で済んだが、馬車はなか／＼止まらぬ。牛込、赤坂、麻布と出て、廣尾を廻つて、二本榎から五十皿子くんだり、薩摩原を眞直に……芝の公園で森の中へ放り出された。「紅葉館へ寄るで、失禮するで。」

芝増上寺の屋根を見て、綱がとぼんと立つた時、悪鬼は虚空に雲を捲いて行方知れずなりにけり。……同じ頃、小篠は新橋で鬱いで居たらう。……

坂田金時是にあり！ 順一が打明けて恚うと言つたら、姉もたとひ身を賣つても、其の思ひは

させまいものを、——あ、言甲斐のない。昔々の片腕より、當分片手に成る仕事と、順一は阿容

阿容又五坂の門を潛つて、輪講の席を、次の間に控へさせられて寫して歸つた。

人数は九人居た。客は皆紋着袴で、いづれ目下に違ひない、中に切髪の被布を着た婆さんと、

圓鬘で、小紋の紋着の年増があつた。床の間を、城の如く背負つて、五坂熊次郎、號を青巖齋入

道。忘れもせぬ……大島の着物に焦茶の、些と瓦色ぐらゐるに赤い、無地の紬の羽織で、押直つて、

鐵如意の取手へ、と頸を支くと、さしむかひ正面の處に、色の白い、髻の赤い、眉の薄い、瘦せ

た坊主が、墨染の法衣で控へて、手にした拂子で時々頸首を一寸々搔く。

庭の梅の北面に風渡つて、誰も、烈々と炭の起る火桶を傍へ、碧巖を座に開いた、大廣間を明

放しの、築地の下に造りものの鶴が三羽、……親子で居たのさ。

姉の前も恥ぢよかし……此の趣を十日ばかりで、絹地へ極彩色に認めて、歸途は腕車で飛ばせる氣。歩行いて早稲田へ持つて行くと、直に主人の居間に通して、火鉢と一緒に金五十圓也とした紙包みを押出した。

白 (どれ見よう。)

とサラリと展き、鐵如意で端を押へ、髻を空ざまに撫上げながら、眼をぎろりと凝と視て、

(喝!)と吼えると、傳にこれを獅子吼と號ける、五坂熊次郎入道青巖、畫中の壘をどんと撲つて、

(凡人ばかりぢや。話らん! これは、一人として、禪を心得た顔がない。全然こりや木偶之坊ぢや……君は禪を行らんと見える、話せんな。)

と眞中をぐい、と掴んで、片端からびり、と裂いた。

(其れでは描き直しませうでございますか。)

顔色は變つたが、順一は靜に言つた。

(駄目ぢやねえ、君は禪を解せんのためから、此の畫は描けん。畫料だけ損するで言分はあるまい。)

と最う一裂。

裂く……と見ると、金、其の五十圓の紙包を取る手も疾く、煙草を拂くやうに火鉢へ、ぱつ! 木の葉に銅の香を添へて、ひらくと燃え上る、くるりと鉤に捲くのか壘へ。さつと焦げて飛ぶのか縁へ。

(あつ)と云ふと……さすがの入道、我を忘れて悶く手つきで、空を掴み、兵兒帶の丸腰で足首をぬい、と這身。

順一は片膝立てて居た。喫みさしの巻蓑を棄てて、屹と見て、入道が今這ふ隙に、裂かれた繪絹を一掴みに眞中を挫いで取つて、

(骨は拾つて歸るよ。)

と言ふや否や、斜つかひに衝と出た。……其切逢はぬ。

四十四

其の五坂熊次郎青巖が、此處に相撲取を供に連れて來たのである。さて不思議な事には、前後三度、早稻田の渠の邸へ出入つて、つい、其の横顔も片袖も見なかつた、五坂の細君は、先刻から其處に連を待つた貴夫人である事が、疑ひもなく三人の舉動で分つた。

ちらと一目見たなりで、順一は素知らぬ顔をして、小篠とスウプの匙を取る。

背後で、潜んで、沈んで、ひそくと貴夫人の囁く聲、切れぬに、且すゝり泣くのが交つて

聞えた。

白
戸外に降る雨、餘處に吹く風のやうには、順一の耳へ響かなかつた。其方の泣じやくりを聞いて、婦、何を言ふか、とひとりで冷かに笑つただけでも、既に其の平かならぬ色は面へ出たので驚
ある。況して、其の夫の紳士は、我に對して如何なるものぞ! 麵麩を切る時、右手にキリク

と筋が入ると、力が餘つて、小刀が左の手の拇指の腹へ迂つた。

俯向き勝に、何故か俯目で居た小篠は、しかし注意深い細い睫毛を衝と上げて、

「何うかなすつて？」

順一はカツキと指を嚙んだ。

「何！」と云ふ。

「おい〜。」

と五坂が落着いた聲を懸けた。誰を呼ぶか分らぬに、順一は最う振向いて、唯見ると、五坂は踏張つて、脛を開いて居たのである。

顔を合すと、反身に成つて、つんぐりと腕を組んで、

「おい、其方の卓子の、……」

「何ですか。」と、羽織の袖を引絞つて椅子を握つた。

「君ぢやない、其方に居る其の婦だ。」

小篠は嵐が來たやうに、ぶる〜と細い肩を震はしたが、すつと立つて椅子を離れた。

「私……まあ！」

と身の支へに、卓子の端へ支いた手を、丁と取ると、冷い汗して、あはれに順一に縋ると、取

合つたまゝ、

「五坂君か、多日、こりや私の家内です。」

と順一が言つて、

「お篠、御挨拶を。」

「はじめまして、何ぞ御用？」と、手の指に力を籠めた。

「工面が出来たか、異う洒落るわ、フ、ン、」と一つ嘲笑つて、

「無禮な奴に挨拶はせん。」と、赫と吼える。

「何が無禮だ。」

「不見轉を紹介して、妻ぢやと言ふは、紳士を侮辱したもんぢやらう。何うだ、そんな奴に口は

利かん。」

「利くな、黙つて居れ、其の方が勝手だよ。」

「うむ、勝手ぢやらう、勝手ぢやらう、が然う勝手にはさせて置かん。相當の處置をして遣る。

社會の制裁を加へて遣る。關取、おい、引抓んで二階から放り出せ。可いから、遣れ。私が萬事

心得とる。さあ、抓み出せ、え、遣つけえ！

と卓子をはたと打つた。

ボオイが留める暇もなかつた。
「失せ居れ！」

と言ふと、最う其の以前に、硝子杯の大を十ばかり並べて居た胸の赤い關取が、順一の胸倉を無手と取つた。

「何をやる。」

と聲もよく出す、咽喉の締る苦惱に蒼くなつて、背後へ反る手、思はず當つた小刀を取つて、逆手突きに切拂ふ。

「あれ、」

と小篠の遮る間もない。

「野郎。」と騒がず、ハタと脈處を拳で打てば、弱つた順一が、一堪りもなく小刀を落して、ぐつたりとする手首を壓へ、

「えい、」

で、一押しにぐいと押されて、

「無念。」と叫んだ時であつた。

椅子の凭を片手に壓へて、

「關取、」と身を斜に、片手を胸に當てながら、小篠が若々しい聲して呼んだ。

「一寸、關取、おい。」

「汝あ？」と、大髻をゆたりと見返る。

「辰巳屋の篠を忘れたかい。篠だよ、お篠だよ。」

と云ふ聲は、稍息切れして、胸をしやくるやうに聞えた、が、順一を搔擱んだ相撲取の手は、自から、振放すが如くにはづれたのである。

渠は、若い額の廣いのに、皺を刻んで、へんてつにニヤリとした。

「え、嬢様で。へい、すつぱり見違へたえなあ。」

五坂と其の夫人は、是を見ると、言合はせたやうに腰を掛けた。而して顔を見合はせた。唯、揉手で居る關取に目もくれず、

「あれ、血が。」

白 驚
と順一の手を見て、驚いた胸が震へた。瞻りながら、すつと帯の間から懷紙を引出すと、うつかり取る手に、中挟みの懷中かゞみがばたりと落ちる。

ポオイの一人が、五坂をじろりと見て、一寸拾ふ。

其れも忘れて、懐紙を其のまゝ、小刀で切つた指を包んで、

「痛むの？」

「否！」

「お巫山戯でないよ、關取。」と疵に片頬をつけたさうに、凝と順一の手に打傾きつゝ、角觥取を流眊に懸けた。

「串戯事でがんすでえ、嬢様、其の後は、御機嫌好えか。」

「機嫌は悪いわ。」

「えつへ、えつへ。」と髷に手を置く。

「貴下、最う歸りませう、ね、さ、歸るのよ。」

と年坊をすかす時、恚うよと思ふもの言ひで、

「旦那様がお立ちだよ。送つておいで、關取。」

「ねえ。」

「可厭かい。」

「ねえ、えゝ、参りますで。」

「さあ、おいで。」

と順一を前へ、小篠が續いて、階子段を下りかゝる。……

「可いのか、おい！」と誰に言ふか、大音に五坂が呼んだ。

「然やうなら。」

と顔を上げて、姿が下へ、小篠がすつと下りた時、二階でどたくと音がした、追ふのをポオ

イが宥めるらしい。

後は二人が雨の中を、夢中で電車まで駈出した。

が、此の一場の小劇のために、やがて恐るべき代價を拂はねばならなくなつたのである。小篠

は可哀、五坂の手に殺されて、其の露の身を落した、と言つても好い。

順一が死敵の如くに感じた五坂は、豫て小篠に執着して、追ひつ廻しつ附纏つて居た男である。

然も、藝者にならない以前、築地の砂子に女中した時分から、金子の鎖に捫み、義理の搾木に掛

け、八方十六の手を借りて、或は威し、或は賺し、或は慰め、或は責め……眞面目な時拜みもす

れば、酒を呑んでは、殺す、と短銃を出して迫つた事もある。殆ど狂亂して今に口説く。……

小篠は些とも話さなかつた。順一は何んにも知らなかつたのである。

其の五坂に、思ひ切つて、明白に然うした處を見せた小篠は、胸の中には既に多少の覺悟をして居たに違ひない。……けれども、前後の様子に察して、五坂を知己か、と順一が其の夜、於登利の二階で聞いた時は、

「二三度よばれました。」とばかり、何氣なく言つた。

「しかし、何だ、彼奴にばかりは、私は生命に懸けても……不承知だよ。」

「誰が、そんな氣なら藝者になんかならないんですよ。」

と言ふ顔に蔭がさして、

「貴下、貴下は奥さんに、今のやうなことを言ひますか。浮氣をするなの、旦那取をするなの、然う云ふの？」

「馬鹿な事を。」

と笑ひ棄てた。が、餘りの事に、呆れ顔で瞻ると、小篠は目を外らして、

「あゝ、情ない。……貴下はそれぢや、もしかすると、私が客に出るぐらゐに思つて居るのね。」

そんな氣でおいでなすつて、何故私に、黙つて伊達先生の風説をさせて許して置くの。——罰が當るぢやありませんか。」

「そりや少し話が違ふ。何も、何が何うしたからつて、風説をして不可いつて事はない。」

「ぢや、旦那取をしるつて言ふの。」

「又、詰らん事を——しかし、好きな男なら勝手にしたつて可からうと思ふんだ。お浮氣は御意のまゝ、」

と活路を開いて、少し落着き、

「可厭な客を勤めてこそ、賣るの何の、と言ふけれど、氣に入つた男なら、そりや色戀さ、色戀は自由だよ。誰が故障を言ふものか。辰巳屋の小篠さんが浮氣をしたつて、先生に、別に失禮な事はなからう、何も勝手だね。」

「勝手にしますとも。」

小篠は、怪我した順一の指の、結目を弄びながら、肩で胸を推向けて、

「好きな人でありさへすれば最う遠慮なんかして居ないわ。……生命がけで恚うと云ふんなら、

「でも不便だつて、先生が然うお言ひなすつたつて、娘で居て唯上氣せて、恥かしいのが先に立つて、控へてばかり居たもんだから、和歌吉さんに好い事をされて了つてさ！ 口惜しいつたらありはしない。あの、まあ、打付けに先生を口説いた圖々しさが、それでも羨ましかつたものなのよ。貴下、先生を連れて来て下さい。最う今度なら遠慮はしない。……眞個に勿體ないほど好いたらしい方だつたわね。それで何かがお出来なさるんだもの。……何處の宴會へ行つて見ても、まつたくさ、伊達さんに較べると、口説く人は誰の容子もえてに見える。」

「私は端藝者でも、えて芝居の女形ぢやないわ、お客が取れるもんですか、考へて御覽なさいな。慙う顔を袖で隠しても、先生のお姿が今でも目前にちらつきますもの、然うすりや何處か私の身體に、先生の影がついてるんでせう。……其の身體で、罰が當るぢやありませんか。」

「最う一言もない、冷汗だ。」

「否、處が貴下の身體にも何處か先生の影があるの……ですからさ。」

「あ、最う止しておくれ。」

「順一は、四邊を眊して、聲を密めて、

「ひやく／＼する。……」

「可い事よ。私が悪いんだから、謝罪つてあげませう。何うせ先へ死ぬんだから。でも、もう私

も先生とはまるであかの他人ぢやないわね。何時かお宅へ伺つた時、奥さんが、貴下の代りに、私の持つて行つた重詰ものを、先生の寫眞にお供へなすつたわね。——口惜しかつたわ、私。」

と膝に手を懸けて、

「貴下と二人で見せつけるのを、日蔭ものの私なんぞが、其れを妬きはしないけれども、あ、なすつた御容子の、先生と親類附合ひなのが、私は、口惜しい。羨しい。……あ、早く死んで冥土へ行つて、先生のお臺所を働いて、悪口が言はれたい。」

と手を迂らして膝に突伏す。其の背を抱かうとしたが、尊いものに觸れるやうで、ハツと手を控へさせられた。

四十七

「あ、然う言へばね。」

と小篠は氣も心も許した風で、上搔緩く居直つた。

「私、昨夜、伊達先生の夢を見たのよ。芝居の二重を見るやうな、立派な座敷の高い處に、あの一樂のお羽織の裾の短いのに、慙う腕を出してね、絹地へ繪を描いていらつしやるの。……何うして行つたか知らないけれど、私が密とお傍へ行くとね、振返つて御覽なすつて、

(お篠さん、よく来たな。御馳走をして遣らう。)
とおつしやるから、

(はあ、何うぞ。)と言つたの。

直に立つて、づん／＼行らつしやる。圖々しく後へついて行つたもんです、……とさ、夢だわね。其の先生の足許へ、繪の具皿がひよい／＼と飛んで、歩行いて来るぢやありませんか。而して、何處へ行くのか知ら、と思ふと臺所へお出なすつたの。廣い／＼、そりや綺麗なお臺所よ。

——直ぐに其の皿から繪の具がどつと湧き上ると、青鬼だの赤鬼だのに成つて、すた／＼働いて、組板を直すのもあれば、井を出すのもあるし、金齒を嚙んで胡坐搔いて、はた／＼七輪の火を煽ぐのもあるんですよ。油が黄色く煮えてね、先生がお手料理で蝦の天麩羅をお拵へなさるんです。私が頂いたの。

(お旨い、お旨い。)つて嬉しがつて食べるもんだから、先生が莞爾なすつて、

(お篠さん、あひ變らずだな。)つておつしやつたわ。……ねえ、ですもの、お客に出てはならぬぢやありませんか。これなら、お弟子の何んだから、お臺所には置いて下さるわね。其のね、赤鬼青鬼が、皆置物のやうに、美しくつて可愛い。先生は、あゝ云ふ豪い方だから、鬼が皆御家來なのね。そりや、よく働いたわ。些とも可恐くはなかつた事よ。お客たちより附合ひ可い、

……最う私。

と鳥が窘んだやうに又突伏す。順一は一種言ふべからざる悽愴の感がした。

「お篠さん、そんなに辛いかい。」

「察して下さいな。」

と寂しい品の可い顔して、それでも恚りかゝつて甘えて言ふ。

「怒つちや不可いよ。私もつい、此の頃ばかりは金子が欲しい。」

もそりと、あの五枚を其處へ出して、而して笑はせるつもりで、自動電話に閉ぢ込まれた事から、古郷人の話をする……

と、疑と聞いて居たが、棲を引いて、向うへ開いて、些と更まつた調子で、

「先生。」

「應。」

「先刻、あの風月の二階で、私を家内だ、と然う言つて下さいましたわね。」

「……………」

「ねえ、」

「つい、つい其の何だ、悪かつた。」

「否、嬉しかった、私は嬉しかったわ。ボオイも相撲取も、後ぢや奥さんと言つたのね。も、一生に唯た一度でせうよ。其のね、先生、」

「家内と言つて下すつたお禮に、私や貴下を男にしたい。まあ、恠う言ふと、差出がましいやうだけれど、何うぞ、此の、私が頂いた此のお金子は、其の、本郷で、西洋料理の屋臺を出して御夫婦に立替へて上げて下さいまし。……聞けば其の御新姐は、五ツになる男の兒の手を曳いて、乳呑を抱いて居なさるツて言ふぢやありませんか。——而して迎ひに出た主人の方も、路頭に迂路迂路して居るでせう……其の御新姐が義理知らずで、貴下を棄てたのなら猶更ですわ。」

私のやうな意氣地なしが、言はれた義理ぢやありません。實際欲しい、父親は内に大病だし、私は身體に借金ばかり。成らう事なら、小指を切つても取替へたいお金子だけれど、……又其れだけの金子ですから、其の人たちに上げるのに張合があるぢやありませんか。先方が不實なら不實だけ、——そんな時には氣前を見せるものですわ。——何んのために江戸兒の情婦がついて居ます。」と、屹と言ふ。

四十八

直ぐに、忘れたやうに莞爾して、

「……まあ、お恥かしくつて、お話が出来ないんですけれど、こんな時だから言ひますがね。心持を悪くならずつては可厭よ！ 可うござんすか。」

私に何んなの、あの、許嫁の従兄弟があるんですよ。」

——茲で話した。——

「與吉さんと言つてね……今はね、芝浦の方へ引つ込んで、天秤を擔いで居ますがね、多町の可い加減な處の若旦那で、そりや大人しい可い人よ。其を私は嫌つたの。自分がこんな風で居て、人を嫌ふもよく出來た、と言ふでせうけれど……其の煙草を下さいなね……あんな顔をしてさ。」

「あ、吃驚した。串戲ではない。實際謹んで聞いて居ます……」と沈んだ聲をする。

「謹まなくても可い事よ、お寢轉びなさいなね。さあ、」

「いや、それ處ぢやない。然うすると……」
「聞いて下さいな、……でも、何だわね、先方が娶つて遣らうと言ふのを、私の方で可厭だ、と駄々を捏ねたんだから、まあ、嫌つたんだとお思ひなさい。先方は迷惑でもさ。又お嫁にゆかれますか、考へて御覽なさい。」
驚 白
今でさへ何んだものを、其の時分は、濱町の家で、一寸々伊達先生にお目にかゝれるんぢや

ありませんか。

父親は頑固ですけれど、そりや目のないほど私を可愛がつてくれますし、母親は何も言ひなり次第。娘が断つて可厭だ、と言ふならと、……尤も、遣つ返しつで、随分面倒な事もあつたんですけれど、何うにか極つて、破談に成つたの。

父親の兄と言ふ人が、——伯父だわね、——其の後亡くなりましたがね。それは何うも料簡の狭い人で、私の其の事を根に持つて、久しく繰廻してくれて居た、些と纏つた、二千圓ばかりのお金子ですがね、……耳を揃へて返せと言ふの。

(娘に知らして、此れがために多町へ嫁くと言出されては、身を賣らせるも同一だ。言種が氣に喰はねえ、叩き返せ。)

で以て、私にも知らせないで、随分左前だつた處を、すつかり縁切りに返したんですつて。……其のためと言ふんぢやありませんけれど、何んの彼ので、濱町の家を疊んで、私はあゝして砂子へ奉公したでせう。……

父親は何んにも言はないで居ましたけれど、……内證で、母親に聞きましたね、私が嫁かなけりや金子を返せ——随分だと思つたのよ——其の後は、行通ひも碌にしなかつたんです。昨年ねえ、あゝ、砂子で貴下にお目にかゝる五六日前でしたつけ。皆が晝寢をして居ると、私

は何んだか寢られない。……自分の箆の前へ坐つて、引手に、あの先生の蚊遣火の懸物を掛けて、凝と視めて居りますとね、お亡なんなすつた方だ、と思ふ氣の所爲か、それが送火のやうに見えて寂しかつたの。夏だけれども心細い。拭掃除から、忙しけりや皿小鉢の洗ひ方、朝晩人の機嫌を取つて、何時寝るやら起るやら分らない、奉公の辛さが身に染むと、……つい里心が起つてさ、内が戀しくなつたでせう。……悄然と階下へ下りて、入口へ立つたんですが、おいそれと出歩きの出来る身體ぢやなし、あの兩方の葭簀戸で、何んだか私は……

と言ひかけて、聲が曇つて、

「籠の鳥より尙果敢ない、蟋蟀のやうな氣がしたわ。縁日で買つて來た、貴下も覺えていらつしやるつてね。彼處の鉢の、白い桔梗を、戸を開けて出る元氣もなしに、葭簀越に茫乎視めて立つて居ると、密と格子が開いたでせう。

黙つて入つて威かす氣か、人の氣も知らないで、と振向きもしないで居ますとね。

(もし〜)

つて呼ぶのよ……

(もし、御免下さいまし、姉さん、あなた、お篠さんぢやありません。)

とさ、……覺えて居たわね、よく！……あの、其れが、多町の與吉さん。……炎天を蝙蝠傘な

して、汗ぐつちより、まあ、見すばらしい態をして。」

四十九

「二階の小座敷へ通したんですよ。……何しろ暑いからと思つて、氷と水菓子なんか電話で言つて、手拭を絞つて遣るとさ。」

(あゝ、勿體ない、何うも)……なんて、芳町、柳橋を面當にも荒した人が、羽織なしで顔ばかりぐいぐい拭く。……恚う單物の袖がよれぐに腕を捲いてるつて風なのよ。浴衣を出しても着ず、團扇で煽いで遣れば、べたぐと叩頭をする。而して何か言ふ前後には、叔父さんにも、叔母さんにも、叔父さんにも、叔母さんにもツて言ふのがね……其れが何んなのよ……何んですかね、胸へキヤ〜可懐く響くでせう。えゝ！ 飲まして遣れ、と間に合はせのお通しもので、ビールを出して、

(まあ)

と言へば、

(堅く禁酒でございまして、全く、否、全く不可ません。……何うぞ拜借)つて、私其處へばつたり置いた團扇を拾つて、一寸頂いて、胸を開けて煽ぐ工合が、落魄れたもんだわね。

可哀相に成つてさ。伯父さんも飛んだ事をなさいましてね、と其の時分はじめて言ふ始末。随分しばらくなんですもの。

(與吉ちゃん、此の頃は何うなさいました)つて尋ねると、……可い機時と思つたかして、外のことでもありませんが、家中を一ツ助けて頂きたいと思ひまして、叔父さん叔母さんには内證でございしますが、とのつけから切出して。……詰まり何だわね、立行かない家の整理をして、商賣をはじめめる、尤も、自分で天秤を擔ぐ決心だからつて、五百圓金子を借りるのに、私に判をしてくれろ、連帯に成つて欲しいと言ふんです。

貸手が、何故か私が判を捺すのなら、千圓の證文で、八百圓は貸すと言ふ。ですが、五百圓あれば足りるツて、手を支いて頼むんでせう。

考へたわね。……

まあ、何しろ思案を極めて、二三日の中にお返事をしませう。

(與吉ちゃん、兎に角悪いやうにはしませんから、否、言ふもんですか、親たちには)……と然う言つた心の裏ぢや、判も捺さうし、——まあ、最う些と——考へた事があつたんですよ。——

白 可ござんすか。

では、一ツ飲ませて、と思つて、

(可いぢやありませんか、前祝に一口)とまで勧めたけれど、……堅く矢張り禁酒だと言ふでせう。其れも何んだか頼母しくつて、可かつた處が、雑と話もついたものと喜んで、そはくして、歸りがけに、恚う言つたの——お聞きなさいよ——箆笥に掛けた其の掛物を見てさ。

(十種香の段ですか、お篠さん。)

……私や最う悚慄として氣障に成つたの！ 悪い氣ぢやないだらうけれど、うまれつきなら仕方がない。

でも、まあ考へたわね。……其れを氣障がるも我儘が知ら。——恚うして、一生、意地を張つて居た處で、張合のある操ぢやなし、と掛物を見ると悲しくなつて、一層、與吉さんと夫婦に成らうか。其の人も、最う辛抱人。私で金子が出来るのなら、五百の上へ最う二百圓も拵へれば、八百屋でござい、と言はせなくつても、小體に店を張れようから、と二晩ばかり、實際寢ないで考へたのよ。

其處へ、あの、津川さんが、貴下を連れて見えたでせう、先生、と、順一の指を、ぐいと引いて、切の結目に皓齒を當てた。

「……手切がはりだ、何うなるものか、と直ぐ五百圓の證文へ。

其れだつてさ、まる切損をさせられようとは思はないし、先方だつて頼みに來たくらるのですから、確な當のあるやうに言ふんだわ。判だつて、今に成つて思ふほど、可恐いものとは思ひませんもの。

(此處と此處へ……此處へも捺すんですか、此れで可うござんすか。)

つて、べたくく捺したの？ 利息ばかりで、現金だけ、最う……二度も私が拂つたのよ。……母親にも譯を話して、手傳をして貰つて、苦しい中へ借金させてさ、どんなに叱られたか知れません。そんな、こんなで、藝者にも成つたけれど、先方を怨みはしませんよ。」

廻舞臺

五十

「誰の困るも同じ事、と然う思つて、して遣つた事ですもの。不義理をするとならないとは、其れは先方の勝手でせう。」

考へて見れば、伯父さんが、依怙地から、私ん許の家藏を賣らしたやうな中なんですよ。……でもねえ、名ばかりでも許嫁と云ふんですから、好嫌ひは此方の勝手よ、厭なものは厭なんです、そりや我儘でも構ひはしない。

ですが、義理は義理なんです。頼まれて出来る事なら、して遣らなければなりません。ですから、貴下も、其の方たちに、して上げて下さいな。一旦私に下さると云つたお金子、決して貴下のお小遣ひになさいとは言ひません。それは可厭。……否、もう一つ、別に工面をして下さるなら……其れを私に下さいませ。ね。其の方たちは東京へ来たてでせう、方角も分らなくつては、眞個に可哀相だわ。——東京で難儀をさせると、東京を怨まれる。……田舎の人に嬉しからせてお遣んなさいよ——私に寄越すと其の方たちに上ると、どつちが可いか、聞いて御覽なさいまし、伊達先生は何ておつしやる？」

順一は、はつと俯いた。

「女が憎いの、襟許についたのつて、襟許についたものは可哀相だと思つてお遣んなさいなね。何うでも可いわ、そんな事は、其の代り私がついてるぢやありませんか。」

と摺寄つて又膝に置く、手を取つて、順一ははらくと落涙する。

階子段に蹠音がしたので、小篠は黙つて、其の紙幣を、一寸頂く眞似して、順一の懐中へ入れながら、裳を浮かして、するりと摺退く。

十九貫六百目が入つて来た。衣紋を咽喉輪でひよいと緩めて、一つ顫でしやくつて、「大分、お静でございますね。」

「これから浮かれる處なの、」と小篠は三味線を引寄せる。と、どたりと膝を支いて、中腰で目をばちく、

「お前さん。」

と仔細ありげな、滅入つた調子で、

「断り切れないよ、……私は。先刻から、あの通り引切なし電話だもの、ね、だから……一寸でも、」

「もう遅いわ。」と言ひながら、手にした撥を薄く坐つた膝へ落す。……

「遅くつたつて、其處はお前さん、勤めだあね、ね、あれもあるし、そらね、あの事も……それ、いつかの事も、」

と云ふのが、一つく責道具で、土壇場の俵を犇々と積むかと聞えて、小篠のがつくりと俯向いて、両手を胸へ、肩を落して、両袖の細くなるのが、縛めの繩目に引締められたか、と無慚なり。

抜衣紋でねちく、

白 「でせう、だもの、お前さん、ねえ、稲木さん、」

と額で見越す。

「まあ、一つ獻げよう。」

「え、と氣のないやうに、杯を受けながら、直ぐ其の額で黒く睨んで、

「一寸、何んなさいよ、……稲木さんだつて、分つた方だあね。何も御自分一人のものゝ極めていらつしやりはしないしさ、……ねえ、貴下。」

順一は少からぬ侮辱を感じて、聲もやゝ激しく言つた。

「お出掛けな、おい。」

ト其の懷手で、可厭だと、ぶる／＼と身を震はす……駄々を捏ねるやうに娘めくのが、筋を絞るばかりに果敢ない。

「串戯ぢやありません、些とは苦界だ、とお思ひなさいよ。……何時までお嬢さんで通るものですか。八方詰まつた身體で居ながら、然う我儘ぢや私が困るわ。私が、……ね。でも私は私さ、他は皆他人の中に居る、お前さん身體ぢやないか。金子が敵よ、ねえ、旦那。」

……其の言葉の終らぬうち、小篠は拗ねたやうに衝と立つて、突放すばかりに出ようとした障子の際で、三味線を杖に、裳をや、斜に引いた、すらりとした姿で留まつて、象牙の撥を額に當つて、伏目に密と見返つた、長押の額の影がさす、ソレ其の鬢の濃いのが戦いて、顔の色の悪い事！

「直き歸ります。……雛子さんに來て貰つて、待つて下さいな。」と撥の尖で、前髪をぐい、と搔く。

「いや、又來よう。」

と順一は、それでも敏く帽子を引摺んだま、突立つた。

「惡留めせずとも離せでせう……後々がお楽しみでさあね。」と、忽ち笑崩れた御機嫌の體で、於登利は猫のやうな手つきでちよつかい。

で、先に座を立つた、小篠に却つて送られて、階下へ下りたが、早急だつた處から、小女が出て來る間もなく、小篠が撥を帯に突刺したなりで、下駄棚から順一の履物を出して、序に自分のも其處へ、カタリと白い手。

杖を握る袂を、一寸取つて、低聲で、

「御機嫌よう。」

「お傘は？」

と十九貫が、小篠の上へ押冠さるやうに立擴がつた。

「雨は留んでる。」

何うかは知らず、心の闇へ、石塊の如くドンと出る。

硝子戸をしめた途端に、木挽町の曲角から、ものの半町とはない、於登利の軒へ、宙を飛んで、矢の如く、がら／＼！と着いた腕車がある。

黒雲のやうな外套を着た男が、渦まくばかりに躍り出づる、と凄まじい音で、戸を開けて、

於登利！ お篠の奴あ此家に来て失せをらう。

と怒鳴込む。其の聲音まで、横木戸の暗へ身を躲はした順一の胸へ、釘打つばかり響いたのは、五坂熊次郎入道青巖であつた。

五十一

「まあ、何うせうね。」

——と姉は、私の話を此處まで聞いた時、悪寒がするやうにわな／＼しながら、身動き激しく、がつくりと横に寝返つた。

「フ、ンと一つ嘲笑つて、私なら鼻唄で歸りますさ。チリチンとか何とか、そ、つて。」

「そりや、酷いわ、そりや孝さん、薄情ぢやないか。」

「……薄情、何も薄情なことはありません。」

「だつて、そんな人につかまつて、何うなるでせう、私は聞いて居ても氣が揉めて仕様がなない。」

「何も六ヶしいことはありませんさ。たか／＼お伽をする分の事です。——で、まあ、何うせ野

郎はのろいんだから、貴下、私ねえ、とか何とか鼻聲で、四方八方借金を抜くかね、残りをお小遣にして、情人と差向ひで、鰻で茶漬る……」

「まあ！」

「其のかはり相手が違ひます、相手はお篠さんぢやない、……私のは雛子つて言ふんです、少いのに自前でね、抱妓の二人もあらうと云ふ働きものさ。」

「可厭だ、どんなに美人なの。」

「何故？」

「でも、お篠さんは、そんなに困つて居なすつたのに、同じ藝者で、」

「姉さんも可い氣なものだ。容色や藝で、今時の藝者が立ちますか。御聞きなさい。雛子の方には、月々たんまりお手當の出る旦那が、三人さ。……最う一人あらうも知れぬ。其の外、色男もいづれあらうし、客は勿論。私の言ふことを肯いたくらるだから、誰にでも……一寸々々轉ぶ。」

「まさか。」

白 驚 「否、現に於登利ぢや、二階へ一人其の旦那が来て居て、階下には鴛鴦の懸物を斜に睨んで、私が控へる事が毎度あります。驚きませんな。女も、一寸今何んだから直きよ、と澄まして居れば、

宜しく頼むぜ、なんて此方も平氣さ。恰もこれ兩社の犬相並んで、一匹の牝を追ふが如し。何うです、人間同志憐れう悟りを開いて了へば六ヶしい事はない。中には可厭なものもあるだらうけれど、幾千金にはなると思へば、些と毛色の變つたのも異だぐらるで目が瞑れる。……但し凡て人間らしい扱ひはしませんね。待合の嬢なんぞ、勸工場ものの賣品氣取だ。此の方は些とお品が宜しい、なんてね。又……今日は些とお間に合ひかねます、明後日、と紺屋並に口を利く……何うです、凡そ女が、可厭な奴でも金子で自由に成らうと思つて、斷念を付けさへすれば、天下に面倒は少しもない。其のかはり、女なんだか、牝なんだか、其の邊は覺束ない。「そんなに悪く言つて、孝さんは、其の人をお嫁にする氣ぢやありませんか。」と姉がまた憂慮しさうな目をして仰向く。

「平生景氣に言ふのさ、洒落なんだよ。眞面目だつた日にや此方も牡だね。……第一旦那が二階へ来て居る女を、女房に出来ますか。考へて御覽なさい。たとひ口約束だけでもです。女房に成らう、しようと言つて、其の上見すく、他に客のある事が分つて居た日にや、知つて居て女房に旦那を稼がせるか、美人局も同然だ。洒落だから構ひはしない。此方は蜻蛉を釣る氣です。藝者イコオル達磨木菟犬張子だから可いけれど。……もし假にも、事實女房にしよう、成らうと云ふなら、口へ出した、其の場、其の時限り、斷乎として他の客は取らせませんね、旦那も七里濼排

だ。其れが出来なけりや止す分の事。又表向其のつもりで、内證で男を拵へりや、忽ち密通の扱です、情男ならくれて遣る、客ならば四つにする、旦那なら、へん、此方が逃出す……」と言ひかけて、旦那も容も情男も……私もある……其の雛子と言ふの、淑女らしく、貞女らしく、然も眞面目に澄まして居る處女らしい顔色が、弗と蚊帳の目へ浮んだので、私は獨りで笑ひ出した。……

「眞個？ 孝さん、ぢやお嫁さんにするなら他の人は止さすんだわね。」

「勿論、」

「あゝ、安心した。お嫁にするなら然うなさいよ。」

「出来ない。」

「何故？」

「出来ませんとも。直ぐ其場から止させるなら可し、藝者で居る内然うした日にや、其れこそ今の、お篠さんの境遇になる。……尤も、あの人の、順一さんが然うした譯ぢやない、……伊達先生と言ふ神業の本尊があつて、男を寄せつけなかつたさうだけれど、ね。」

白
「さあ、然うなると、野郎は些と持て餘す——女の操を尊んで、もし其の操を奪はうとする敵があつて、女の力が足らぬと成ると……男は、ために生命がけに成つて戦つて遣らねばならない。」

と女が待合へ残つて居て、五坂が其處へ、狒々の荒れたやうに成つて、躍り込んだとすると、何うして——鼻唄ぢや歸られませんか。」

「順一さんは何うおしなの!……孝さん、お前さんなら何うするのよ。」

「困つたな!……此奴が雛子だと、翌晩祝儀を達引かせる處だけれど——先方が、お篠さんなんだらう。女が小篠で、私とすると、其の場合、……まあ、然うさね。巡查の假聲を使つて表を敲く、可訝しいな。急病だと言つて引返して、餘處ながらも……不調いなあ。チヨツ儘よ、私なら出刃庖丁だ。向顔巻で飛込んで、女を攫つて駈落さ、邪魔立する奴あ刺通す……」

「そんな事より、順一さんは?」

「あゝ、姉さん。」

と聞返した……

「何かい、四月の末……其頃さ、夜遅く跣足で歸つて來た事があるかい。」

「あゝ、ござんした。」

「で、何んと言つたい?」

「指は西洋料理で。それから酔つて居て、途中で溝へ踏込んで、片方取れないから、両方とも打棄つて來たんだつて、」

「窮したりと謂つべし。……指を切つて溝へ嵌つたは情ない。それ〜姉さん其時ですよ。……」

腕車はね、五坂を下ろすと、直ぐ引返して了つたとさ。こりや急には歸らない、と思ふのが最う彼是十二時でせう。尙氣が氣ぢやない。隣の壁越に氷りついて立つて居たが、堪らないから密と行つて、通り越して、又引返して、二三度迂路々々しながら、例の其のね、硝子戸の、龜裂が入つて機關のやうに破れた處から、内證で覗くと、寂然として、五坂のは固より、今小篠が自分で出した、其の駒下駄まで影も見えなかつたのには慄然とした。

それは未だ可い。土藏腰へ投首で又立つと、カタ〜、と蹺音が三和土に鳴る。あゝ、歸るか、と思へば、澤ちやんが、顔を出して、通りの兩方を覗いた後を、掛金を、ガチリ……は何うだらう。

(えゝ。)と思はず聲を絞つて、杖で地を打つと、カツキと石に當つたはずみに、ぱつと物凄い火が暗夜に燃えた。

其の杖をポロリと落して、立竈みに成つたと言ふ。

白
少時して、まだ其れでも未練らしく、戸を引いて見たんだとさ、動かない。で、力を入れたが、ぎつしりして居る。開かなくつて僥倖です。……此方の勝手がやあらうけれど、もしか、夫が鎖つて居ないで、がらり、と開いたら、何の面さげる氣だつたらう?

然うした順一でもなかつたが、考へて見れば氣の毒だね。
焦々して苛立つて、足踏して、爪も通れ、と握り締めた拳が、べつとり！冷々するから、雨が溜つたのかと思ふ？……其の間、絶えず糠雨なんだらう。凡て蕪村の化傘以來、雨の降るのは禁物です。

唯見ると、宵に最う留つて居た指の疵から、流れる様に垂々と血が出たとさ。……
さら／＼と音がして、雨垂れが、……其の土藏腰と、於登利の軒燈の間に、忍び返しの付いた、見ると一間ばかりの木戸がある……其の木戸へ沁込んだやうに聞えると、密と開いて、姿が横に成つて出たと思ふと、ひたと身返しをして、すた／＼と跣足で駈出すのが小篠ぢやないか。」

五十二

「あゝ。」
と姉はがっかりして、
「まあ、可かつた……」
「いや、義兄、人魂が誘つたやうに、ふら／＼と出て、ひつたり附着く。小篠と肩と肩で、何うした。」

(助かりました、影身に添つて下すつたわね。)

(可いかい、一人で。)

(其處から車で、あゝ、話がして居られません。追掛けて來ようも知れない。然うすると見つともないから。)

(ぢや、急いで、車まで履いといで。)

で、びたりと其のま、下駄を脱いで、小篠より眞先へ順一が駈出す。

(稲木さん。)

(……………)

(御機嫌よう。)

と、うるんだ聲を、聞棄てに。……

これだもの？ さあ、當分、順一さんは憑物がしたやうに茫乎したり、そは／＼したり、何だかきよとついて居ただらう。姉さん、堪忍して聞いてお遣り。」

五十三

白 驚
で、又五坂が、何うして於登利を知つて居たかと言へば、何も紳士が待合へ飛込むのに、敢て

遮るものは無からうけれど、何んだか様子が、初手から其の十九貫と懇意らしい。其の筈で、お篠と一緒に、砂子に居た時分から、五坂は其處の常得意。

然も於登利が、房州、濱町、築地から此の木挽町へ、道中雙六の目を出して、待合を開いた、其の資金は、實は五坂から出たのである。

これにはお篠が困と成つた。

御存じの通り、情立てる男は確にないが、お嬢さん氣の失せない我儘から、男嫌ひな、あの人を、御恩返しに私が口説落しませう。で、いつれ貴客の持物になる女に、水仕事なぞさせて置くより、待合を出させてお遣りなさいまし。すると、お篠さんと私とが共同で、篠鳥とか鳥篠とか、但し、お差支が無ければ、熊篠となりとして軒燈を上げませう。二人とも……砂子では名取りの女中、やがては御損も掛けますまい。

年増をお口説きなさるには實を見せるに限りません。

と、於登利は五坂へ持掛けて、お篠には、又利害を説いて、其の口からも頼み込ませた。

入道青巖二つ合點。

忽ち待合が出来上る、と其の座敷開きに、お篠を靡かせようとして、硝子杯に水差まで並べたので、袂を拂つて出て了つた。……お篠も實は正當の金方がついて、於登利と共同して商賣をす

るつもりで、箆笥、鏡臺、茶道具から、娘の時の寫眞まで、自分の世帯と、親たちからも祝ひかたがた譲られたのを、於登利の内へ持込んで、其處を住居と思つたのに。……

あやがあつたに吃驚して、身體ばかり抜けた始末。當時まだ大概残つて、順一も知つてる、湯呑などは、……お篠が自分の待合の藏から出して、使はせて居たのである。

五坂たるもの、黙つて居ようか！

けれども、御恩借の金子全額は、證文を書いて私が印紙を貼ります。一旦はお篠さんが、内々承知をして居ながら、其の場に成つて心變りをしたのが悪い。

と塗りつけて、しかし長い目で御覽なさい、じり／＼と詰寄せて、いつれ貴下のものにしないでは、此の於登利が棄置きません。利息の上へ一式の御恩返し、とニヤ／＼とするものを、青巖入道も手が附けられぬ。

で、まだか、まだかと、美しい犠牲のみを迫る。……

迷の辻

「と、然う云つたわけをね、雛子が知つて居て私に話したんだよ。——是から話すがね。……愈其の櫻之實一件の晩さ。そら、順一さんの杖の脈を引いて、私が奥の六疊で、一組の方は、二階に閉籠つた其の時だね。——

伊達先生の其の掛物が懸つて居たので、妙に私も気が緊つてね、……其の中雛子も来たけれど、平時のやうぢやない、そんなに膝も崩さないで、ひっそり飲んで居たとお思ひなさい。

何處かで泣き聲がする。いや、何處かぢやない、直一間おいた隣の茶の室らしくつて、聲は立てずに、音を忍んで、泣いじやくりをするんだね。

(小篠さんが泣いて居ますよ。)

と、竊と耳の處で、雛子が言ひます。

私も蟲が知したのか、すぐに其がお篠さん！ 何うも小篠らしいと思つたので、初めから小女なんぞぢやない事が分つたんです。

(何んだ、何んだらう。)

(大抵分つてますわね、又何か氣障を云はれて居るんでせう。此處の女房さんも随分だよ。前のお主をつかまへてさ。否ね、小篠さんが、あゝ云つた人でせう。其れでなくつてさへ、まるで人を受けつけない處へ、貴下の義兄さんが出来たんだもの。)

其れも可いけれど、あの人も、父上は病氣だと云ふし、着物から、お小遣さ。附合は張る、慈な稼ぎぢや月々の芝居の義理見物にだつて足りませんもの。……然う云つちや悪いけれど、まるで相談が出来ないんですから。お座敷だつて宴會の一座か、前からの馴染が、ぼつ／＼義理で来るぐらゐるだもの、追つきませんわ。つい、借金をするぢやありませんか。

借金をするたつて、身體はあの通り、弱い人だし、三日にあげず煩ふでせう。當のないのに、然う主人だつて貸しはしない。そりや氣の毒なやうに苦しがつて、五十錢だ一圓だつて母親にお小遣を借りるんですつてさ。今時、親にお小遣を貰ふやうな、そんな藝者はありはしない。てつて悪く云ふんぢやないの。客取りをしないと、お身装は鹿末でも、金剛石の指環は嵌めてないでも、何んとなく清いわね。威があつて、品があつて、それは何よ、口惜いが一座でもした時は、私はじめ頭が下る……

ですが、其れでは當人が立行かない。切端詰まるもんだから、外で最う都合は出来ず、……詰りはね、此處の女房さんに借りるんですとさ。判を捺して貰つたのも随分あつて、其の利息ばかりでも、月々十五や二十ぢや濟みませんとね。

又女房さんが貸すんです、……と云ふものは、其處に的があるんだわ。)

と尙密めいて、五坂の事を、此處で雛子が話してね。……

「……ですもの、其の氣が有るなら、眞個は小篠さんが此處の御主人になれたんだわ。今ね女房さんの取持ちで、小篠さんが云ふ事を肯きさへすりや、五坂さんに借りた分の女房さんの借金は、自然帳消しになるんだわね。其れがあるから貸しとして、じり／＼じり／＼責めつけるんだわね。出来ない相談をするんぢやない。お前さんの心一つで、黄金の山があるのぢやないか。それを見ながら、人を苦しめてさ、もう私は立行きません、助けて下さい、後生だから、なんて下から出て拜んだり、いづれさ。……馬鹿にしてるよ、義理知らず、と怒鳴つたりさ。屹と又責められて、其れで泣いて居るんですよ。」

（ちよつ！ 困つた野郎が附いてやあがる。其れにしても苟くも客だ。義兄が二階に居るものを、其の對手を泣かせるなんて、……人を馬鹿にした肥満奴。）

と、十九貫が癩にも障れば、あの、纖弱いのが可哀相だ。」

五十五

「一體どんな熱を吐いてやあがる。待てよ、で、雛子の奴が氣を揉むのも構はないで、權柄づくに吩咐けた。」

目配せを合圖に、ソレ一二の三、で雛子をはかりへ立たせる仕組で、其方の戸を開けると一

緒に、此方の襖を竊と開けて、隣の室へ忍び込むと、あとは隔てが唯一重。

両方が密々でも、大概は聞取れる、……先生の懸物々と云ふのが處々へ入つて、……え、然うですとも、勿體ないでせうともさ。何うせ私ん處は地獄宿だから……あ、口惜い、あ、口惜い！ 地獄宿だと云はれたのは始めてだ、と於登利が搦む。誰も、そんな、失、禮、な、事は云ひませんと、切々に聞える、と、……だつてお前さん然う云はないばかりぢやありませんか。良人が、そんなものが好きだから、一寸借て掛て置きや、一旦承知をして貸ときながら、三日も經たないのに持つて行かうなんて、言種が何んです、勿體ないとは。

でも、皆さんがお遊びなさる處だから、……と含んで掠れた小篠の聲。……え、然うですとも、お遊びなさる處ですともさ。誰人も人一倍席料を出して、汚くお遊びなさいますのさ。お綺麗なのは貴女ばかり。お顔もお綺麗なら、お身體もお美しい。其の代り一方ぢや又随分と御勘定に汚いことをなさいます。やれ、於登利さん、それ女房さんで、御勝手な時はお姫様御用金だ。まるでお主へ忠義のため、こんな下つた稼業をして利息を拂つてあげてるやうなものぢやないかね。……第一何だ、お前さん、二人で待合を出さうと云つて、大金を借りときながら、いざと成つて御都合で嫌氣がさしや、そつくり私に押付けてさ。然うかつて看板まで出したものを、止められはしないしさ。……まるツ切私一人貧乏くじを引背負つて、誰方が高みで見物だよ、……遣

切れるもんぢやありやしない。

いや吐いたもんです！

そりや女房さん餘りだわ、と小篠が、其中でもきつぱり云つた。何が餘り……と押冠せて、何が餘りだよ、お前さん、其の證據にや證文が入れてあります。五坂さんに借りて見ませうか、え、見ませうか。私ばかりの名で丁と證文が入れてあります。突付けて見せようかね、餘りだ、何が餘り！ 舊の御主人だと思やこそ、百に九十九まで蟲を壓へて、おはいくで居りや可い氣に成つて、附上つて、何が勿體ないんですよ。其方こそ罰當りだ。第一すべき事もしないで置いて、偶に良人が樂みに借りたものを、返せなんて云はれた義理かい、お嬢さんが聞いて呆れら。

ヒイト、小篠が聲を殺して泣伏した。

私の血相を、向うで見ると、襖際に立つてた雛子が、頻に拜む。と島田の上へ、伊達先生の畫が見える。

待て、其の方から取懸れで、……雛子の留るのを突き飛ばして、先づ懸物をくるくると捲いた。で、ぐいと内懐から袂へ落して、のんだものです。

(忽然として消えた、と然う云へ。己が承知だ。構ふもんか。汝の一命にや障りやしないや、だが情人の身の上だ、間違つたら、雛子、達引きねえな。)

(そりや、そりや可いけれど、貴下今彼處へ飛込んぢや可厭よ。……後生だから、拜むからさ。いづれお金子の事ですもの、……素手ぢや貴下の顔が立たない。ね、素手ぢや男の顔が立たない。) 成程、云はれりや道理で、此方が最う大分借りてる。が、忌々しく、癩に障つて、何の道、遊んで居る氣はないから、大手を振つて、ずつと出ると、其の茶の間の前を通る。

と此處は薄暗い洋燈です。向うの障子を開けた敷居の上に、差向ひの中腰で居る、……小篠は、と見ると、膝に前髪が付さうにして、目を鼻紙で壓へて居た。が藝妓とは見えぬ、其の風が、下町の御新姐が姑に苛められて居るやうで、あはれともいぢらしかつた。

(おい、女房、此の頃に借を返して、祝儀を出さず、雛子が證人だ。)

と一つ浴せ掛けた。」

五十六

「小篠が、そんな中でも、聲を聞くと泣顔を隠して送つて出てくれました。

(孝さん、最うお歸んなさるの？ ぢやお近い内に、……)

と書ふのが、平辭に行つたものに挨拶をするやうに減入つたがね、やがて、あの婀娜な聲で言ひ足した。

(御機嫌よう。)

と此の聲が、耳について居て未だに忘れられない。

外へ出ると暗い晩です。何んだか小篠さんはじめ、順一さんの事が氣に成つて、直に歸れないやうな氣がしたから、ちき其の角に出て居る、おでん屋の暖簾を潜つて、

(何うだい、景氣は)

なんて、はじめから、暫時話込んで手間取らうと云ふ氣です。でね、煮込を横啣へにして、がぶがぶ、一體胸氣でならないからね、茶碗酒を引掛けながら、別に於登利で、大きな聲でも聞えやしないか。其れとも最う徐々歸るか。どの道、順一は泊込む筈はないから、十二時と云へば遅くも歸るだらう、と頻に暖簾から目を出して、きよろついたもんだからね。おでん屋が、

(旦那、何ぞおとりものでげすかい。)つて低聲で言ひます。……私はずよつとした。申戯ぢやない。懷中に長いものが潜んで居ませう。

(何だ。)

(へ、おとりものがおあんなさいませかね。え、此の邊ぢや、旦那方が一寸々々其のお張込みでございますから。)

は、あ、分つた。で、少し氣取つた。

(む、一寸出張つたのよ。)

(御苦勞様でございます。え、星は何の邊でございますえ、北で……南で……それとも天の川で?)

(おい、其の邊よ。)

つて言つたがね、……何の事だか分りません。おでん屋の方が苦勞人なんだ。

(旦那え、毎度御最良を下さいますから、何時でも其の、おつしやつて下さいまし。)

下働きをしようと云ひます。

(まあ、もう一合燗けやな。)と調子に乗つて飲んでる處へ、二人が悄然と出て来たがね、灯先で透かすと、手を曳いてる。お篠さんの方が、少し慙……凭懸つた工合でね。——順一め籬が弛んだぜ。辰巳屋のお篠さんもやきが廻つた——何事です。が、見付かつちや可笑くないから、ひよいと暖簾から向うへ廻ると……

(や、来ましたね。)

つて屋臺の背後の灯の蔭へ、及腰に成つておでん屋が面を出す。

可笑さは可笑しいし、此方は、おでん屋の居處へ、踏み込んで、屋臺で仕切つて、臭を嗅ぎく、目ばかり湯氣の中で働かせて見て居ると、お篠さんは縮縮の單衣を着て居た、お端折でね、い

い中年増でせう。暗さは暗し、髪は黒し、色の白のがほんのりと、灯の前をスツと通る。……
萬縁叢中紅一點で、背負上の燃え立つやうなのが、ちらりと見えた。義兄は、一件の杖で向側を
並んで行く。……

ト曲角で二人で留まつて、何か、ひそく言つて居ました。

ひよい、と氣が附くと、おでん屋が見えますまい。おや！……角家の羽目板に附着いて、立聽
をしたもんです。這ふやうに引返して、

(旦那、何ですかね、……ここ、に二歩だけあるから、年坊に櫻之實を買つてつてお遣りと、烏が
言ふとね。驚が、嬉しいわねツて涙聲で言ひますぜ。……可哀相に、内證の私生兒があるらしい。
あゝした中で子が出来ちや苦勞をします。……品のいゝ容子のいゝ人達が、何をしたか知りませ
んが、子ゆゑの闇なら憎くはねえね、旦那、見逃してお遣んなさいまし、屹と其の兒が好きなん
でせうさ、櫻之實を買つて歸つて、喜ぶ顔を見る前に、泣を見せちや堪らねえ。……)

(然うよなあ、)

と思はず、私もしんみり言つた。

(え、旦那。)

腕車が其處へ、すつと留まる、と義兄さんは、蹶然と身を躲したもんだがね。」

五十七

「突然、飛んで下りたのは、お篠さんが抱へられた竹家の内箱だつたんだよ。……姉さん、此奴
がね、凡て出這入りの駈引をして、無理に座敷を貫はせたり、……病氣で寝て居るものを顔色で
突いたり、何かする——體の可い昔の遊女の、遺手と新造を兼ねた奴でね。

(小篠姉さん)と怒鳴るのが手に取るやうです。

(おや、お蟹さん、——今歸る處だわね。)

(申戯ぢやありません、いくら電話をかけても、懸けても、……誰だと思ふのさ、お客様は、五
坂さんよ！一寸於登利に根を生しては困るぢやありませんか。滅多に後口が懸りもしないのに、
なけなしのお茶屋も大事な客も失敗つて了ひますよ。御主人泣かせだ、眞個に！……榮耀に藝者
をして居るんぢやありませんまい。……さあ、後は後だ、此の車で歸つて下さい。私や於登利へ
も言分がありますから……)

(否、於登利さんの所爲ぢやないのよ。)と言ふのが、切々に聞える。

(まあ、可いから、疾くおいでなさいなね、それへ乗つて、車屋の祝儀もないんでせう。)と言棄
てる。

(はつ)

と泣いたが、車の上から、

(お蟹さん、濟みません、私や住替へをしませうね。)

(抱へ手があるなら、御勝手さ。)

(畜生、冥土へなら可いぢやないか。)

照君を乗せた火の車が、護謨輪で音もなく空へ走る。

と見送つて、お蟹が、

(ちよつ！ 似たもの夫婦だ、不景氣ツたらありやしない。)

私は猛然と躍り蒐つた。

(御用だツ！)

(ひえ、)と引呼吸で咽喉を伸すと、早腰を抜いて泥濘へぐたりと坐る。

や、これを見て、一目散に遁て歸つた。

五十八

が、何しろ私も静として居られない。金子の工面も工面だけれども、差當り、二人が逢ふ處を

算段しよう。最うあの様子ぢや、於登利へは遣られない、と思つて居ると、——其の間もなかつた。

其晩、於登利に泣かされた聲は二階へも薄々洩れた。けれども、順一が聞いても、お篠は心配をさせまい、と思つたか、病氣の所爲か直に泣くと、笑顔を見せた。其の癖、伊達先生の懸物を、こんな内へ懸けて置くな、と注意をしたのは順一だつたのに。……

で、お篠が、癩に取詰められたのも、順一は櫻之實ゆるだ、と唯思つた。

飯は濟んだし、酒のあと、水菓子と言つけると、別に誂へたでもなく、櫻之實が出たのを見て、お篠が白い指で一つ取りながら、目を腫ぼつたくして、……年坊が、今日も此れを買つて、と強請つたのを、毒だと言つて賺して來た、「蛇毒でもないものを」……とほろりとするのが、露を落して、實が光る。

そんな私でも、姉さんと思へばこそ、二三日前に、近所の人に淺草の四萬六千日に連れられて行つて、鬼灯を買つて頂いたのを——もう自分のは一つだけになりながら、佳いを選つて、藏つて置いて、姉ちゃん、これ上げませう、大きいのを取つといてよつて、五つくれたぢやありませんか。私や紙入に持つて居る、其れだのに、……と涙で語つた。

驚 歸途の辻の立話しは、其の事で、……優しい貴下、一層の事、二人で其處等で買ひませう。其

の櫻之實を持つて行つて……夜に成ると他愛がない、寢惚けて、もしや起きなかつたら、竊と抱いても露地口へ出ますから、喜ぶ顔を見て下さい。姉弟中での容色よし、人形よりも可愛らしい、と又手を取つた。

其處へ箱屋が來たのだ、と言ふ……始末であつた。が、其時の順一の懷中、二歩のほかに電車賃。で、お篠の小遣も察したので、直其の翌日、昨夜も歸宅が一時過……今日は宵の内に歸るつもりで、三時些と下つた頃、戸外を忍んで於登利へ入る。

三和土の處で、殆ど一緒に、小皿へ姫のりを買つて歸つて來る、女中の澤に逢つたのである。

なよ竹

五十九

女房は？……

「一寸近處へ用達に……」

で、居ないと言ふ。尤も此の日、十九貫於登利が居れば、何とか口實を拵へて、順一を上げなかつたかも知らない。……後で知れたが、……其の出先と言ふのが、同じ居廻りの待合で、……

……昨夜、お篠を迎へに來ながら立寄つた、竹家の内箱などと、言ひ合せが出来て居て、たとひ、(じたばた騒いでも)の勢ひで、五坂入道を取持ながら、お篠を其處へ引付けて居たのであるから。

雖然、一體順一は餘り足の近い方ではなかつたし、昨夜の其の日で、よもやと思つたものと見えて、別に小女に内意を含めて置かなかつたものらしい。

家中寂として居たが、其れでも廣間の方には、お約束があると言つて、順一を通したのは小座敷の六疊室。

此處が化傘の難場である。

此の蕪村、然までの名畫でもあるまいに、其處へ坐る、と最うばらくと降つて來た。が障子が嵌つて居らぬ。簾にはまだ早し、開廣げの窓の外が、直に隣家の瓦屋根で、何屋か知らず、見た目も暑く、……賽の河原の燒跡のやうに、一面に炭團が干してあつた。……

澤が煮花を持つて出て、今日は障子の張替へをするんだ、と言つた。

別に降り込みはしなかつたが、其の屋根から、も一ツ上の物干へ、何か取入れに上るさうで、毛むくぢやらの脚が窓へ下つて見えたから、雨戸を閉めて、薄暗い處に坐つて、偶と見ると、其の雨戸の面に、

白 鷺

と朱で書いた御札が一枚貼つて有つた。其れを所在なく凝と視める内に、何故か頻に氣が減入る。

「姉さんは、あの出ていらつしやいますから、聞いて御返事をいたしますつて、可し、」

と言つた切で、しばらくして、――

「澤公、奉公は辛からう。」

「はい。」と妙な顔をしたが、其の意を得たらしく差俯向く。

「こんな處に居て、見やう見真似で、必ず藝者になんぞ成るんぢやないよ。」

と何んの氣なく言つて聞かす、とほろりとした様子で、

「はい、小篠姉さんも、何時も然う言つて下さいます。眞個に優しい方ですわ。私が病氣の時なんか、女房さんと喧嘩をして、休ませて下さいました。早く行らつしやれば可うございませぬね、私も何時でも待つて居ますの。」

「お世辭が可いな、さあ、御褒美。」

と小遣を渡して、

「何しろ、お酒を持つておいで、雛子は？」

「え、それが、あの、彼室の座敷へお約束でございませぬの。」

で、一人で手酌で飲んだが、些とも酔はない。待つて居ても返事が來ない。

六十

手紙にして小遣を包んで歸らう。可し、と小抽斗の附いた硯箱を取寄せて、蓋の埃を拂いて取つた。水入を、と振るとない。其處で杯洗の水を落して、巻紙を披いた。

……一筆申残し候ふ……

と偶と書いたので、はつと思つて、ぴり、と裂いて棄てた。雨戸を開けると、廳で最う薄暗い。……立続けに五六杯、息も吐かずに飲んだが、水のやうで而して苦かつた。

電燈がポーンと點る。

澤公が、ぱたくと駈けて上つて、

「姉さんから、お電話。」と嬉しさうに勇んで言つた。

其の日は何故か、眞暗な、夢のやうな電話口で、

驚 白
「あ、貴下、」